

青森県埋蔵文化財調査報告書 第394集

# 近野遺跡 VIII

—県立美術館及び県道里見丸山線建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

(第一分冊 本文・図版編)

2005年3月

青森県教育委員会



## 『近野遺跡Ⅷ』正誤表

頁	誤	正
目次	第7節 E区放射性炭素年代測定分析	第7節 E区の放射性炭素年代分析結果
73	図54 第E53号竪穴住居跡	図54 第E53号竪穴住居跡(2)
157	第121図	図121
214	(表中FSK158) ESB10P12より	(トル)
280	(図1ダラフ中) 比較試料3	(図1ダラフ中) 比較試料
336	(図201中)	大型住居跡の主軸方向はN-S
343	『三内沢部遺跡』(青森県教委1977)	『三内澤部遺跡』(青森県教委1978)
378	④赤塗が著しく… ⑤パケツ形の器形…	⑤赤塗が著しく… ⑥パケツ形の器形…
385	(住居番号表中15・17) 遺構番号なし	(住居番号表中15・17) 欠番
386	(住居番号表中34・46・57) 遺構番号なし	(住居番号表中34・46・57) 欠番

第  
394  
集

青森県埋蔵文化財調査報告書 第394集

近  
野  
遺  
跡  
Ⅷ

(第  
一  
分  
冊)

二  
〇  
〇  
五  
・  
三

青  
森  
県  
教  
育  
委  
員  
会

# 近 野 遺 跡 Ⅷ

— 県立美術館及び県道里見丸山線建設事業に伴う遺跡発掘調査報告 —

(第一分冊 本文・図版編)

2005年3月

青森県教育委員会





空中写真 (平成13年度撮影)



空中写真 (平成14年度撮影)



縄文土器集合写真



土師器・須恵器 集合写真（第E26-II号竪穴住居跡出土）



線刻のある小型土器 展開写真（柄部）（第E30号竪穴住居跡出土）



同左 底面

## 序

近野遺跡は、特別史跡三内丸山遺跡の南に隣接し、縄文時代中期～後期と、平安時代の遺跡として周知されています。

県立美術館及び県道里見丸山線建設事業により、平成11年度に試掘調査を開始しました。平成12～15年度は約70,000㎡を超える大規模な区域の発掘調査を行いました。

これらの調査のうち、今年度は遺跡の中央の台地部分（E区）について報告します。ここからは、縄文時代中期後半の集落跡と平安時代の集落跡が検出されました。縄文時代については、特別史跡の一部である近野地区の南側の調査を行い、およそ4,500年前の竪穴住居跡群等を検出しました。この遺構群は、特別史跡内の集落跡に連続する同時期の集落跡の一部であることが判明しました。

これらは谷から出土した水場遺構とあわせて、縄文時代の集落跡の全体像を明らかにする貴重な資料となり得るものです。

本報告書が広く文化財の保護と研究に活用され、地域社会の歴史・文化への普及活動に資することを期待したいと存じます。最後になりましたが、発掘調査の実施と報告書作成にあたり、御協力、御指導を賜りました関係各位に対し、厚く感謝を申し上げます。

平成17年3月

青森県埋蔵文化財調査センター

所長 佐藤 良治

## 例 言

- 1 本報告書は、県立美術館及び県道早見丸山線建設事業に伴い平成13～15年度に実施した青森市近野遺跡の発掘調査報告書で、中央の台地部分（E区）を収録している。
- 2 この遺跡は、平成10年3月に青森県教育委員会が編集発行した「青森県遺跡地図」に、遺跡番号01065として登録されている。
- 3 本報告書の編集・作成は坂本真弓・小笠原雅行・水谷真山美・斉藤慶史・杉野森淳子・伊藤山美子・荒谷伸郎・工藤 大・成田滋彦・畠山 昇が担当した。原稿執筆者の氏名は各文末に、依頼原稿については文頭に記している。
- 4 資料の分析、鑑定については、下記の方に依頼した（敬称略）。
 

石器の石質鑑定	弘前大学理工学部教授 柴 正敏
火山灰分析	弘前大学理工学部教授 柴 正敏
炭化木材樹種同定	株式会社 バレオ・ラボ パリオ・サーヴェイ株式会社
炭化種実同定	古代の森研究會
リン・カルシウム含量分析	株式会社 吉環環境研究所
放射性炭素年代分析	株式会社 地球科学研究所
黒曜石産地同定	京都大学原子が実験所 藤科哲男
製塩土器の自然科学分析	パリオ・サーヴェイ株式会社
鉄関連遺物の自然科学分析	JFEテクノリサーチ株式会社

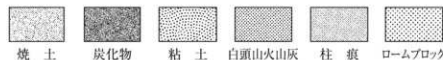
- 5 本書に掲載した遺跡位置図は、国土院発行の25,000分の1地形図「青森西部」を加工したものである。
- 6 遺構・遺物の表現は原則として次の基準・様式に拠った。主たる遺物の分類及び凡例についての詳細は、第1章第5節に記載してある。
  - (1) 挿入の縮尺は、図ごとにスケールを付した。遺構は、1/60・1/30・1/80、遺物は、剥片石器・土製品・石製品1/2、縄文土器・炭塩1器・土俵・鉄関連遺物1/3、土師器・須恵器1/4、礫石器1/4・1/5・1/6・1/8・1/12を基本としている。
  - (2) 公共座標は旧日本測地系に基づき、図中の方位は座標北を表す。
  - (3) 堆積土の色及び土器の色については「新版標準土色帳」（小山正忠・竹原秀雄 1993）を用いた。堆積土中の混入物の大きさについては便宜的に次のとおり表記し、それ以外のものは適宜形状と大きさを記した。混入物の状態については、主たる次のものを記載している。
    - ・粒状 「粒」=粒径2mm以下、「中粒」=2～5mm程度、「大粒」=5～10mm程度
    - ・塊状 「塊」=粒径10mm以下、「中塊」=10～20mm程度、「大塊」=20～50mm程度
    - 「頂状」床点状。「漁集」極度に集中する。「狹在」同じ様な2枚以上の堆積層に挟まれている状態。[L・B]=ローム塊 「焼土B」=焼土塊 「粘土B」=粘土塊
  - (4) 平安時代の堅穴住居跡の主軸方向はカマドの構築された壁に直交する壁が北からどくらくらい傾いているかを示す。表記例) N=115°-E:北から東に115度の位置

- (5) 堅穴住居跡の床面積は塹溝を除く残存する床部分を2回計測した平均値である。
- (6) ビットの表記は、住居跡・土坑内部は「PIT」と、住居跡外部と孤立柱建物跡と柱穴跡は「PIT」と区別した。ビット番号は、調査時の番号をそのまま用いている。本文中に引用される場合と出土遺物が存在する場合はビット番号を付したが、その他の場合は、ビットの深さを表示するに留めた。ビットの深さは住居跡は床面から、それ以外は検出面から計測し、○で表した。
- (7) 本稿で使用した遺構の略号は、本遺跡のE区検出遺構であり、略号の先頭に「E」を付している。ESI=堅穴住居跡、ESK=土坑、ESB=掘立柱建物跡、ESR=土器埋設遺構、ESD=溝跡、ESN=焼土遺構、ESX=その他の遺構である。
- (8) 遺物番号は、堅穴住居跡出土遺物は、遺構ごとに通し番号を付し（遺構名-遺物番号）、掘立柱建物跡・土器埋設遺構・土坑・ビットは、図版ごとに通し番号を付した（図版番号-遺物番号）。本文・観察表・写真図版もこれに対応している。
- (9) 堅穴住居跡は、縄文時代と平安時代の2つの時代に大別される。このため住居跡内出土遺物でも明らかにその住居跡の各時代に伴わない場合がある。この場合はその遺物を遺構外扱いとした。ただし、礫石器に関しては、第1章第5節に示したとおりである。遺構外の遺物観察表には出土した遺構名と層位をそのまま記載している。
- 7 出土遺物には出土地点・層位が分かるよう、遺物観察表を設けた。観察表内の計測値で（ ）は現存値を表す。
- 8 写真図版は第二分冊に掲載している。遺物写真の縮尺は不同である。遺物写真番号は挿入図番号と一致し、写真のみ掲載遺物は丸囲い数字①、②で表記した。
- 9 遺物の実測、写真撮影については、下記の方に依頼した（敬称略）。
 

石器実測素図作成委託	株式会社ラング
遺物写真撮影	シルバーフォート
空中写真撮影	株式会社シン技術コンサル
	株式会社みちのく計画
- 10 引用・参考文献は巻末にまとめて示した。
- 11 出土遺物・実測図・写真等は、現在青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。
- 12 発掘調査の実施及び報告書作成にあたり、下記の方々から御協力・御指導を頂いた。
 

秦 光次郎、齋藤 岳

### 遺 構 の 凡 例



- (一点破線) 硬化範囲
- (二点破線) 貼床範囲
- (破線) 推定線

- P 土器 ○ 分析試料 ◇ 鉄関連遺物 \* 製塩土器
- △-S 礫石器、剥片石器、自然礫 ★ 土製品 ☆ 石製品

# 目次

序	
例言	
目次	
図版目次	
<b>第1章 調査概要</b> .....	1
第1節 調査要項	1
第2節 調査経過	4
第3節 調査方法	6
第4節 基本順序	7
第5節 遺物の分類基準	8
<b>第2章 検出遺構と遺物</b> .....	17
第1節 縄文時代の竪穴住居跡	17
第2節 縄文時代の掘立柱建物跡	85
第3節 縄文時代の土器埋設遺構	102
第4節 平安時代の竪穴住居跡	104
第5節	188
第6節 その他の遺構	248
第7節 遺構外出土遺物	257
1. 縄文土器 2. 土製品(縄文) 3. 土製品(縄文) 4. 剥片石器 5. 礫石器	
6. 土師器・須恵器 7. 土製品(古代) 8. 近世以降の遺物	
<b>第3章 自然科学分析</b> .....	279
第1節 E区埋設土器のリン・カルシウム含量分析	279
第2節 E区出土黒曜石製石器の原料産地分析	281
第3節 E区遺構内出土炭化材の樹種	292
第4節 E区遺構内出土炭化種実	302
第5節 B・E区出土製塩土器の自然科学分析	306
第6節 E区遺構内出土鉄滓の自然科学分析	313
第7節 E区放射性炭素年代分析	326
第8節 E区火山灰分析	332
<b>第4章 分析と考察</b> .....	334
第1節 縄文時代の遺構	334
第2節 縄文土器	340
第3節 剥片石器	346
第4節 礫石器	350
第5節 縄文時代の土・石製品	354
第6節 絵画の可能性のある文様をもつ土器について	358
第7節 平安時代の遺構	361
第8節 土師器・須恵器	366
第9節 古代の土製品	377
第10節 製塩土器	378
第11節 支脚	378
第12節 焼成粘土塊	379
第13節 鉄関連遺物	379
引用・参考文献	382
遺物観察表	387
報告書抄録	

# 図版目次

図1 遺跡の位置と周辺の遺跡	図37 第E30号竪穴住居跡(2)	52
図2 全体図1	図38 第E30号竪穴住居跡(3)	53
図3 基本順序	図39 第E32号竪穴住居跡(1)	54
図4 剥片石器の分類	図40 第E32号竪穴住居跡(2)	55
図5 土師器・須恵器・羽山の分類	図41 第E37号竪穴住居跡	57
図6 全体図2	図42 第E38号竪穴住居跡	59
図7 E区遺構配置図	図43 第E45号竪穴住居跡(1)	61
図8 第E8号竪穴住居跡	図44 第E45号竪穴住居跡(2)	62
図9 第E9号竪穴住居跡(1)	図45 第E45号竪穴住居跡(3)	63
図10 第E9号竪穴住居跡(2)	図46 第E45号竪穴住居跡(4)	64
図11 第E10号竪穴住居跡(1)	図47 第E45号竪穴住居跡(5)	65
図12 第E10号竪穴住居跡(2)	図48 第E49号竪穴住居跡(1)	66
図13 第E10号竪穴住居跡(3)	図49 第E49号竪穴住居跡(2)	67
図14 第E10号竪穴住居跡(4)	図50 第E50号竪穴住居跡(1)	68
図15 第E12号竪穴住居跡(1)	図51 第E50号竪穴住居跡(2)	69
図16 第E12号竪穴住居跡(2)	図52 第E52号竪穴住居跡	71
図17 第E13号竪穴住居跡(1)	図53 第E53号竪穴住居跡(1)	72
図18 第E13号竪穴住居跡(2)	図54 第E53号竪穴住居跡(2)	73
図19 第E14号竪穴住居跡(1)	図55 第E54号竪穴住居跡(1)	75
図20 第E14号竪穴住居跡(2)	図56 第E54号竪穴住居跡(2)	76
図21 第E14号竪穴住居跡(3)	図57 第E54号竪穴住居跡(3)	77
図22 第E14号竪穴住居跡(4)	図58 第E54号竪穴住居跡(4)	78
図23 第E16号竪穴住居跡(1)	図59 第E55号竪穴住居跡(1)	79
図24 第E16号竪穴住居跡(2)	図60 第E55号竪穴住居跡(2)	80
図25 第E18号竪穴住居跡	図61 第E56・58号竪穴住居跡(1)	82
図26 第E19号竪穴住居跡(1)	図62 第E56号竪穴住居跡(2)	83
図27 第E19号竪穴住居跡(2)	図63 第E56号竪穴住居跡(3)	84
図28 第E22号竪穴住居跡	図64 第E58号竪穴住居跡(4)	85
図29 第E28号竪穴住居跡(1)	図65 第E1号掘立柱建物跡	86
図30 第E28号竪穴住居跡(2)	図66 第E2号掘立柱建物跡	88
図31 第E28号竪穴住居跡(3)	図67 第E3号掘立柱建物跡	89
図32 第E29号竪穴住居跡(1)	図68 第E4号掘立柱建物跡(1)	90
図33 第E29号竪穴住居跡(2)	図69 第E4号掘立柱建物跡(2)	91
図34 第E29号竪穴住居跡(3)	図70 第E5号掘立柱建物跡	92
図35 第E29号竪穴住居跡(4)	図71 第E7号掘立柱建物跡	93
図36 第E30号竪穴住居跡(1)	図72 第E8号掘立柱建物跡	95

図73	第E9号掘立柱建物跡……………96	図111	第E26号竪穴住居跡(7)……………145	図149	土坑(4)……………218	図186	遺構外出土縄文土器(2)……………260
図74	第E10号掘立柱建物跡(1)……………97	図112	第E26号竪穴住居跡(8)……………146	図150	土坑(5)……………219	図187	遺構外出土縄文土器(3)……………261
図75	第E10号掘立柱建物跡(2)……………98	図113	第E26号竪穴住居跡(9)……………147	図151	土坑(6)……………220	図188	遺構外出土縄文土器(4)……………262
図76	第E11号掘立柱建物跡……………99	図114	第E27号竪穴住居跡(1)……………149	図152	土坑(7)……………221	図189	遺構外出土縄文土器(5)……………263
図77	掘立柱建物跡出土遺物(1)……………100	図115	第E27号竪穴住居跡(2)……………150	図153	土坑(8)……………222	図190	遺構外出土縄文土器(6)……………264
図78	掘立柱建物跡出土遺物(2)……………101	図116	第E27号竪穴住居跡(3)……………151	図154	土坑(9)……………223	図191	遺構外出土土製品(縄文)……………266
図79	第E1~3号土器埋設遺構……………103	図117	第E31号竪穴住居跡(1)……………153	図155	土坑(10)……………224	図192	遺構外出土石製品(縄文)……………267
図80	第E1号竪穴住居跡(1)……………105	図118	第E31号竪穴住居跡(2)……………154	図156	土坑(11)……………225	図193	遺構外出土剥片石器(1)……………269
図81	第E1号竪穴住居跡(2)……………107	図119	第E33号竪穴住居跡……………155	図157	土坑(12)……………226	図194	遺構外出土剥片石器(2)……………270
図82	第E1号竪穴住居跡(3)……………108	図120	第E35号竪穴住居跡……………155	図158	土坑内出土遺物(1)……………227	図195	遺構外出土剥片石器(3)……………271
図83	第E2号竪穴住居跡……………109	図121	第E36号竪穴住居跡(1)……………157	図159	土坑内出土遺物(2)……………228	図196	遺構外出土礫石器(1)……………272
図84	第E3号竪穴住居跡(1)……………110	図122	第E36号竪穴住居跡(2)……………158	図160	土坑内出土遺物(3)……………229	図197	遺構外出土礫石器(2)……………274
図85	第E3号竪穴住居跡(2)……………111	図123	第E39号竪穴住居跡(1)……………160	図161	土坑内出土遺物(4)……………230	図198	遺構外出土土師器・須恵器……………275
図86	第E3号竪穴住居跡(3)……………112	図124	第E39号竪穴住居跡(2)……………161	図162	土坑内出土遺物(5)……………231	図199	遺構外出土土製品(古代)……………276
図87	第E4号竪穴住居跡……………113	図125	第E39号竪穴住居跡(3)……………162	図163	土坑内出土遺物(6)……………232	図200	遺構外出土土製品・銭貨 (近世以降)……………277
図88	第E5号竪穴住居跡(1)……………115	図126	第E39号竪穴住居跡(4)……………163	図164	土坑内出土遺物(7)……………233	図201	掘立柱建物跡と 大塚住居跡の土軸方向……………336
図89	第E5号竪穴住居跡(2)……………116	図127	第E40号竪穴住居跡(1)……………165	図165	土坑内出土遺物(8)……………234	図202	掘立柱建物跡と 大塚住居跡の規模……………336
図90	第E6号竪穴住居跡(1)……………118	図128	第E40号竪穴住居跡(2)……………166	図166	土坑内出土遺物⑨(ESK120-1)……………235	図203	縄文時代の遺構配置……………339
図91	第E6号竪穴住居跡(2)……………120	図129	第E41号竪穴住居跡(1)……………167	図167	土坑内出土遺物⑩(ESK120-2)……………236	図204	遺構内出土土器共存関係……………344
図92	第E6号竪穴住居跡(3)……………121	図130	第E41号竪穴住居跡(2)……………168	図168	土坑内出土遺物⑪(ESK120-3)……………237	図205	土器集成図……………345
図93	第E7号竪穴住居跡(1)……………123	図131	第E42号竪穴住居跡(1)……………170	図169	土坑内出土遺物⑫(ESK120-4)……………238	図206	礫石器組成……………353
図94	第E7号竪穴住居跡(2)……………124	図132	第E42号竪穴住居跡(2)……………171	図170	土坑内出土遺物(13)……………239	図207	土製品集成図……………356
図95	第E11号竪穴住居跡(1)……………125	図133	第E42号竪穴住居跡(3)……………172	図171	土坑内出土遺物(14)……………240	図208	石製品集成図……………357
図96	第E11号竪穴住居跡(2)……………126	図134	第E42号竪穴住居跡(4)……………173	図172	土坑内出土遺物(15)……………241	図209	縄期のある土器……………360
図97	第E23号竪穴住居跡……………127	図135	第E43号竪穴住居跡(1)……………175	図173	土坑内出土遺物(16)……………242	図210	柱穴配置分類……………361
図98	第E24号竪穴住居跡(1)……………129	図136	第E43号竪穴住居跡(2)……………176	図174	土坑内出土遺物(17)……………243	図211	平安時代型竪穴住居跡の規模と カマドの位置……………361
図99	第E24号竪穴住居跡(2)……………130	図137	第E44号竪穴住居跡(1)……………179	図175	土坑内出土遺物(18)……………244	図212	拡張の分類……………362
図100	第E24号竪穴住居跡(3)……………131	図138	第E44号竪穴住居跡(2)……………180	図176	土坑内出土遺物(19)……………245	図213	平安時代型竪穴住居跡主軸方向……………362
図101	第E24号竪穴住居跡(4)……………132	図139	第E44号竪穴住居跡(3)……………181	図177	土坑内出土遺物(20)……………246	図214	土器の口径器高分布図……………372
図102	第E25号竪穴住居跡(1)……………133	図140	第E44号竪穴住居跡(4)……………182	図178	土坑内出土遺物(21)……………247	図215	住居跡に共存する土師器・須恵器-1……………373
図103	第E25号竪穴住居跡(2)……………134	図141	第E44号竪穴住居跡(5)……………183	図179	ピット群(1)……………249	図216	住居跡に伴伴する土師器・須恵器-2……………374
図104	第E25号竪穴住居跡(3)……………135	図142	第E47号竪穴住居跡……………184	図180	ピット群(2)……………250	図217	住居跡に伴伴する土師器・須恵器-3……………375
図105	第E26号竪穴住居跡(1)……………139	図143	第E48号竪穴住居跡(1)……………185	図181	ピット群(3)……………251	図218	墨書・ヘラ記号土器集成……………376
図106	第E26号竪穴住居跡(2)……………140	図144	第E48号竪穴住居跡(2)……………186	図182	ピット群(4)……………252		
図107	第E26号竪穴住居跡(3)……………141	図145	第E51号竪穴住居跡……………187	図183	ピット群(5)……………254		
図108	第E26号竪穴住居跡(4)……………142	図146	土坑(1)……………215	図184	掘立柱建物跡・溝跡・ 溝格不明遺構・燧土遺構……………256		
図109	第E26号竪穴住居跡(5)……………143	図147	土坑(2)……………216	図185	遺構外出土縄文土器(1)……………259		
図110	第E26号竪穴住居跡(6)……………144	図148	土坑(3)……………217				

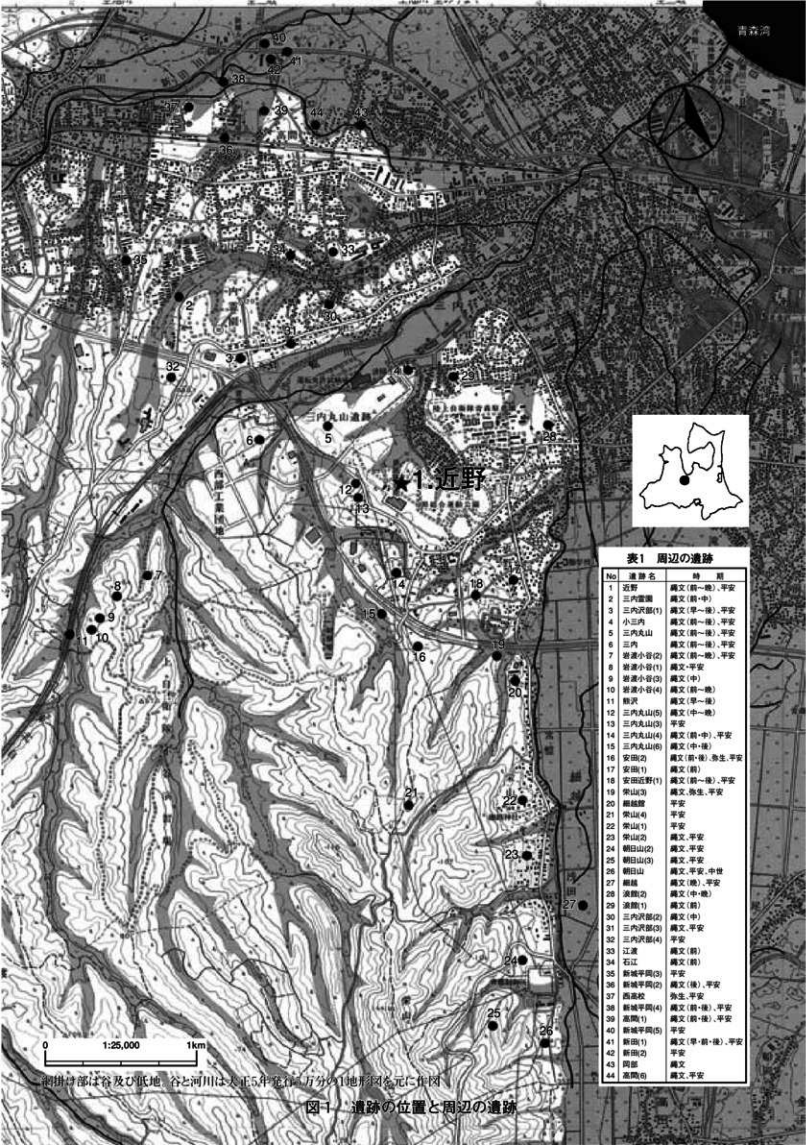


表1 周辺の遺跡

No.	遺跡名	期 層
1	近野	縄文(前-後), 平安
2	三内遺跡	縄文(前-中)
3	三内沢(1)	縄文(前-後), 平安
4	小三内	縄文(前-後), 平安
5	三内丸山	縄文(前-後), 平安
6	三内	縄文(前-後), 平安
7	遊楽小母(2)	縄文(前-後), 平安
8	遊楽小母(1)	縄文(平安)
9	遊楽小母(3)	縄文(中)
10	遊楽小母(4)	縄文(前-後)
11	野沢	縄文(前-後)
12	三内丸山(5)	縄文(中-後)
13	三内丸山(3)	平安
14	三内丸山(4)	縄文(前-中), 平安
15	三内丸山(6)	縄文(中-後)
16	安部(2)	縄文(前-後), 弥生, 平安
17	安部(1)	縄文(前)
18	安部(3)跡(1)	縄文(前-後), 平安
19	栗山(2)	縄文(後), 平安
20	藤越跡	平安
21	栗山(4)	平安
22	栗山(1)	平安
23	栗山(2)	縄文, 平安
24	朝日山(2)	縄文, 平安
25	朝日山(3)	縄文, 平安
26	朝日山	縄文, 平安, 中世
27	藤越	縄文(後), 平安
28	渡敷(2)	縄文(中-後)
29	渡敷(1)	縄文(前)
30	三内沢跡(2)	縄文(中)
31	三内沢跡(3)	縄文, 平安
32	三内沢跡(4)	平安
33	江古	縄文(前)
34	石江	縄文(前)
35	新野(4)跡(3)	平安
36	新野(4)跡(2)	縄文(後), 平安
37	西遊院	弥生, 平安
38	新野(4)跡(4)	縄文(前-後), 平安
39	高岡(1)	縄文(前-後), 平安
40	新野(4)跡(5)	平安
41	新野(1)	縄文(前-後), 平安
42	新野(2)	平安
43	同野	縄文
44	高岡(6)	縄文, 平安

湖川は谷及び低地、谷と河川は、5年を1万分の1地形図に作図

図1 遺跡の位置と周辺の遺跡

# 第1章 調査概要

## 第1節 調査要項

- 1 調査目的  
県立美術館及び県道垣見丸山線建設事業の実施に先立ち、当該地区に所在する近野遺跡の発掘調査を行い、その記録を保存して地域社会の文化財の活用に資する。
- 2 調査期間  
平成13年4月18日から同年11月22日  
平成14年4月15日から同年12月20日  
平成15年4月17日から同年10月22日
- 3 遺跡名及び所在地  
近野遺跡（青森県遺跡番号01065）  
青森市大字安田字近野219、外 青森県総合運動公園地内
- 4 調査面積 総面積 72,600平方メートル  
16,000平方メートル（平成13年）  
26,600平方メートル（平成14年）  
30,000平方メートル（平成15年）  
（本昔掲載分）E区 18,200平方メートル（平成13～15年調査）
- 5 調査委託者  
青森県環境生活部美術館整備・芸術パーク構想推進室  
青森県県土整備部都市計画課
- 6 調査受託者  
青森県教育委員会
- 7 調査担当機関  
青森県埋蔵文化財調査センター
- 8 調査体制  
（平成13年度）  
調査指導員 村越 潔 青森大学社会学部教授（考古学）  
調査員 山口 義伸 青森県文化・スポーツ振興課総括上幹  
（現 青森県立浪岡高等学校教諭）（地質学）  
山田 昌久 東京都立大学人文学部助教授（考古学）  
調査担当者 青森県埋蔵文化財調査センター  
所長 中島 邦夫（現 青森県立図書館長）  
次長 成田 誠治（平成14年3月退職）



総務課長	西口 良一 (現出納局経理課総括主幹)
調査第二課長	福田 友之 (現 次長)
文化財保護主幹	高山 昇 (現 総括主幹)
文化財保護総括主査	川口 潤 (現 文化財保護課文化財保護主幹)
文化財保護主事	小笠原 雅行 (現 文化財保護主査)
	杉野森 淳子、坂本 真弓
調査補助員	浅利 康子、大石 悠治、片岡 典子、後藤 丁春 森川 真佐子、藤原 咲子、高橋 明子、 安達 智美、山内 教子、森内 麻美

(平成14年度)

調査指導員	村越 潔	青森大学教授	(考古学)
調査員	柴 正敏	弘前大学理工学部教授	(地質学)
	葛西 勲	青森短期大学教授	(考古学)
	山田 昌久	東京都立大学人文学部助教授	(考古学)
	渡辺 誠	元名古屋大学文学部教授 (現 山梨県立考古博物館長)	(考古学)
	岡村 道雄	奈良文化財研究所協力調査官 (現 奈良文化財研究所平城京発掘調査部長)	(考古学)

調査担当者	青森県埋蔵文化財調査センター
所 長	佐藤 良治
次 長	福田 友之
総務課長	上藤 和夫
調査第二課長	成田 滋彦
文化財保護総括主査	川口 潤 (現 文化財保護課文化財保護主幹) 上野 茂樹 (現 特別対策局広報広聴室総括主査)
文化財保護主査	木村 高 (現 県立郷土館学芸員)
文化財保護主事	伊藤 由美子、杉野森 淳子、坂本 真弓
調査補助員	田中 悠太、嶋中 加那子、片岡 典子、立花 聡美、 森内 麻美、柴田 洋子、木村 友香、小林 いづみ、 佐々木 順子、成田 誠謙、佐藤 勝之、田中 綾、 嶋守 亜季子、工藤 豪

(平成15年度)

調査指導員	藤沼 邦彦	弘前大学人文学部教授	(考古学)
調査員	柴 正敏	弘前大学理工学部教授	(地質学)
	葛西 勲	青森短期大学教授	(考古学)

調査担当者	山田 昌久	東京都立大学人文学部助教授	(考古学)
	青森県埋蔵文化財調査センター		
	所 長	佐藤 良治	
	次 長	福田 友之	
	総務課長	上藤 和夫	
	調査第二課長	上藤 和夫	
	文化財保護主査	小笠原 雅行	
	文化財保護主事	伊藤 由美子、杉野森 淳子、坂本 真弓、齊藤 慶史	
	調査補助員	伏見 友里、片岡 典子、木村 友香、佐々木順子、 成田 誠謙、工藤 豪、田中 綾、嶋守亜季子、 沖崎 雅美、荒谷 伸郎、久米田さやか、市川裕子	

## 報告書刊行計画

平成13年度	平成12年度調査部分(調査A区・B区・C区・F区の一部)刊行 第315集「近野遺跡Ⅴ」に収録
平成14年度	平成13年度調査部分整理作業のみ、報告書刊行なし *平成15年度以降は平成13～15年調査部分を区域毎に整理作業・報告書刊行とする。
平成15年度	調査西側の台地(調査A区・B区)部分刊行、第370集「近野遺跡Ⅷ」に収録
平成16年度	調査中央の台地(調査E区)部分刊行、本書第394集「近野遺跡Ⅷ」に収録
平成17年度	谷(調査F区)部分刊行予定
平成18年度	南側の台地部分、東側の台地部分と谷(調査C区・D区)部分刊行予定

## 第2節 調査経過

### 平成13年（E区西側）

公園内の構造物や立木の撤去作業、植栽に時間がかかったため、E区の調査には2ヶ月程しか期間をあてられなかった。9月12日から重機を用いて公園造成時の盛土と旧表土の除去を行い、遺構確認作業を行った。平成6・7年に行われた試掘調査で、堅穴住居跡2軒、土坑18基、堅穴遺構2基が検出されており、平成13年度は試掘調査の入った台地中央部の西側先端と試掘調査の入っていない谷際の台地を調査することになった。とくに谷際の台地は、幅1m前後の水道管や電線が数条敷設されており、擾乱が多くみられた。造成時の盛土土壌により、通常の土よりも硬くしめる上水分を吸収し難い性質で、確認作業にやや支障を来した。盛土していない部分はスギの根株が密集していたため、手掘りによる作業を行った。これらの根株は非常に大きく、すべてを伐採するのに多大な労力がかかることから、遺構に関わる箇所以外これらを残して調査を行うこととした。10月26日には精査を終了し、遺構配置図作成及び地形測量を行った。11月20日にはラジコンヘリによる空中写真撮影を実施し、平成13年度のE区の調査を終了した。

### 平成14年（E区中央部）

この年調査予定のE区は、昭和52年の発掘調査で大型堅穴住居跡が検出されたことから遺跡が保存された区域と接している。同じ台地上に拡がることから、これらの時期の集落跡との関連が想定された。また、保存地区を誤って掘削することのないよう、慎重に調査区（E区）との境界を設定した。しかし、試掘調査の結果からある程度は予想されていたが、これら調査区の境界付近は、実際には、公園造成時に大きく削平されていたことが分かった（第4節参照）。

4月15日には100人を超える現場作業員とともに遺構確認作業に入った。平成6・7年に行われた試掘調査により、台地中央部はほとんどが試掘時の埋め戻し土であった。また、5月末まで多くの作業員がE区の精査に入ったために比較的早めに遺構確認を行うことができた。これ以降は他地区の調査に投入されていったため、調査人数は減少していった。進捗に支障をきたす状況に合わせて遺構の確認作業がやり、E区内の調査面積が徐々に拡大したため、作業の進行上、支障をきたしていった。

9月24日には、F区（谷）でトチの水さらし場遺構が検出されたこともあり、県内外から注目を浴びた。9月27日には、木村守男県知事（当時）が現地視察し、トチの水さらし場遺構やその周辺部の保存のために一部建設計画の変更を示唆した。これを受けて関係機関で協議を行うこととなった。9月29日の日曜日には現地見学会を開催し、雨にもかかわらず、約200人が訪れた。見学会は、F区の水さらし場遺構のほか、E区では縄文時代及び平安時代の住居跡や掘立柱建物跡などの遺構、遺構内出土遺物を中心に行った。

10月には、調査期間内に今年度調査予定のE区範囲内を終了することが困難と想定されたため、残った調査分を次年度に行うことを決定した。これにより、精査途中の遺構が積雪によって損傷することを防ぐため、板や土嚢で遺構の保護を行った。また、トチの水さらし場遺構に隣接するE区谷際の遺構は保存されることが想定されたため、一部の遺構内に土嚢を入れて充填させ、壁の崩落を防ぐ処置を行った。10月末にはE区の調査をすべて終了し、11月7日にはラジコンヘリによる空中写真撮影を行った。

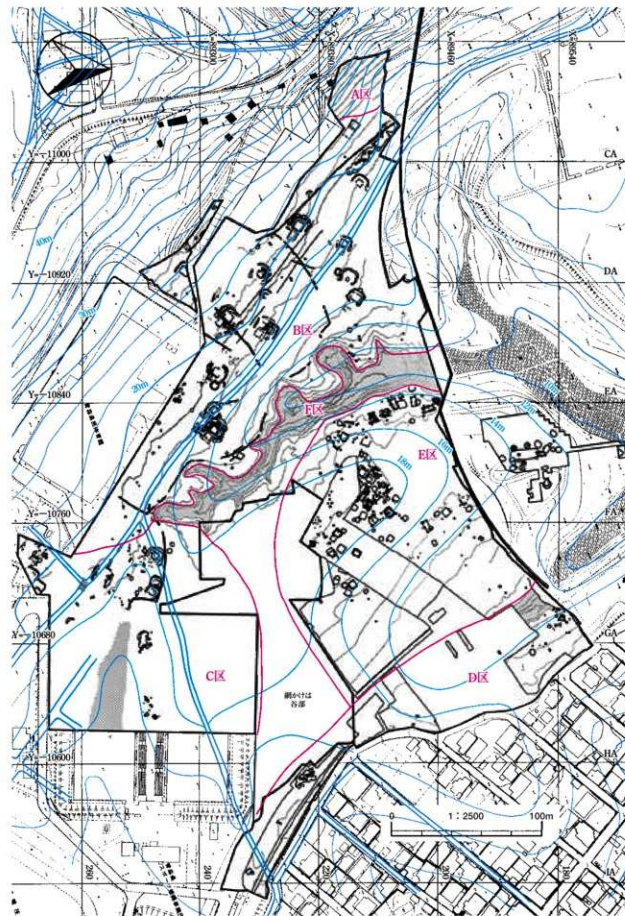


図2 全体図1（青色等高線は運動公園造成前の1972年時点のもの）

12月17日には県教育庁文化財保護課・県土整備部都市計画課から、「トチの水きらし場遺構」とその集落跡全体が保存されることが発表された。これらの保存に至る経緯については「近野遺跡Ⅶ」の第1編第1節で若干触れられている。

#### 平成15年（E区東側・平成14年度の残り・保存区域）

4月17日から平成14年度の残りの調査とE区検出遺構の保存作業を並行して行った。遺構を保存した範囲は、E区谷際および台地中央部で検出された遺構すべてである。保存方法は、内部に細砂を充填させ、遺構を保護した範囲に砂を厚く被覆し、この上にブルーシートを隙間なく敷き詰め、土を盛っている。平成14年度の残りの調査は、前年度行った遺構の保護により、大きな破壊もなく、5月上旬で終了した。

6月上旬からは、E区北東側の支谷（D区谷）までの範囲と支谷の湧水点の位置を確認する調査を行った。盛土直下の第Ⅳ層上面で遺構が確認できなかったことや、遺物の出上も散発的であったことから、一部重機を用いて掘削を行った。支谷の湧水点については、盛上が厚く堆積していたため、試掘坑を2箇所設定し、重機による確認を行った。8月上旬にはE区の調査をすべて終了した。10月上旬には他調査区とともにラジコンヘリ空中写真撮影を行った。（坂本）

### 第3節 調査方法

調査区名とグリッド設定については、平成12年に設定した近野野グリッド系を使用した（「近野遺跡Ⅵ」参照）。平面直角座標第X系のX=90260、Y=-11160を原点AA-000とし、原点から東方向のYラインに二文字のアルファベットを、南方向のXラインには3桁の算用数字を付した。アルファベットはAからTまでの20文字を使用した。Yラインは基点のAAから4m毎にAB・AC・・・ATとし、80m毎に左側文字が繰り上がる（AT・BA・BB）。Xラインは基点のは000から4m毎に001・002とした。グリッドの呼称は北東角の交点の値をアルファベット優先で読むこととした（例：BA-210）。近野遺跡E区はDR-GJライン、185-223ラインに跨る。

標高は運動公園内にある測量基準点から、調査区内に移設した。

遺構確認は随時行い、調査区単位で、検出順に遺構名を付した。遺構名称は頭に調査区、次に遺構種別と番号を付した（例：ES18=E区第8号竈穴作居跡）。

実測図の作成は1/20を原則とし、必要に応じて1/10等で行った。

遺構以外の出土遺物はグリッド単位で、原則として層位毎に取り上げた。

調査に当たっては、土層の堆積状況を観察するため適宜セクションベルトを設定し、土層注記は「標準土色表」を用いた。土層の名称は、基本層序については表土から下位にローマ数字を、遺構内堆積上については上位から下位に算用数字を付すことを原則とした。

写真撮影は適宜行うこととし、カラーリバーサル、モノクローム、ネガカラーの各フィルムおよびデジタルカメラを使用した。（杉野森）

### 第4節 基本層序

近野遺跡の地形や地質については、「近野遺跡Ⅶ」で述べられており、そちらを参照していただきたい。支谷を挟んだ内側台地上のB区と堆積状況に大きな違いはない為、層序番号もこれに準拠する。ここでは、E区の層序について概略を述べる。

E区は低位段丘の沖積段丘に位置し、沖積川へと続く谷地形の支谷（F区）と支谷（YS-5<sup>1</sup>）に挟まれた台地に立地する。標高18-19mの台地中央部からそれぞれの支谷に向かって緩やかに傾斜する地形であると思われる。E区西側の支谷（F区）は標高14m前後から、東側の支谷（YS-5）は標高12m前後から形成されており、比高差は最大7mである。運動公園建設時には、E区も広範な削削を受けており、基本層序第Ⅱ層または第Ⅲ層にまで達する。最も大きく削平を受けたのは台地中央部の一部で、2m程度削平され、基本層序第Ⅴ層にまで達している（下図）。盛土や構造物を除去した時点で旧表土および第Ⅱ層の黒色土が存在する場所は、FA-195とGK-215グリッドを結んだラインから北東側の標高16m以下の地形と削平を免れた台地中央部のみである。標高16m以下の地形では、第Ⅱ層が50cm程度堆積している。（坂本）

註1「近野遺跡Ⅶ」p44のまとめで、E区西側の支谷（※F区）をYS-4、E区東側（※D区谷）の支谷をYS-5と呼称している。

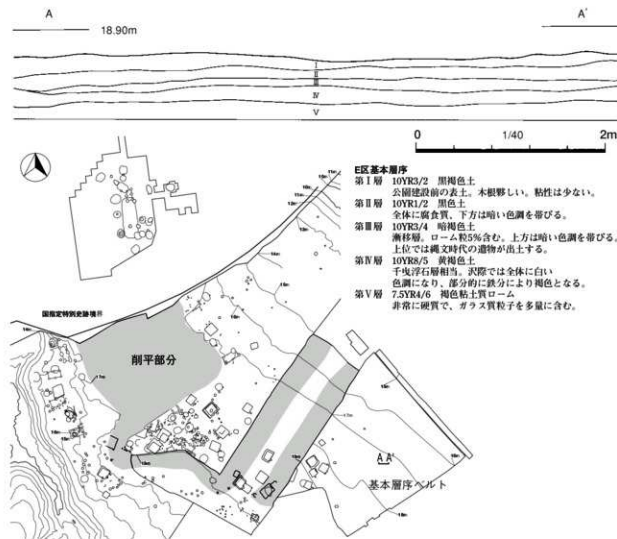


図3 基本層序



## 第 5 節 遺物の分類基準

個々の遺物の属性については観察表を参照されたいが、ここでは各遺物がどのような観点で分類されているか、その基準の説明を行う。

### 縄文土器

土器の分類は土器形式ごとに行っている。数量的に多い土器（特に中間半ば～中期末）について、報告書に使用した形式名を以下に列挙し、その分類基準を掲げておく。なお、今回の調査で出土した土器のうち、数量的に多いのは円筒上層式、中でも d 式と e 式とそれに続く大木系土器である。これらの分類に当たっては、村越・三宅・鈴木氏（村越1974、三宅1989、鈴木1998）の研究によるところが大きい。上層 d 式と e 式の区別は、従来から言われているとおり、粘土継の貼付による隆帯による d 式と、同じモチーフで沈線化した e 式ということで概ね理解できる。

円筒上層 d 式…貼付による文様構成が器高の半分以下まで拡大し、前段階の刺突は見られなくなることを特徴とする。貼付上面は文様の施文されるものと素文のものがある。

円筒上層 e 式…貼付による文様が置換され沈線となることを特徴とする。文様構成は前段階のものと同様のものである。

円筒上層 d・e 式…口唇部（突起部も含めて）に円筒上層 d 式や e 式に共通する特徴をもつが、胴部に分類指標を持たず、地文のみのものである。これまでの調査でも、其伴関係にあるが、どちらの型式に属するか判断がしにくいものである。本報告書では「円筒上層 d・e 式」や「円筒上層 d 式又は e 式」といった表現をしている。

覆鉢式…口唇部に太く深い沈線（「凹状沈線」と表記）をもち、山形口縁頂部が渦巻状となり、胴部にも渦巻状に沈線が施文されるものを特徴とする。

畚箕式…口唇部が無文帯となり、以下に刺突列が並ぶものもある。胴部は 2～3 条の縦位沈線が施文されることを特徴とする。

大木 10 式併行期…口縁部が無文帯と縄文が施文されるものがあり、胴部に J 字や O 字の文様構成を取ること特徴とする。

上記以外に、主に胴部破片で地文のみの土器もある。これらは分類指標となりにくく、基準は曖昧である。

円筒上層式土器…結束第一種、第二種、2 段原体の横回転のみでも、色調や厚さから判断できるものを指している。後者に関しては次に述べる大木系土器でも見られることから、判断基準としては特に曖昧である。

大木系土器…主に分類指標となりにくい胴部破片で用いているが、主に 2 段原体の縦回転、3 段原体、（繊維を含まない土器の）給糸体回転のみの破片を指している。前 2 者については、円筒上層にも見られ、大木系土器の方が目立つという程度のもので、これも判断基準としてはやや曖昧である。

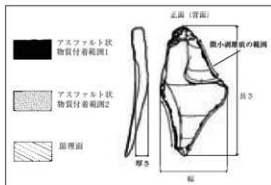
上記から、さらに不明確な地文のみの胴部破片では、中期のものとして判断できるものについては、中期としている。

なお、後期の土器については、(成田1989、葛西2002、見本2003)に拠った。(小笠原)

### 剥片石器

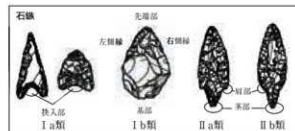
本報告書では石鏃・石槍・石匙・石鏃・石鏃・石鏃・異形石器・二次調整のある剥片・微小剥離痕のある剥片・両極加撃痕跡のある剥片・石核・剥片・砕片の12器種に大別している。各器種の類型基準について下記に示す。

法量：長さ(mm)・幅(mm)・厚さ(mm)・重さ(mm)を小数第一位まで計測した。  
付着物・使用痕：アスファルト状物質の付着範囲は矢印・シントンを使用し実測図中に表現した。微小剥離痕が観察される範囲については右図のような矢印記号を付した。



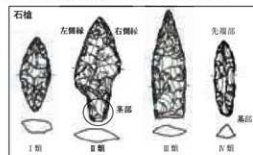
**石鏃**  
鋭利な先端部が作り出された扁平・小型（長さ55mm未満）で矢尻としての機能が想定される石器。

- I 類 無茎
- a 類 凹基 挟込部が作り出されているもの。
- b 類 凸基 基部を凸状に加工しているもの。
- II 類 有茎
- a 類 平基 肩部が水平に形成されているもの。
- b 類 凸基 肩部が張り出さないもの。



**石鏃**  
一端もしくは両端を鋭利に加工し、石鏃より大型（長さ55mm以上）で刺突・切断等の機能が想定される石器。  
I 類 長さ55mm程度の小型のもの。両端が鋭利になるものと一端のみが突出するものがある。  
II 類 基部を有するもの。扁平で体部中央でやや幅広いもの。肩部長さ100mmをこえる大型のもの。  
III 類 長さ55mm前後で断面三角形、厚みがあるもの。

- 素材剥片の一端に挟りを加え、つまみ部を作り出している石器。  
切断・掻き取り等の機能が想定される。  
I 類 縦型 つまみ部に対して肩部が縦長に形成されているもの。  
II 類 斜角型 つまみ部に対して肩部が斜めに形成されているもの。

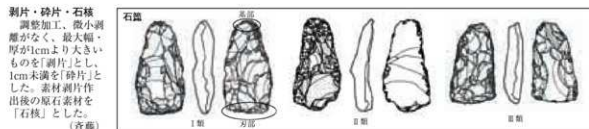


- 石鏃**  
断面円形で棒状の形態をもち、先端部に摩滅、刃こぼれ等の痕跡が認められるもの。穿孔・刺突等の機能が想定される。  
I 類 棒状 断面円形棒状の形態を呈するもの。  
II 類 石鏃転用型 石鏃と同様の形態であるが、先端部に摩滅痕跡がみられるもの。



- 石鏃**  
比較的粗雑な調整加工が全面にわたって不連続に施され、撮形に整形されているもの。掻き取り・掘削としての機能が想定される。  
I 類 調整加工が素材剥片の前面、背面全体に等しく及ぶもの。  
II 類 調整加工が前面側に及ばないもの。  
III 類 急角度の調整加工が側縁部に施されるもの。

**微小剥離痕のある剥片・両極加撃痕跡のある剥片**  
剥離痕が1mmに達しない「微小剥離」が連続的に認められる剥片を「微小剥離痕のある剥片」とし、打面近くに階段状剥離が顕著にみられ、打点対に複数存在する剥片を「両極加撃痕跡のある剥片」とした。



**剥片・砕片・石核**  
調整加工、微小剥離痕がなく、最大幅・厚が1cmより大きいものを「剥片」とし、1cm未満を「砕片」とした。素材剥片作製後の原石素材を「石核」とした。(斉藤)

図 4 剥片石器の分類

## 礫石器

敲磨器：(A類：所磨痕、B類：敲打痕、C類：凹み痕)

敲打痕の中で凹みが深く明瞭に表現されるものはC類とした。

北海道式石冠：器面中央に帯状の敲打痕と側面に広い磨り面をなすもの。

扁平打製・磨製石器：(A：打製石器 B：磨製石器) 破片資料のため形状を特定出来ないが、いわゆる半円状扁平打製石器・扶入状扁平磨製石器の可能性が高いものを区分した。

加工のある礫：縁面に剥離加工を有するもの、破片のため形状を特定できないものも含む。

使用痕跡のある礫片：使用痕跡はあるが破片のため器種が特定出来ないもの。

石斧、石皿・台石類、石鏟、砥石の発見はとくにないが、遺物観察表に分類されている。

その他：付着物のある自然礫、カマド桶茶材として使用された礫など。

掲載方法：礫石器は縄文時代と平安時代の遺構から半々の割合で出土している。縄文時代の遺構から出土した礫石器は縄文時代に帰属するものとしたが、平安時代の遺構から出土した礫石器の中で、縄文時代に特定されるもの(石斧、北海道式石冠、扁平打製石器・磨製石器、剥離加工のある礫)は縄文時代の遺構外出土遺物として扱った。この他の器種は平安時代にも使用されることがあるため、平安時代の遺構内遺物として報告する。遺構外も同様、時代を特定できるもの以外は時代不明として扱った。(杉野森)

凡例



黒色付着物

## 土師器・須恵器 (図5)

観察表計測値：「口径」については口径部、「底径」については底部、「器高」については口径部から底部まで遺存するものの実測値を示している。計測方法は図中に示した通りである。表中の( )内の数値は、「口径」及び「底径」は推定値を、「器高」については現存値を示している。層位：出土位置・出土層位は各遺物破片の出土数が最も多い順に記載している。

### 土師器

「皿」：器高が口径の1/3以下のもの。「杯」：器高が口径の1/3より大きく、2/3未満のもので口径20cm以下のもの。「甕」：器高が口径の2/3以上のもの、器高5～10cm未満の「甕(小)」、器高10～25cm未満の「甕(中)」(器高が不明で判断できないものは甕に含めた)、器高25cm以上の「甕」に細分した。「壺」：頸部が明確に胴が環る器形のもの。最大径を胴部に持つ。甕同様器高による区分が可能であるが、出土量が少ないため、一括して壺とした。「鍋」：器高が口径の1/3より大きく、2/3未満のもので口径が20cmより大きいもの。「小型土器」(ミニチュア)：底径が5cm未満のもの。甕・壺・杯(?)が出土しているが、量が少ないため小型土器として一括した。

### 須恵器

出土量が少ないため、器種分類の大枠については大部分を(五所川原教委2003)に従った。

「皿」：器高が口径の3/10未満のもの。「杯」：器高が口径の3/10以上1/2未満のもの。「鉢」：器高が口径の1/2以上2/3前後のもの。「壺」：明瞭な頸部をもち、最大径が胴部にあり、平底器形のもの。ほぼ直立する頸部を持ち、頸基部にリング状突起帯が環るものを「長頸壺」として分類した。それ以外は

「広口短頸壺」、「短頸壺」等に細分可能であるが、口径部から底部まで遺存するものがないこと、出土量が少ないことから「壺」とした。「大甕」：設置型の大甕貯蔵甕で、原則的に底部が丸底のもの。胴部から底部にかけて、叩き板で叩きしめて整形される。口径30cm以下のものを「中甕」として分類可能であるが、胴部片などでは判別できないため文章中では「大甕」と総称した。観察表中では分類可能なものを「中甕」として記載している。

調整技法「ロウロ」：土師器皿・杯・甕・鍋、須恵器皿・杯・鉢・壺・大甕にみられる。ロウロを用いて成形、整形されたもの。「ケズリ」：削るという明確な意志をもって行われた整形。削られた部分は面を形成し、砂粒が大きめに動く。砂粒の動いた方向に向かって矢印を書き入れたが、単位によっては観察できないものもある。「ナデケズリ」：ケズリとナデの中間に見えるもので、本報告で仮称した。砂粒の動きは少ないながらも観察可能である。底部周辺のように径の小さい部位ではケズリの効果が発生するが、膨らんだ部位では表面上を滑るようになってつけられ、やや緩密な粘上が移動した末端に少量溜まる。調整の単位内にはナデ調整のみられるようなスジが観察される。調整方法はケズリと同様単位のみで、方向が推定できるものにも矢印を書き入れないことでケズリと区別した。

「ナデ」：甕・壺・大甕の内面に施される調整で、粘上の移動はみられず、単位内に細いスジが観察できる。ナデ調整を施す工具にはへら状工具、布・皮・指などが推定される。「近野道跡」の報内では単位内のスジの表現方法について、前者では間隙を細かく、後者では広く表現している。本報告では、特に後者と判断できるものについて単位の末端部を丸く表現するのみとした。

「ミガキ」：内面黒色処理の杯の内面に主に施される調整方法で、細い棒状工具で押しつけるように磨いた痕跡。砂粒は胎土内に溶るため、表面は緻密で光沢がみられる。「タタキ」：須恵器の大甕(中甕)にみられる叩き成形の痕跡。本目と直行する方向に刻み目を入れた叩き板で叩きしめた「平行叩きa類」と、平行する方向に刻み目を入れた「平行叩きb類」の2種に細分される。(永谷)

## 鉄関連遺物 (図5)

鉄生産に伴う遺物である鉄滓、金床石、羽目に鉄製品を加えて「鉄関連遺物」と一括した。ここで用いる用語の定義、観察表の項目に関しては、前報告に引き続き、(田口・穴澤1994)に従う。以下、観察表記載項目の計測目的・方法について述べる。

磁器度…対象物の磁着反応の強弱を測定した項目である。

「標準磁石」(穴澤2005)を用いて8段階で評価した。数値が大きいのほど磁着性が強い。計測方法の詳細は(穴澤前掲)の「磁着度」の項を参照のこと。

メタル度…対象物を含む、酸化していない金属鉄の量と位置を測定した項目である。「特殊金属探知機」(穴澤前掲)を用いて、金属鉄を遺存しないものから順に「錳化(Δ)→H(○)→M(◎)→L(●)→特L(☆)」の5段階で評価した。羽口、金床石については「なし」とした。

磨削角度…羽口の観察項目で出した。羽口が刃に扱えられた状態を止位と考え、羽口と接する刃稜を垂直と仮定する。そこでは磨削部と還元部の項目についても、刃稜と同様に、垂直に形成されると仮定して計測した羽口の装着角度である。(荒谷)

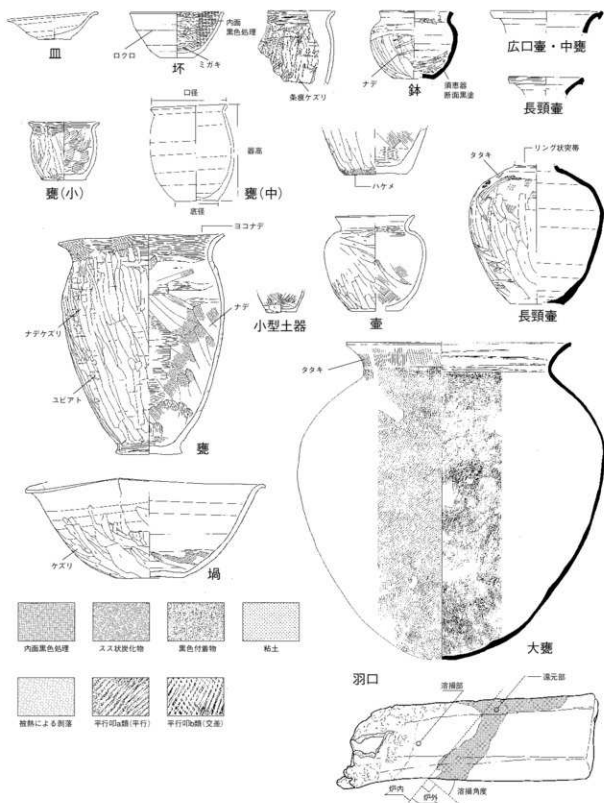


図5 土師器・須恵器・羽口の分類

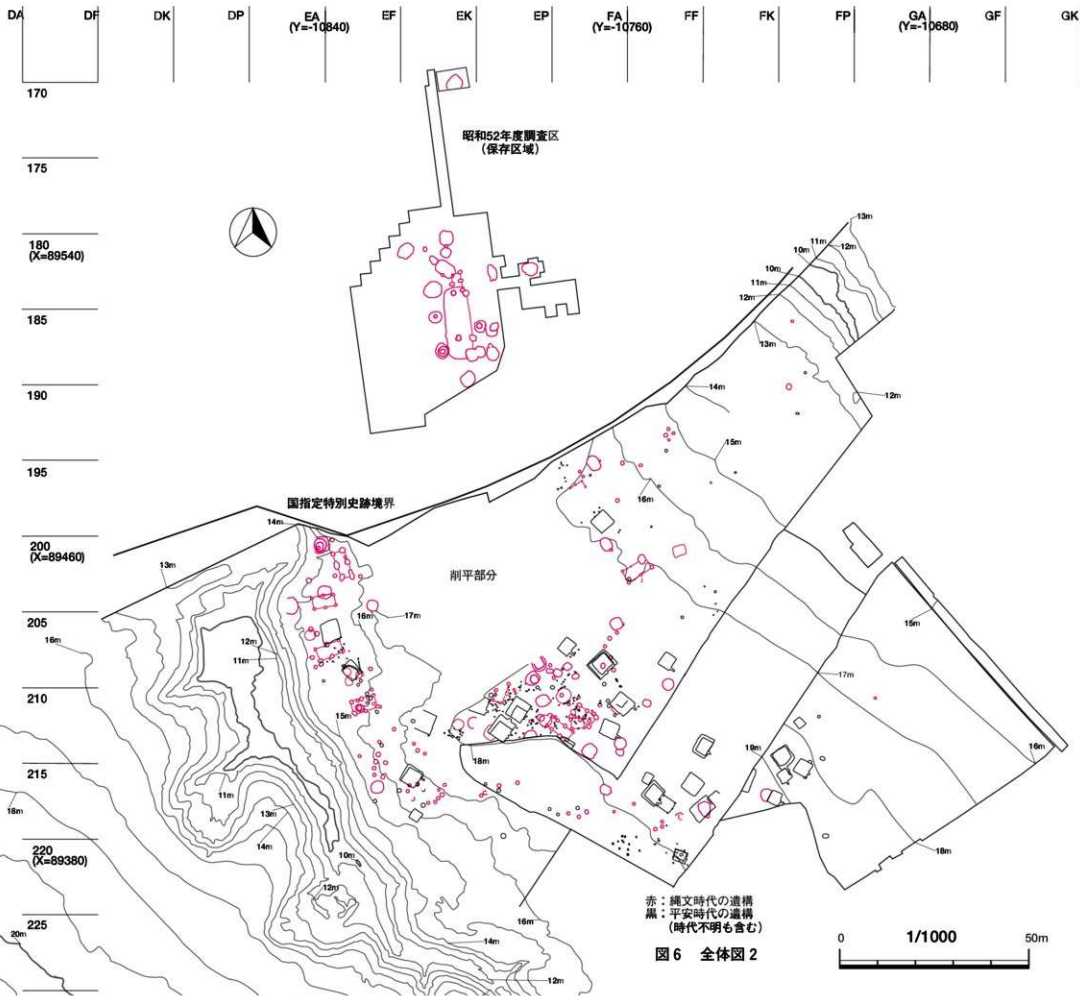


図6 全体図2





DK DP EA EF EK (Y=10800) EP FA FF FK FR (Y=10700) GA GF

185

(X=89500) 190

195

200

205

210

215  
(X=89400)

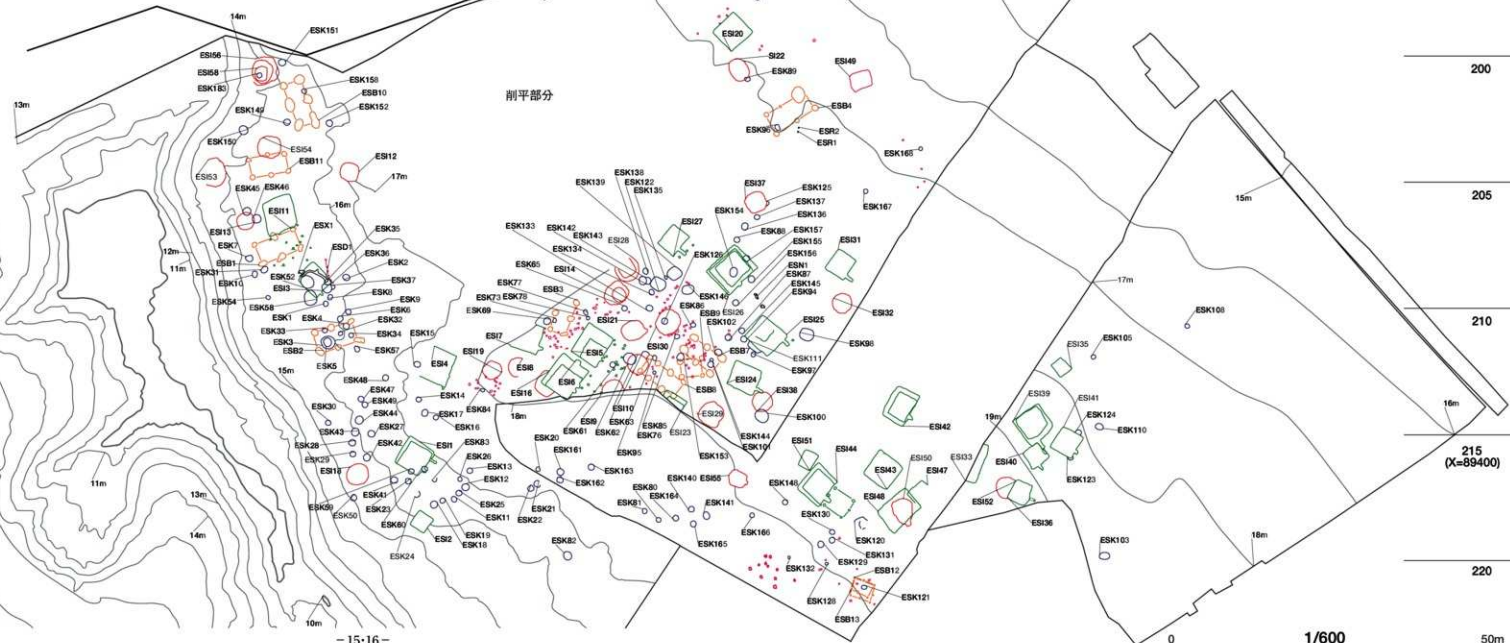
220

赤 縄文住居跡ESI  
 緑 平安住居跡ESI  
 青 土坑ESK  
 桃 ピットEPIT  
 桃 竪立柱遺物跡ESB  
 黒 その他の遺構ESR/ESN/ESD/ESX



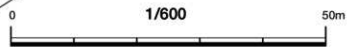
国指定特別史跡境界

削平部分



-15-16-

図7 E区遺構配置図





## 第2章 検出遺構と遺物

### 第1節 縄文時代の竪穴住居跡

#### 第E8号竪穴住居跡（図8）

[位置・確認] E J-212に位置し、南側に向かって緩やかに低くなる地形に立地する。IV層上面で確認した。

[重複] 東側約1/3が風倒木によって覆われている。

[平面形・規模] 正確な平面形は不明だが、径3.05mほどのほぼ円形を呈するものと思われる。推定床面積は4.8㎡である。

[壁・床面] 確認面からの壁高は、北側で19.4cm、西側で8.1cm、南側で2.2cmである。床面は全体的に凹凸である。IV層をそのまま床にしており、階床は見られない。

[柱穴] 検出されなかった。

[炉] 住居跡中央からやや北東寄りに50×48cmの不整形の落ち込みが検出された。地床如と考えられるが、明確な焼け面は検出されず、堆積上中に炭化物が少量混入する。

[堆積土] 2層に分層した。1層と2層の砂理面には炭化物が混入する。黒褐色～暗褐色土で、ロームが混入する。人為堆積か自然堆積か判断できない。

[出土遺物] 床面直上から右英安山岩製の磨り石（5）が出土した。20cmの楕円形鏝を素材とし、両器面ともやや光沢のある平坦面を有する。堆積土から、土器の破片が少量出土した。他の住居跡に比べると出土量は極めて少ない。形式の判明するものは、円筒上層d式期の土器のみである。また、石鏃1点（4）、二次調整のある剥片、微小剥離痕のある剥片3点を含む、総数21点の剥片石器が出土

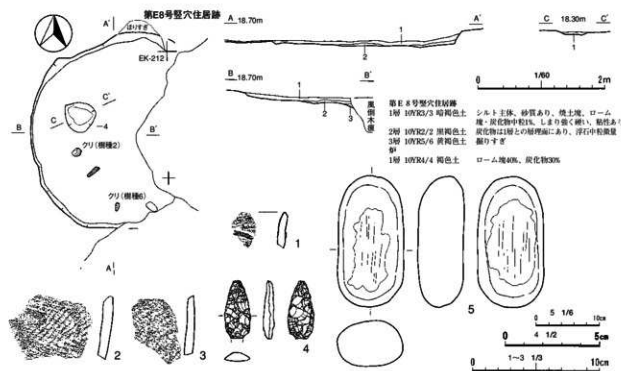


図8 第E8号竪穴住居跡

している。

[時期] 本遺構は円筒上層 e 式期に近い時期と考えられる。

### 第 E 9 号竪穴住居跡 (図 9・10)

[位置・確認] E N・O-212・213 に位置し、南側に向かって緩やかに低くなる地形に立地する。IV 層上面で確認した。

[重複] 南側の半分を運動公園の園路建設時に壊されている。

[平面形・規模] 正確な平面形は不明だが、径 3.2m ほどの円形ないしは楕円形を呈するものと思われる。推定床面積は 5.0m<sup>2</sup> である。

[壁・床面] 確認面からの壁高は、北側で 31.2cm、西側で 23.3cm、東側で 40.7cm である。IV 層をそのまま床にしており、貼床は見られない。床面は堅緻で、特にその周辺はそれが顕著である。

[壁溝] 幅 8-13cm、深さ 2.0-6.0cm の壁溝が全周する。堆積土は住居跡と共通し、装敷等の痕跡は見られなかった。

[柱穴] 掘り方の径が 12-16cm のピットを 3 個検出した。柱痕は確認できなかったが、配置から主柱穴と判断でき、削平部分も含め、本来は 4 本柱穴であった可能性が高い。

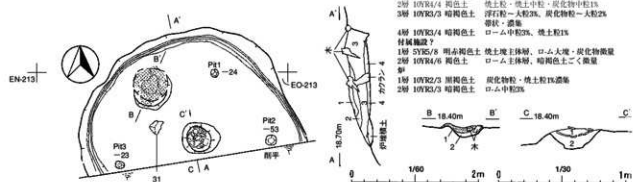
[加] 住居跡は中央から土器片数枚が検出された。径 49×60cm の不整形の掘り方で、深さは 15cm である。底面から 10cm 上に土器片が敷かれている。土器片の上からは炭化物・焼土がわずかに確認された。しかし、土器の下からは焼土等は確認されず、地床材の塗り替えか否かは判断できなかった。また、住居跡北西隅から上面に焼土面がある落ち込みが検出された。掘り方は 65×63cm で深さは 15cm である。住居跡中央部が土手状の高まりをもつ。焼土は 2 層に分層された上層に、70×54cm の不整形で厚さは最大 7cm で広がる。焼土層は明赤褐色で純層をなし、廃棄されたものとは考えにくい。この場所で形成されたものと考えられるが、これを印としてよいか判断に迷う。位置から判断して、この時期に特徴的な付置施設の可能性が高い。

[堆積土] 4 層に分層した。全体的によく締まり、硬い。黄褐色ローム、焼土粒、炭化物粒などがわずかに含まれる。混入物や遺物から人為堆積の可能性が高い。

[出土遺物] 他の住居跡に比べ遺物の出土量は多い。印に使用された土器は、円筒上層 e 式土器である。ただし、1 は泥線文間に縄文原体による馬蹄形押印が施された特殊なものである。堆積土からも円筒上層 e 式土器が出土した。剥片石器は石鏃 4 点 (24・26-28)、石槍 1 点 (29)、石鏃 1 点 (25)、二次調整のある剥片 9 点 (30他)、微小剥離痕のある剥片 3 点、石核 1 点を含む、総数 89 点が出土している。これらのうち石鏃 2 点 (24・26)、石鏃 1 点 (25) は床面および印内からの出土である。礫石器は床面から石皿 (31)、堆積土から扁平磨製石器 (32) が出土した。32 は刃部が鋭利な点と端部の形状から、扶人状扁平磨製石器の破損したものとも推測され、石鋸のように使用されたことが想定される。右側縁を鋭利な刃物状に研磨し、左側面はやや平坦な磨り面をなす。器面は研磨されているが中央は成形時の痕が残存する。端部は割離成形によりややゆがりを呈する。他に、2 層から有孔石製品 (34)、1 層からミニチュア土器 (33) がそれぞれ 1 点出土した。

[時期] 印体土器から、本遺構の構築時期は円筒上層 e 式期である。

第 E9 号竪穴住居跡



第 E 9 号竪穴住居跡  
 1層 100%2/4 暗褐色土 草木灰多量、焼土粒、炭化物中粒1%  
 2層 100%3/4 褐色土 焼土粒、焼土中粒、炭化物中粒1%  
 3層 100%2/3 暗褐色土 浮石群—大粒2%, 炭化物粒—大粒2%  
 壁・床面 ローム中粒2%, 焼土粒1%  
 4層 100%2/4 暗褐色土 焼土堆土層跡、ローム堆積、炭化物中粒  
 5層 50%2/4 明赤褐色土 焼土堆土層跡、ローム堆積、炭化物中粒  
 6層 100%4/5 褐色土 ローム土層跡、暗褐色土ごく微量  
 7層 100%2/3 暗褐色土 炭化物粒、焼土粒1%未満  
 8層 100%2/3 暗褐色土 ローム中粒2%

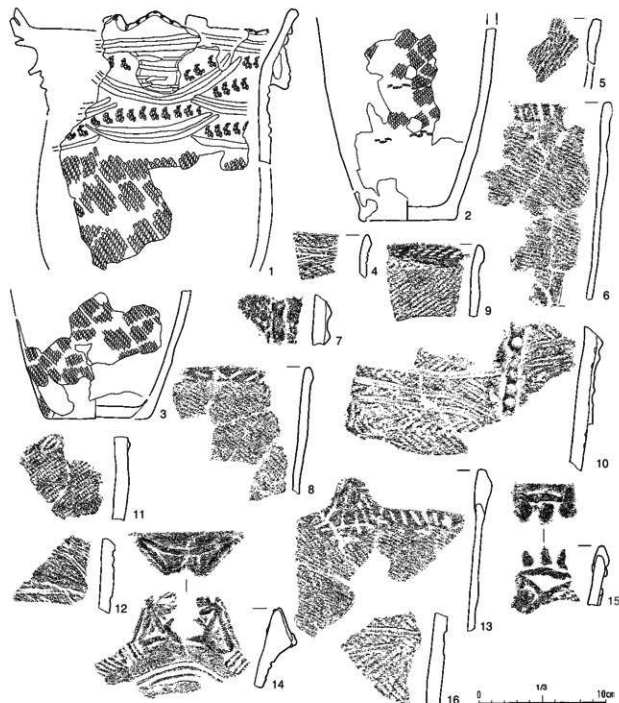


図 9 第 E 9 号竪穴住居跡 (1)

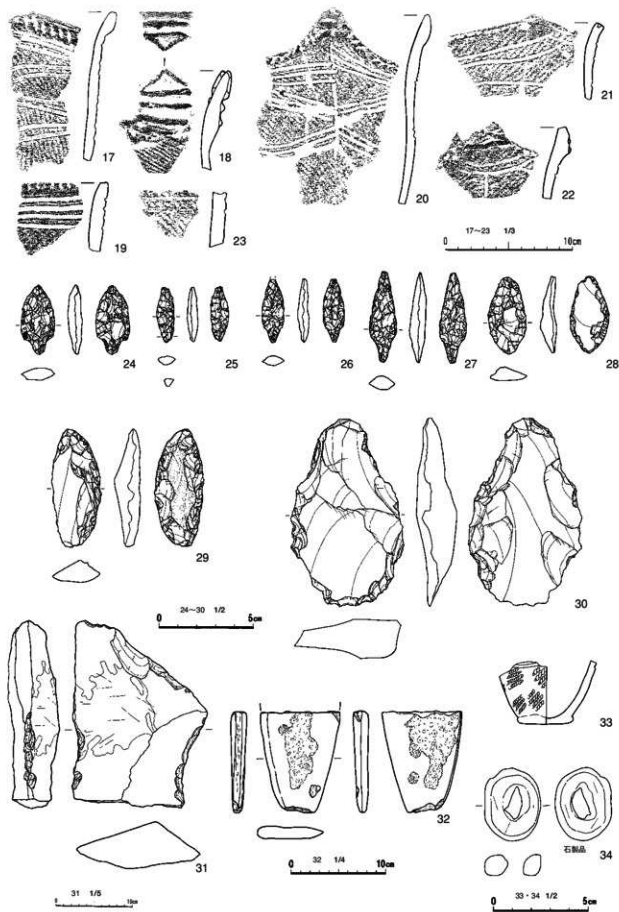


図10 第9号竪穴住居跡(2)

## 第E10号竪穴住居跡(図11~14)

[位置・確認] E P-211・212に位置し、ほぼ平直面に立地する。IV層上面で確認した。  
 [平面形・規模] 南東壁がやや直線的な、径3.19m×3.06mのほぼ円形を呈する。床面積は7.2㎡である。  
 [壁・床面] 確認面からの壁高は北側が41.5cm、東側が33.0cm、南側が39.0cm、西側が30.6cmである。IV層をそのまま床にしており、床面は平坦で堅硬である。  
 [壁溝] 北側で長さ185cmにわたり幅5~10cm、深さ4.0~9.8cmの壁溝が検出された。  
 [柱穴] 検出されなかった。  
 [知] 住居跡中央から土器埋設跡が検出された。掘り方は径33×36cmで、深さは19cmである。土器の内部上向には厚さ最大6cmの焼土層が形成される。北東側の半円状の落ち込みは、堆積土に焼土・炭化物が多量に入り、重複関係から本来床材だったものを、土器埋設跡に造り替えたものと判断できる。

[その他] 柱穴以外のピットが1個検出された。P1:1は径が40×45cm、深さが24cmである。壁際の先端部に位置しており、付属施設の種類と考えられる。  
 [堆積土] 3層に分層した。3層はロームブロックなどを多量に含み、人為堆積の可能性が高い。2層も層全体から遺物が出土しており、人為堆積的である。  
 [出土遺物] 2・3層を主体として遺物が多量に出土した。土器は、復元可能なものも含む円筒上層e式が主体で、他の住居跡に比べても出土量は多い。2層からまとまって出たし、取り上げに当たっては便宜的に上・中・下に分けたものの時期差がほとんどない可能性が高い。如に使用された土器(1)も円筒上層e式土器である。剥片石器は総数427点が出土している。石鏃7点(27・28・30~34)、石鏃1点(37)、石鏃2点(29他)がみられ、二次調整、微小調整痕のある剥片(35・36他)は495点にのぼる。堆積土中、特に2層から3層にかけては碎片が多量に出土している。礫石器は床面から石皿片、3層から石皿(38)、2層から器面全体を研磨された磨り石、堆積土から磨り石2点と加工礫(39)が出土した。他に上層が2点・小型土器が2点の計4点が出土した。41は目・鼻孔・口部が明瞭な作りで、40は眉と鼻部を結土糊で表した作りである。胴部から口部にかけて孔がみられる。ミニ

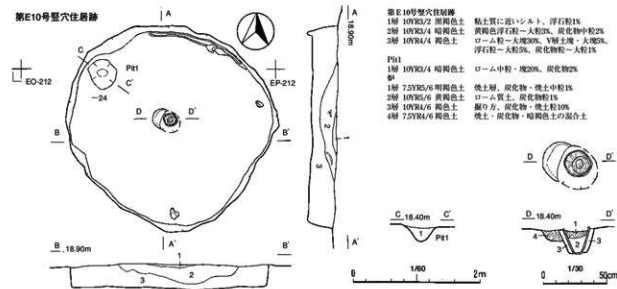


図11 第E10号竪穴住居跡(1)



图12 第E10号竖穴住居跡 (2)

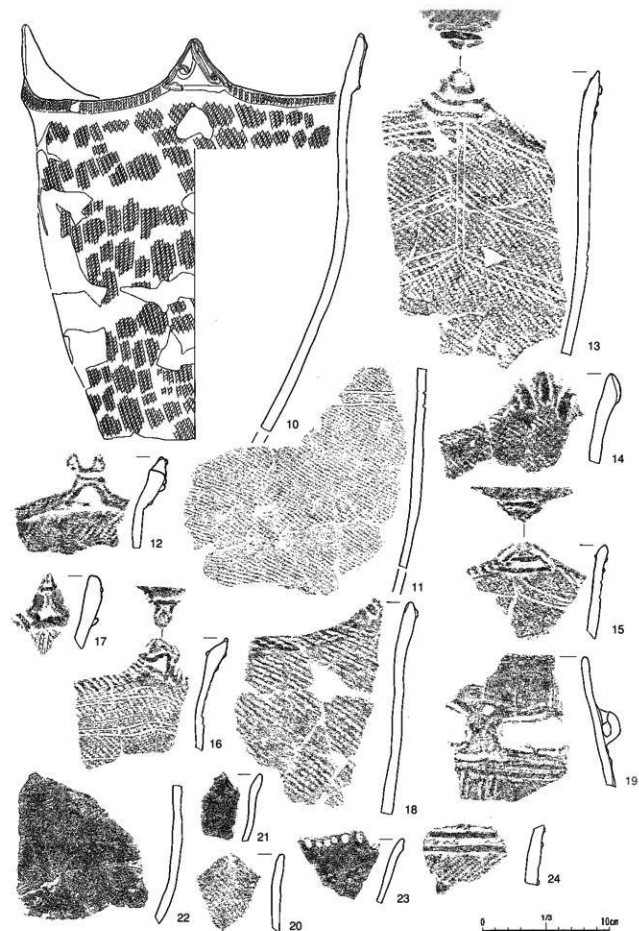


图13 第E10号竖穴住居跡 (3)

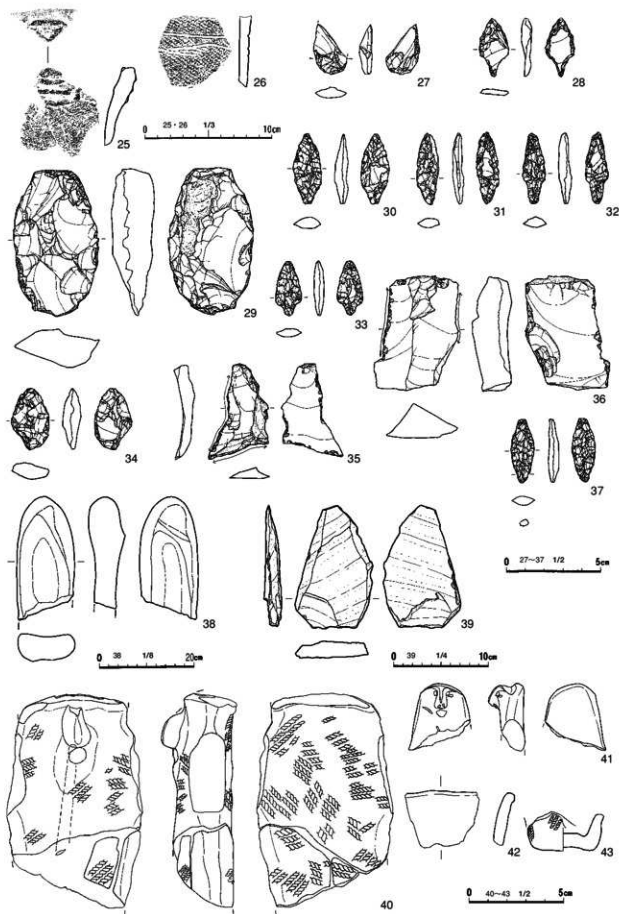


図14 第E10号竪穴住居跡(4)

チュア土器は第2層中から出土し、口縁部と底部破片である。  
[時期] 躯体上部から木造構の構築時期は「間上層e式期」である。

(小笠原)

## 第E12号竪穴住居跡(図15・16)

[位置・確認] E・D・E-204に位置している。標高16.5m前後の平坦地のIV層上面で確認した。  
[平面形・規模] 平面形は長・短軸が2.9mの隅丸方形である。床面積は7.1㎡で、長軸方向はN-8°-Eである。  
[壁・床面] 北壁30cm、南壁5~10cm前後である。床面は凹凸が見られるものの、ほぼ平坦である。また、中央部が広く踏み締められている。  
[柱穴] ビット3個を検出した。壁際に検出したビットは柱穴の可能性がある。Pit1は、何らかの施設跡の可能性がある。深さ27cmである。  
[炉] 住居中央に土器埋設炉を検出した。底部を欠いた深鉢形土器を、直径33cm前後、深さ22cmのビットに埋設し、土器の周縁にはIV層土を主体とした褐色土を上手状に貼り付けている。貼り付けた土の厚3~8cm、高さ5cm前後である。底面は乾燥のため、3cmほどの深さまで赤く、酸化していた。  
[その他] 南壁中央で付属施設を検出した。壁際に掘り込まれた楕円形のビットと壁までの部分とに分かれている。壁は若干外側へ張り出している。壁とビットまでは約30cm離れているが、この部分は1~3cm低くなっている。また、楕円形のビットは短軸53cm、長軸53cmで、深さ35cmであるが、底面には粘土質の黄褐色土を充填しており、使用時の深さは27cmである。ビットの北側(中央側)の縁辺にはIV層土を主体とした褐色土の盛り土(高さ3~5cm)が見られる。また、反対側の壁には2個一対の小ビットが掘り込まれている。  
[埋積土] 6層に分層した。北東壁側では褐色土の堆積も見られるが、床面に堆積しているのは大半が黒褐色土である。炭化物や焼土などを多量に含んでおり、焼失家屋の可能性も考えられたが、炭化

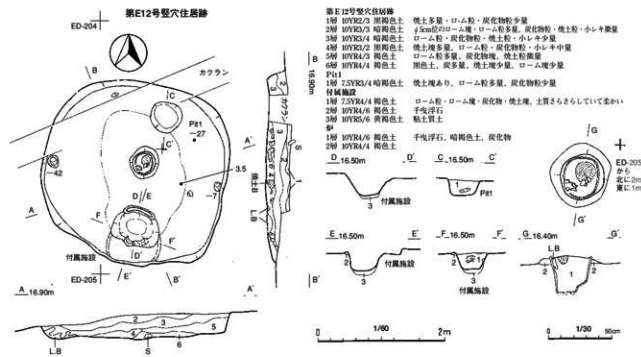


図15 第E12号竪穴住居跡(1)

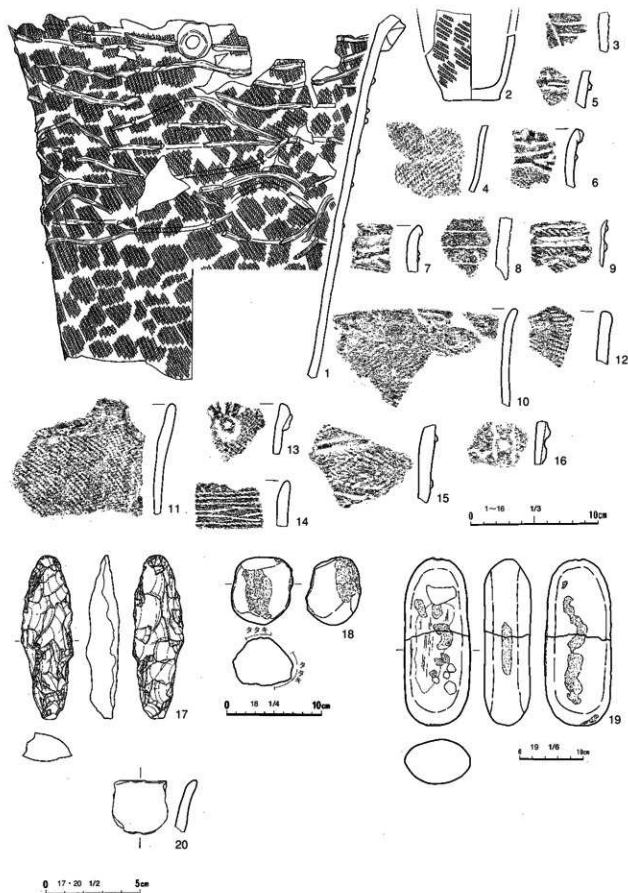


図16 第E12号竪穴住居跡 (2)

材はほとんど出土しなかった。

[出土遺物] 土器は、堆積土中・炉体土器ともに円筒上層d式土器である。炉内から、小型の土器が1点(2)出土した。無文の口縁部破片である。剥片石器は総数11点が出土している。床面から二次調整のある剥片1点(17)が出土した。礫石器は、床面から磨り石1点(19)、床面直上から蔽き石1点(18)と磨り石2点が出土した。19は器面を使用した磨り石であるが、器面のところどころに敲打痕があることから、石棒の未製品の可能性もある。

[時期] 炉体土器から本遺構の構築時期は円筒上層d式期である。

### 第E13号竪穴住居跡 (図17・18)

[位置・確認] DT・E A-206に位置している。標高15.2m前後の平地地のIV層上向で確認した。

[重複] 第E45・46号土坑と重複し、これより古い。

[平面形・規模] 平面形は直径2.6m前後の内形である。推定床面積は4.9㎡である。

[壁・床面] 西壁は壁を確認できなかったが、ほかは10~20cmである。床面はほぼ平坦で、中央付近がやや硬く踏み締められている。

[柱穴] 東壁付近でピットを1個検出した。深さ9cmの浅いもので、柱穴かどうか不明である。

[知] 検出されなかった。

[堆積土] 7層に分層した。暗褐色土や褐色土、にぶい黄褐色土等の堆積が見られる。

[出土遺物] 土器は、堆積土中から円筒上層d式又はe式土器が出土した。判明するものでは上層e式期の土器である。また、石鏝1点(15)、二次調整・微小剥離痕のある剥片5点を含む総数16点の剥片石器が出土した。床面からは数点の土器片と2点の礫石器が出土しただけである。堆積土から磨り石2点、蔽き石1点が出土した。16は床面近くから出土したもので、器面が磨削されており、石棒の未製品とも考えられる。18は三器面に広範囲に敲打痕を有する。17は後の部分に磨り面が明瞭に残るほか、器面全体にも若干磨り痕がみられる。

[時期] 出土遺物から、本遺構は円筒上層e式期に近い時期のものと考えられる。(高山)

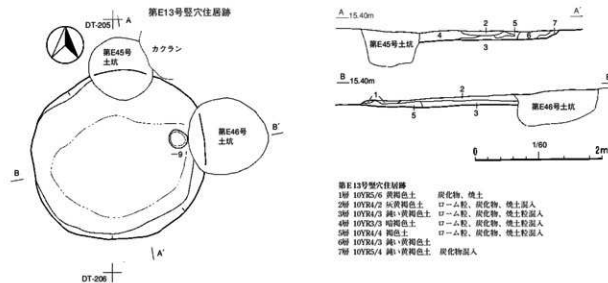


図17 第E13号竪穴住居跡 (1)



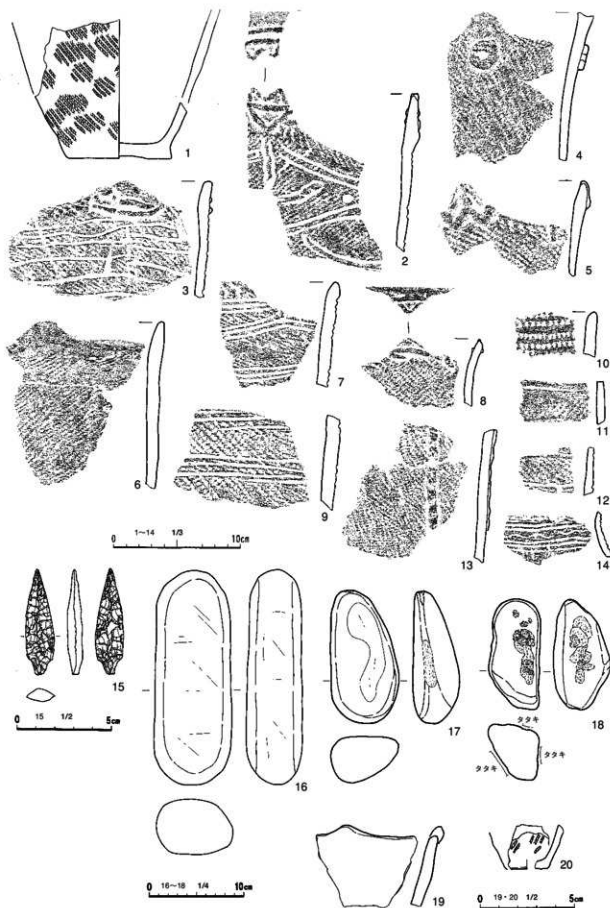


図18 第E13号竪穴住居跡(2)

## 第E14号竪穴住居跡(図19~22)

[位置・確認] 標高18m前後の平川地、E・O・E・P-209に位置する住居跡で、IV層上面で確認した。[近野道跡V]で16Hと確認された住居跡である。当初1軒の住居跡として調査したが、床面から、円形に巡る壁溝の痕跡を検出した。床面の高さはほぼ同じであることから、住居跡を拡張したものと考えられる。このため、拡張前と拡張後の二時期に分けて記載する。

## 第Ⅱ期(拡張後)

[平面形・規模] 平面形は隅丸方形で、やや北西側に張り出している。規模は、長軸3.81m、短軸3.36m、床面積は10.2㎡である。

[壁・床面] 壁は、床面から直線的に立ち上がる形状である。IV層を床面とし、全体に平坦である。

[柱穴] 壁際・床面・住居外で検出した。柱穴の可能性のあるものはPit1・6・32・33である。いずれも壁際に接し、黒褐色土主体の堆積土が混入する。

[炉] 住居跡中央に周堤炉と土器埋設炉が隣接して検出された。土器埋設炉は土器部分が全周せず5cm程度で土器が埋設された部分と、その内部の硬化面が残存するのみである。周堤炉は平面形状が楕円形で、規模は48×38cm、最深約28cmである。断面形状が皿状で深さ約10cmの部分は被熱しているが、その底面直下には径25cmのビット状の掘り込みがあり、内部には炭化種子の混入した黄褐色土で埋められている。検出状況から、土器埋設炉は周堤炉よりも古いか同時に使用されていたと思われる。

[その他] 北西壁中央で付属施設を検出した。床面よりもやや高い位置で、馬蹄形状に掘り残り、内部にビット状に掘り込んでいる。その内部や周囲からは3個の小ビットが検出された。

[堆積土] 暗褐色土主体の堆積土で、ローム土が混入する。床面付近には炭化材が混入する。

## 第Ⅰ期(拡張前)

[平面形・規模] 平面形は円形で、径2.36m、床面積は3.2㎡である。

[壁・床面] 拡張後の住居跡と床面の高さはほぼ同じである。床面は、全体に平坦で硬化している。

[壁溝] 北東側の一部を除き、全周している。断面形状はU字形で、幅5~15cm、深さ4~9cmであり、堆積土は、暗褐色土主体である。

[柱穴] 拡張後のビットと重複することも考えられるが、柱穴と思われるのがPit23・25・27・28である。この内、Pit24・28は黄褐色土主体の土で埋められており、Pit23・25・27は黒褐色土主体の土が堆積している。

[炉] 住居跡中央の床面に土器埋設炉が検出された。埋設された土器は胴部から底部にかけての部位で、胴部が床面から数cm高く設置されている。炉の設置は、ほぼ土器の形状で掘り込んだ後、土器を埋設し、土器の周囲にIV層土を幅4cm、厚さ2~3cm程入れて固定させている。炉内の堆積土は最下部に炭化粒の混入した黒褐色土が堆積し、その直上にIV層土が床面の高さまで堆積しており、埋め戻された可能性がある。

[堆積土] 壁溝及び土器埋設炉の堆積土は暗褐色・黒褐色土で、拡張後の堆積土とはほぼ同じである。

[出土遺物] 2層を主体として遺物が出土した。炉に使用された土器は胴部のみで時期の把握をしにくい。床面からは円筒上層c式期の土器が出土した。石鏝2点(24・25)、石槍1点、二次調整のある剥片2点を含む総数22点の剥片石器が出土している。床面から磨器2点(26・28)、8層から散石(29)が出土し、2層から出土した加工礫(27)は板状に割れた砂岩の礫片に刺削加工を施し



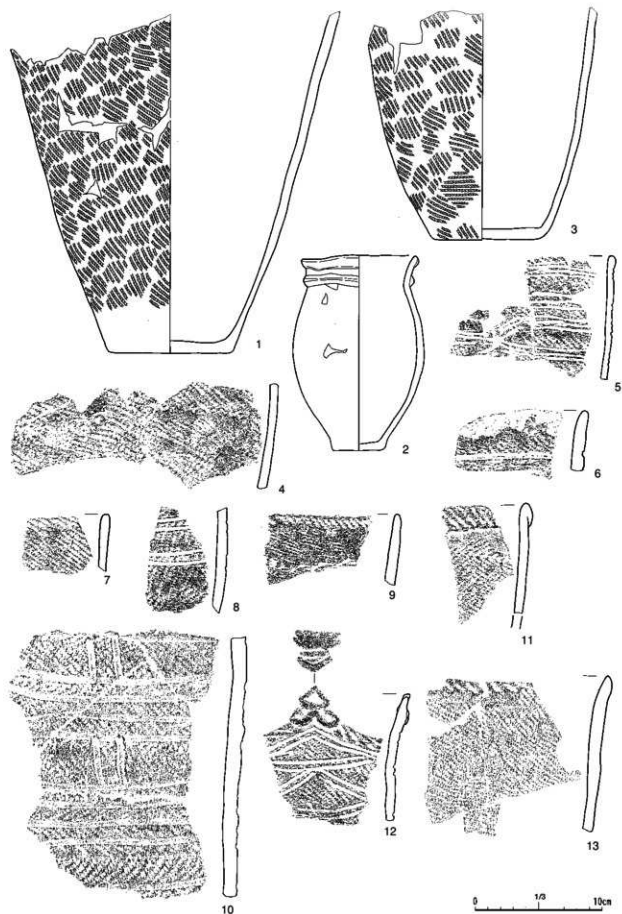


圖21 第E14号竪穴住居跡 (3)

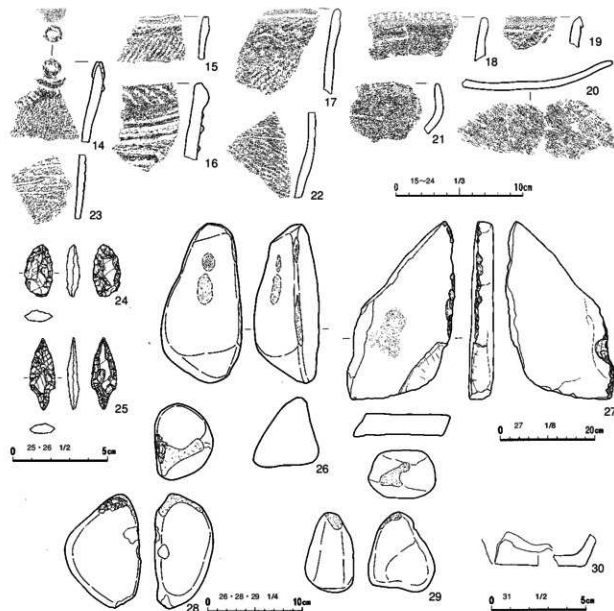


圖22 第E14号竪穴住居跡 (4)

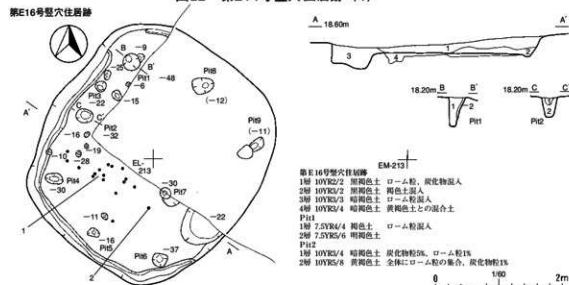


圖23 第E16号竪穴住居跡 (1)

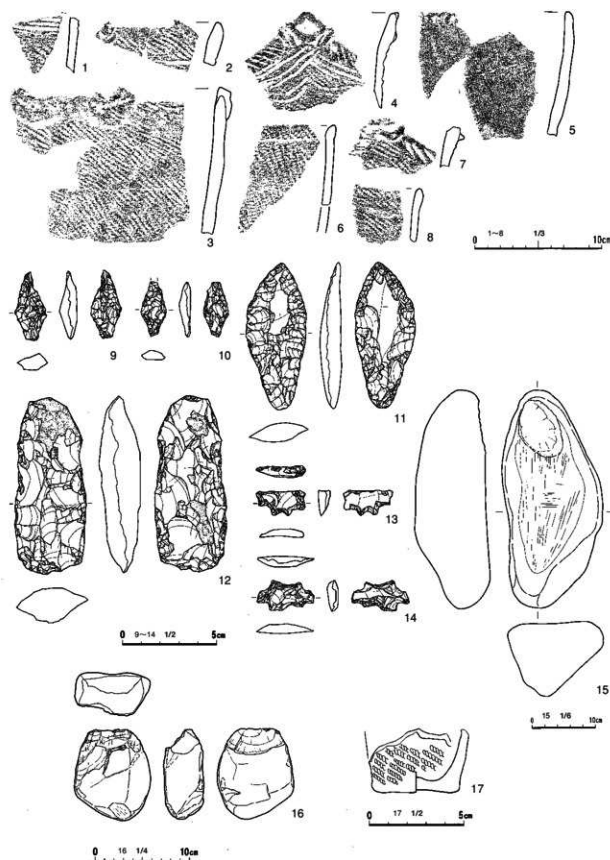


図24 第E16号竪穴住居跡(2)

## 第E18号竪穴住居跡(図25)

[位置・確認] E E-216に位置する。標高15.5m前後の谷に面する緩斜面上のIV層上面で確認した。  
[平面形・規模] 平面形は不明であるが、確認できた部分から推定して、直径3m前後の内形か、楕円形と思われる。床面積は8.9㎡である。

[壁・床面] 壁を確認できたのは北から東側にかけての部分で、壁高は0~20cmである。床面は東側の約半分を確認できた。ほぼ平坦であるが、若干南側が低くなっている。また、西側は壁も床面も確認できなかった。

[柱穴] 確認できなかった。

[炉] 中央からやや東側に寄ったところで、楕円形の地床炉を検出した。深さ12cmで弱い酸化帯が確認された。

[堆積土] 4層に分層した。暗褐色土や黒褐色土がほとんどであるが、隙間ではぶい黄褐色土の堆積も見られた。

[出土遺物] 出土土器は堆積土中からのもののみである。円筒上層d式又はe式から椀林式土器で、水遣槽の時刻もそれに近いものと考えられる。石器は、微小剥離痕のある剥片1点を含む総数4点の剥片石器が出土している。床面から磨り石1点(19)、堆積土から敲磨器2点(18・20)が出土した。19は磨面に平滑な磨り面を有する。20は端部の広い敲打痕を有し、2点とも磨面は研磨されている。このほか、焼成粘土塊2点が出土している。いずれも粘土にぎり、丸めたような形状を呈しており、この内1点(写真92-①)には植物繊維状の凹痕が顕著に認められる。

[時期] 出土遺物から、縄文時代中期中葉から後葉と考えられる。

## 第E19号竪穴住居跡(図26・27)

[位置・確認] E J・K-212に位置している。標高18.4m前後の平坦地のIV層上面で確認した。

[平面形・規模] 平面形は短軸、長軸とも2.67mの隅丸方形で、北東壁の中央が20cm外方へ張り出している。床面積は5.4㎡で、長軸方向はN-46°-Eである。

[壁・床面] 内側が剛平地に面しているため壁高は5cm前後しか確認できなかったが、北東壁20~40cm、南東壁30~40cm、南西壁20cmである。床面には若干の凹凸が見られるが、ほぼ平坦である。

[柱穴] 2個検出した。Pit1の堆積状態は人為堆積と思われる、何らかの施設跡の可能性はある。深さ64cmである。Pit2は深さ11cmと浅いが、柱穴の可能性はある。

[炉] 住居跡中央から若干掘り込まれた地床炉を検出した。長軸35cm、短軸28cm、深さ11cmの規模であるが、焼けた痕跡は弱い。

[その他] 北東壁が壁から20cm張り出している。この張り出した部分に向かい合うように幅16cm、高さ6cmの黄褐色土の盛り土が半円状に巡らされている。内部は床面から17cmの深さがあり、断面は鍋底状である。隙間には2個一対の小ピットが見られる。小ピットはいずれも径10cm前後で、深さには10cmのものも20cmのものがある。

[堆積土] 3層に分層した。上部に黒褐色土と黒色土が見られ、下部はローム質の黄褐色土が床面上に厚く堆積している。

[出土遺物] 床面・床直や2層を主として土器が出土した。床面・床直遺物は円筒上層e式や椀林式



である。剥片石器は石鏃2点(26、27)、二次調整のある剥片7点(29、30他)、微小剥離痕のある剥片9点(28他)、内縁加撃痕跡のある剥片1点を含む総数49点が出土している。礫石器は、付属施設近くから磨り石(石棒木製品?)、床面直上から凹み石(31)、堆積上から磨製石斧片が出土した。31は漏部に浅い敲打痕、器面に凹み痕を有する。この他、堆積土中から土器片1点、焼成粘土塊が出土した。

[時期] 本遺構の時期は床面出土土器から榎林式期と考えられる。

(品山)

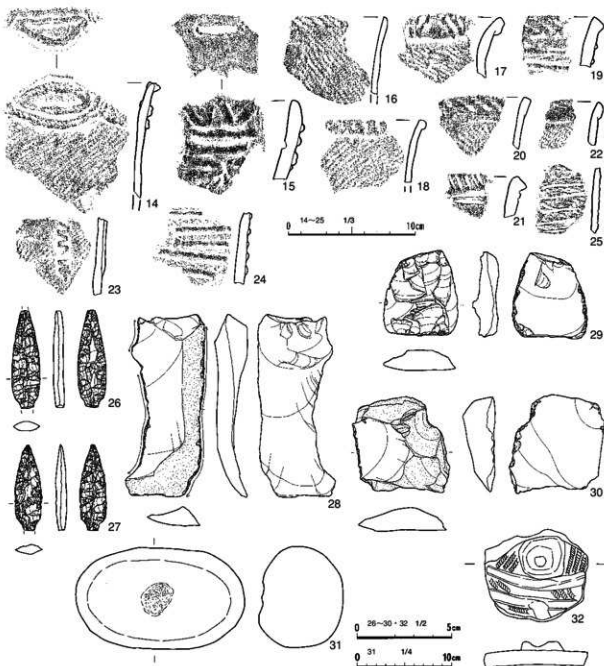


図27 第E19号竪穴住居跡(2)

第E21号竪穴住居跡 『近野遺跡V』で第14号住居跡として報告済み。

#### 第E22号竪穴住居跡(図28)

[位置・確認] E T-200に位置し、南西側が大きく削平されている。V層上面で確認した。焼失家屋であるが、床面から確認面まで約10cmの深さであり、上部からの加圧で炭化材が潰れた状態で確認された。

[重複] 第E89号土坑と重複し、本遺構が新しい。

[平面形・規模] 規模は長軸3.69m、残存する短軸2.46m、短軸の推定値は2.85mで、平面形は楕円形になると思われる。床面積は6.4㎡である。

[壁・床面] 壁高はいずれも10cm未満である。床面は範囲が明瞭でないが、所々暗褐色土のブロックが広がっている状況が確認されており、全体に平坦で硬化している。

[壁溝] 北壁の一部、東側で確認された。幅は約5cmほど、深さ1~5cmで、東側は長さ15m程である。

[柱穴] 床面で7個、住居外で3個の計10個のピットを検出した。この内主柱穴はPit1~4の4個と考えられ、うちPit1~4では柱痕を確認した。柱痕は平面形がPit1は長軸20cmの隅丸長方形、Pit4は径15cmの円形で、いずれの掘り方も径39、41cmである。掘り方埋土にV層のロームブロックを充填させている。対になるPit2・3には住居跡堆積土と同様の暗褐色土が堆積している。付属施設に隣接して検出されたピット2個は主柱穴の配列から、Pit2・3の補助的役割を担うピットの可能性がある。住居外の3個は住居跡との関係は不明であるが、配列や堆積土等から関連する可能性を含めて掲載している。

[炉] 住居跡中央で楕円形の周堤炉が検出された。規模は、周堤幅5~10cm、床面からの周堤最高最大4cm、周堤内燃焼部30cm前後、掘り方60×52cmで、掘り込んだ後、周堤幅に新たに土を充填させ床面よりも若干高くした後、その内部で燃焼させている。内部には炭化粒を含んだ焼熟土が互層になっている。

[その他] 南東側の壁際で、径80cmほどの半円形をした掘り込みが検出された。壁の立ち上がりは緩やかで、床面から約9cmの深さである。主柱穴のPit1~4に挟まれた位置から検出されたPit10は埋め戻されており、上部には貼床と思われる堆積がみられた。このほか、住居跡はほぼ全面で、炭化材及び炭化範囲を確認した。

[堆積土] 上部が暗褐色土で、床面付近では黒褐色土である。

[出土遺物] 床面や堆積土中から遺物が少量出土した。床面出土遺物は、剩下半のみで時期認定の根拠に欠ける。剥片・砕片が4層から床面の炭化材に混じって多数出土した。石鏃1点(8)、二次調整のある剥片5点、微小剥離痕のある剥片3点を含む総数77点の剥片石器が出土している。堆積土から敲磨器が2点(9)出土した。このほか、平坦な器面の磨り石片が出土している。

[時期] 本遺構の時期は2・4層出土土器から内筒1層d式期に近い時期と考えられる。



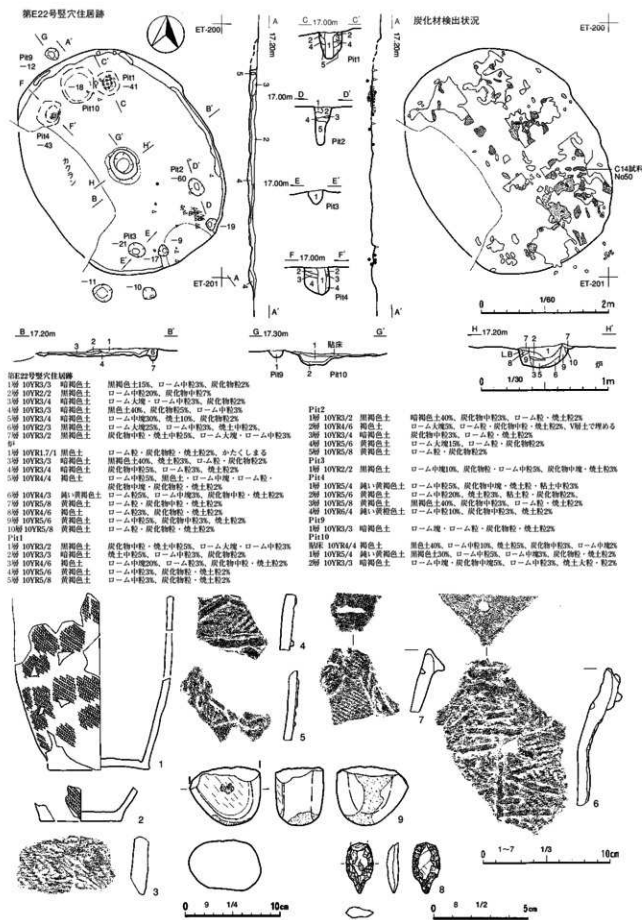


図28 第E22号竪穴住居跡

## 第E28号竪穴住居跡(図29~31)

【位置・確認】標高18m前後の平地地E・P-208に位置する。IV層上面で確認した。【近野遺跡V】で22日とされた住居跡である。住居跡北側は大きく削平されている。当初、1軒の住居跡として調査したが、床面から、方形に廻る溝の痕跡を検出した。床面の高さはほぼ同じであることから、住居跡を拡張したものと考えられる。このため、拡張前と拡張後の2時期に分けて記載する。

## 第II期(拡張後)

【平面形・規模】規模は、残存する東西方向の長さ3.26m、南北方向の長さ3.8mで、残存する形状から平面形はやや南北に長い楕円形と推定される。床面積は19.2㎡である。

【壁・床面】壁は、床面から直線的に立ち上がる形状である。IV層とV層の層面向を床面としている。全体に平坦で、とくに炉の周囲に黄褐色ローム土を主体とした貼床が施されている。

【壁溝】東西壁の一部で検出され、幅5cm前後、深さ2~3cmである。壁積上は、暗褐色土主体である。

【柱穴】床面・壁際・住居外で検出した。柱穴の可能性のあるものは床面のPit1~3・6・9・10の6個と壁際のPit7・14の2個で、後者は壁を斜めに掘りこんでいる。ほとんどのピットは黄褐色ローム土で埋め返されている。

【炉】住居跡中央からやや北に寄った位置で周壁炉が検出された。平面形状は楕円形で、規模は75×69cm、周壁部からの深さ約11cmである。周壁の南側及び炉底面は被熱している。炉の設置は、楕円形に掘り込んだ後、その上端周囲の貼床土に軽石質粘土を幅5~10cm、高さ約2cmほど巡らせている。炉壁からは炭化材が検出され、炉内の堆積土は炭化殻や焼土の混入した褐色土が堆積している。炉は埋め戻された可能性がある。

【堆積土】段上部は黒褐色土の堆積土で、中位から下位にかけて褐色土と暗褐色土が互層となる。中位から下位にかけては人為による埋め戻しの可能性が高い。

## 第I期(拡張前)

【平面形・規模】規模は、残存する東西方向の長さ2.5m、南北方向の長さ2.4mで、残存する形状から平面形は方形と推定される。床面積は5.4㎡である。

【壁・床面】壁は確認されなかった。床面は平坦である。

【壁溝】南壁全体、東壁・西壁の一部で検出され、幅8~16cm、深さ2~9cmである。

【柱穴】貼床下やピットの重複関係から、9個が相当する。柱穴は、床面で7個、壁溝で2個が検出されている。第II期の竪穴住居跡のピットと共通するものもあると考えられる。

【炉】第II期竪穴住居跡の周壁炉と同重複して、住居跡中央から床庫炉が検出された。平面形状は隅丸長方形で、規模は41×27cm、深さ3cmである。底面は平坦で硬化しており、炭化殻の混入した堆積土が厚さ2cm程度堆積している。

【堆積土】第II期拡張後の貼床下、地山面の床面と共通している。ピットや壁溝の堆積土は褐色土・黄褐色土主体で、第II期住居跡とはほとんど違いがない。

【出土遺物】1・3層を主体として遺物が多量に出土した。床面出土遺物は円筒上層c式である。堆積上出土遺物は床面から3層では円筒上層d・c式で、1層では椀式土器が混在する。1層中から小腰土器の底部が1点出土した。器表面にスス状炭化物の付着が見られる。剥片石器は石鏃6点(39~41・43・45・46)、石錐1点(44)、二次調整のある刺片17点(42他)、微小刺痕痕のあ





る剥片9点を含む総数151点が出土している。このほか堆積土から蔵器1点(47)、磨り面を持つ礫片3点が出土した。

[時期] 本遺構の時期は、第Ⅱ期床面出土遺物から円筒上層e式期と考えられる。(坂本)

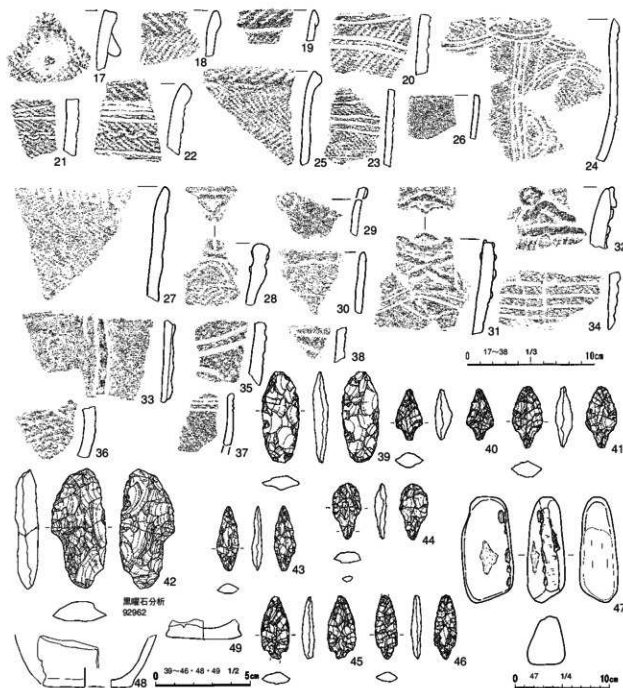


図31 第E28号竪穴住居跡(3)

### 第E29号竪穴住居跡(図32~35)

[位置・確認] 調査区南側のE S-213・214に位置し、Ⅳ層で黒褐色土の円形プランを確認した。

[平面形・規模] 平面形はほぼ円形で、規模は長軸3.74m、短軸が3.57mである。床面積は10.3㎡である。

[壁・床面] 確認面からの壁高は北で26cm、南で51cmである。床面は平坦で硬くしまり、Ⅳ層をそのまま床にしている。

[柱穴] 床面からピットを5個検出した。柱を中心にPi11・2・4・5が柱穴を構成する可能性が高い。

[炉] 中央部に円形の土器埋設炉を検出した。掘り方は径43cm×46cmで、深さは27cmである。土器の内部中程に厚さ最大2cm程度の焼土層が形成される。

[その他] 床面から上坑を2基検出した。上坑1は住居北寄りに位置する。隅丸方形で規模は長さ55cm、幅53cm、深さ12cmである。堆積土は黒褐色土を主体とする2層に分層し、1層では剥片と砕片の集積を検出した。2層は焼土粒を多く含む。上坑2は住居南寄りに位置する。南北に長い不整形で、長軸90cm、短軸54cm、深さ16cmである。堆積土は黒褐色土を主体とする2層に分層した。

[堆積土] 黒褐色土を主体とする8層に分層した。2層と3層は炭化物、ローム小粒を多く含み、遺物も多く出土していることから人為堆積である可能性が高い。

[出土遺物] 1~3層中から土器と剥片などが極めて多量に出土した。土器は円筒上層d式やe式で後者が多い。特に使用された土器も同じ時期のものである。礫石器は床面から右皿1点(62)、堆積土から蔵器器片4点、土坑1から玉髄の小円礫が出土した。剥片石器は2層で剥片集中ブロックが検出され、土壌篩別によって約1,500点の砕片を回収した。石鏃7点(48・49・52-55・61)、石筈1点(60)、石匙1点(56)、石槍1点、二次調整のある剥片21点(50・58・59他)、微小剥離痕のある剥片1点、石核8点(51・57他)を含む2,600点が出土している。

3層に砕片1,338点が含まれており、2層では定形石器、石核が多く出土している。土製品は1~3層中から小型土器が8点(64他)、3層中から土偶1点(63)・土冪が1点(72)の計10点が出土した。土偶は頭頂部に対の貫通孔が見られる。

[時期] 本遺構の時期は炉体土器や堆積土出土土器から、円筒上層e式期と考えられる。(伊藤)

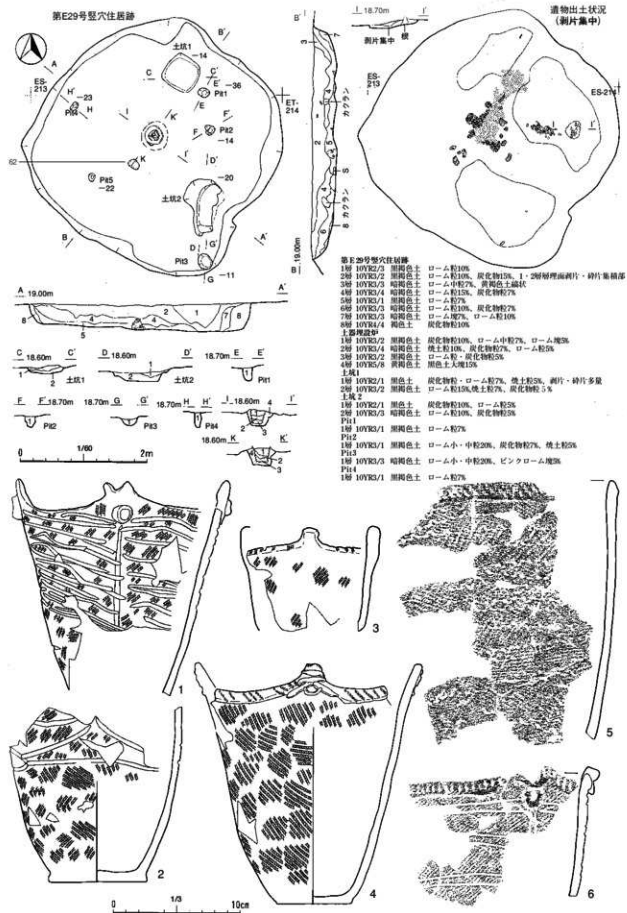


図32 第29号竪穴居跡 (1)

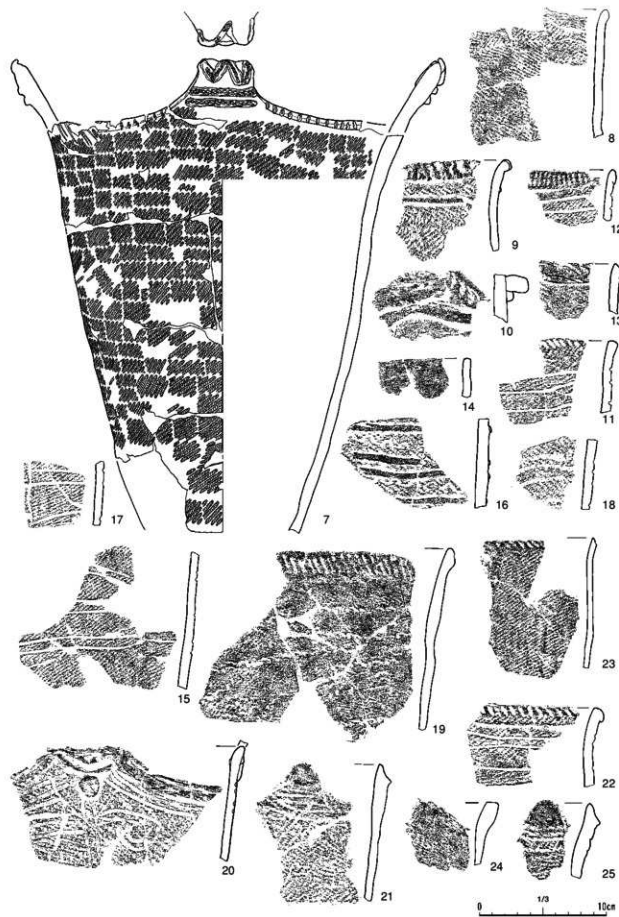


図33 第29号竪穴居跡 (2)

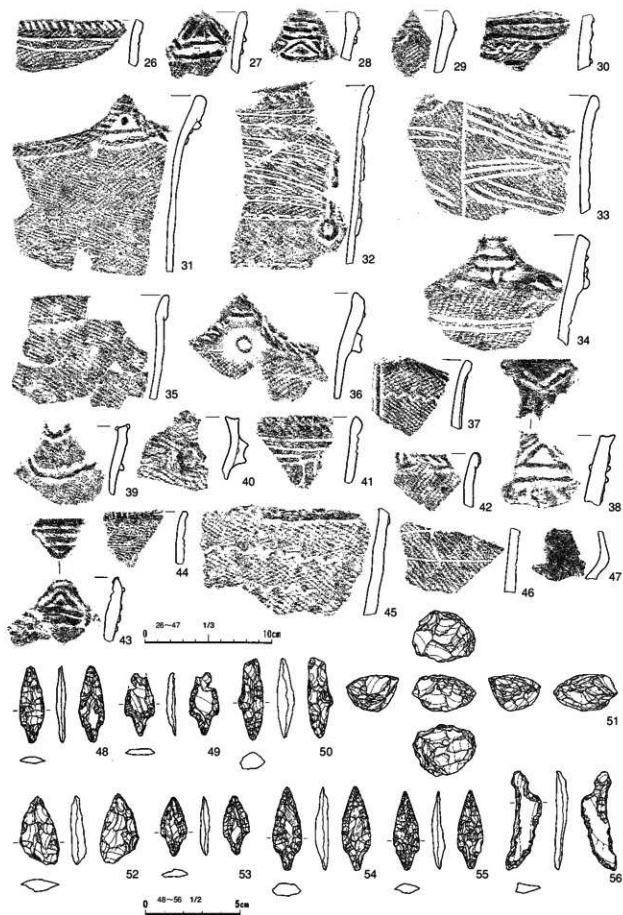


圖 34 第 E29 號豎穴住居跡 (3)

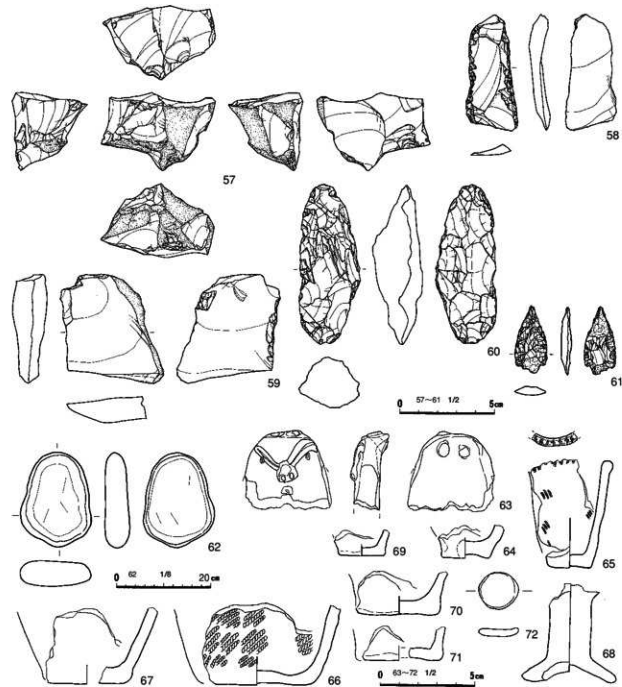


圖 35 第 E29 號豎穴住居跡 (4)

第E30号竪穴住居跡 (図36~38)

[位置・確認] 「近野遺跡V」で18Hとされた住居跡である。E・Q・R-210に位置する。IV層上面で確認した。

[重複] 第E126号十坑と重複し、木造構が新しい。

[平面形・規模] 平面形は楕円形に近く、規模は長軸4.07m、短軸3.71mで、床面積は10.4㎡である。

[壁・床面] 壁は床面からやや開いた状態で直線的に立ち上がる。床面は、IV層とV層の層面間に作られており、平坦である。貼土は今の周辺に暗褐色土の広がりが確認される程度である。

[壁溝] 床面と壁の接する部分が全体的に床面よりも低くなっているが、溝としては確認出来なかった。

[柱穴] 床向・壁中・住居外でピットを検出した。このうち、主柱穴は配置や規模により、床面から検出されたPit 4・5・12・14・15である。柱痕は確認できなかった。ピット堆積土全体に褐色土・暗褐色土主体で、埋め戻された可能性が高い。これと別に壁中から検出されたPit 0・11、やや不明瞭なPit 6・22は住居跡の上層との関連が考えられる。

[炉] 住居跡中央の床面に不整な楕円形の周境炉が検出された。規模は、78×62cm、周境幅数cm、周境高さ3cm、周境内燃焼部48×30cmである。炉の北側周境は床面よりも2cm程低くなっている。ここを掘り込みその周境にローム土を主体とした土を巡らしている。炉の南東側の部分には軽石質粘土が用いられている。底面は炭化土下部には炭化殻を含んだ土が薄く堆積するが、上部は住居跡と同じ堆積土である。

[その他] 北東側の壁近くで、不整な円形をしたピット状の掘り込みと段状の付属施設が検出された。規模は径36cm、深さ29cmである。壁の立ち上がりは緩やかで、底面にはやや起伏があり、全体に硬化している。堆積土は暗褐色土主体で上部にローム塊が含まれていることから、人為的に埋められた可能性がある。内部からは破片が出た。この付属施設の構築方法は径66cm、深さ29cmほど円形に掘り込んだ後、その中に馬蹄状に粘土をいれた状態にしている。粘土は南西側に最も貼り付けられ、底面から上部にまで及ぶが、ここ以外の場合では上部のみ使用されている。粘土は褐色土との混合土で、白色粘土を用いている。

[堆積土] 暗褐色土主体だが、黒褐色土やロームブロックが混在した堆積状況であり人為堆積の可能性が高い。

[出土遺物] 堆積土中を主として土器が出た。床面から出土した円筒上層d式又はe式土器は2層出土土器と接合している(5)。また、炭化材に混じって破片が多数出土した。石鏝4点(20・21・23・25)、異形石器1点(24)、石核2点、二次調整のある剥片7点(22他)、微小剥片のある剥片9点、両極加撃痕跡のある剥片1点を含む総数431点の剥片石器が出土した。床面で石鏝2点(20・21)及び剥片217点が確認されている。礫石器は、床面から吹き石2点(31・32)、黒色物付着の礫(29)、堆積土から石皿2点(27・33)、敲磨器4点(26・28・30)、付属施設から吹き石、Pit 4から敲磨器2点の計12点出土した。このほか、2層中から小型土器が1点、6層中から土偶が1点出土した。小型土器は、底面に弧状文と直線を組み合わせる全面に施文し、器表面には底辺部寄りに横位に殺位を、その上に縦位の沈線を描文している。

[時期] 木造構の時期は、床面出土土器から円筒上層d式又はe式に近い時期と考えられる。(坂本)

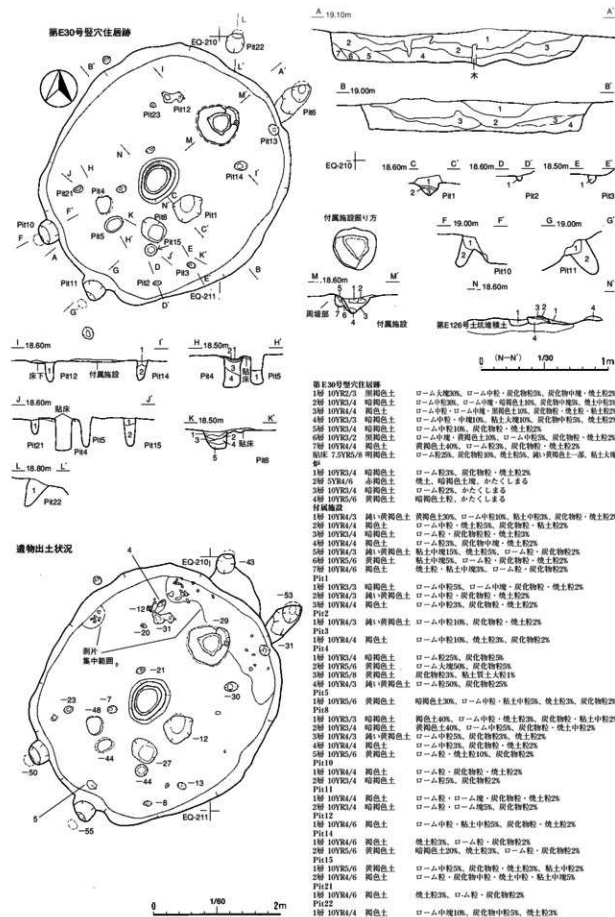


図36 第E30号竪穴住居跡 (1)

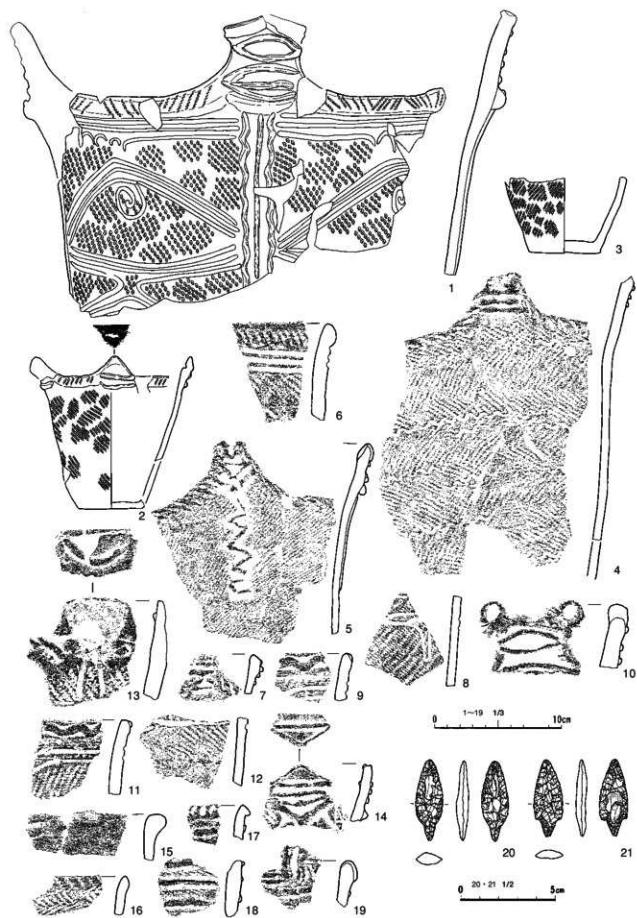


圖37 第E30號墜穴住居跡(2)

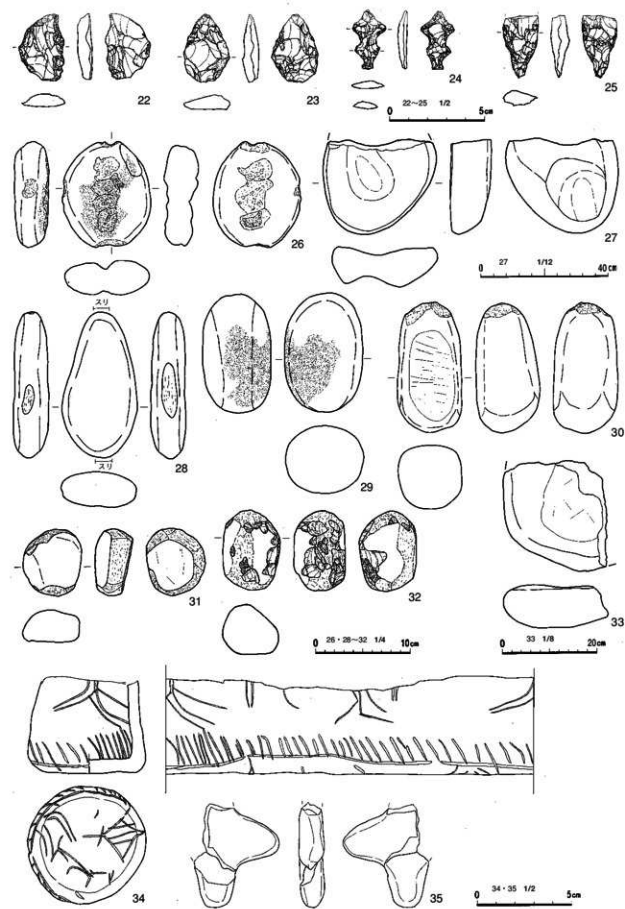


圖38 第E30號墜穴住居跡(3)

第E32号竪穴住居跡 (図39・40)

[位置・確認] 調査区中央よりやや南東寄りのFD-209・210に位置する。IV層で確認した。

[重複] 東壁の一部が公開造成時に削平されている。

[平面形・規模] 平面形は円形を呈し、規模は長軸3.14m、短軸3.1mである。床面積は6.9㎡である。

[壁・床面] 確認面からの壁高は北壁14cm、南壁27cm、西壁21cmである。IV層をそのまま床面にして  
いる。床面は硬く締まっている。

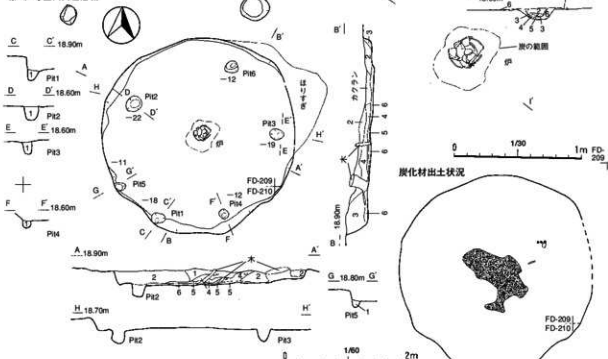
[柱穴] 床面からビットを6個検出した。Pi1・2・3・5・6は配置から土柱穴と考えられる。Pi1・5も柱穴となる可能性もあるが、壁際から検出されたことから、出入り口の施設を構成するビットの可能性が高い。住居外にビット2個を検出したが、住居に伴うものか不明である。

[炉] 住居跡ほぼ中央部から土器片多数が検出された。長軸60cm、短軸52cmの不整形の掘り方で、深さは26cmである。掘り方底面から6cm上に土器片が敷かれている。土器片の上には厚さ4cmほどの焼上層がある。土器の下からは焼土は確認されなかった。炉の上面に炭の広がり検出された。

[堆積上] 6層に分層した。黒褐色土を主体とし、全体にローム粒が混じる。

[出土遺物] 堆積上中から主に土器が少量出土した。円筒上層d式又はe式土器である。炉に使用された土器も円筒上層d式又はe式土器である。礫石器は堆積上から石棒の破片(14)と両端を使用した

第E32号竪穴住居跡



第E32号竪穴住居跡

1層 10YR2/2 黄褐色土	ローム粒、中粒5%、炭化物粒、中粒2%	Pi11	10YR2/2 暗褐色土	ローム粒5%
2層 10YR2/4 暗褐色土	ローム中粒7%、炭化物中粒、中粒7%	Pi12	10YR2/4 暗褐色土	ローム粒5%、ローム中粒2%
3層 10YR2/6 暗褐色土	ローム中粒7%、炭化物中粒2%	Pi13	10YR2/4 暗褐色土	ローム大粒20%、ローム粒7%焼状
4層 10YR2/6 暗褐色土	ローム中粒、大粒30%、炭化物中粒、大粒7%、しまりあり	Pi14	10YR2/4 暗褐色土	ローム大粒20%、ローム中粒7%
5層 10YR2/2 黄褐色土	炭化物粒集	Pi15	10YR2/4 暗褐色土	ローム大粒40%、ローム中粒2%
6層 10YR2/4 暗褐色土		Pi16	10YR2/6 暗褐色土	暗褐色土大粒40%、暗褐色土中粒20%、ローム中粒2%
7層 10YR2/4 暗褐色土	ローム大粒、浮石、中粒7%、炭化物粒2%			
8層 10YR2/6 暗褐色土	炭化物粒25%、ローム粒7%			
9層 10YR2/6 暗褐色土	浮石粒、中粒7%、ローム粒、焼土粒7%、炭化物粒			
10層 10YR2/6 暗褐色土	炭化物粒15%、焼土粒30%			
11層 10YR2/6 暗褐色土	焼土層			
12層 10YR2/4 暗褐色土	ローム粒20%、炭化物粒10%			

図39 第E32号竪穴住居跡 (1)

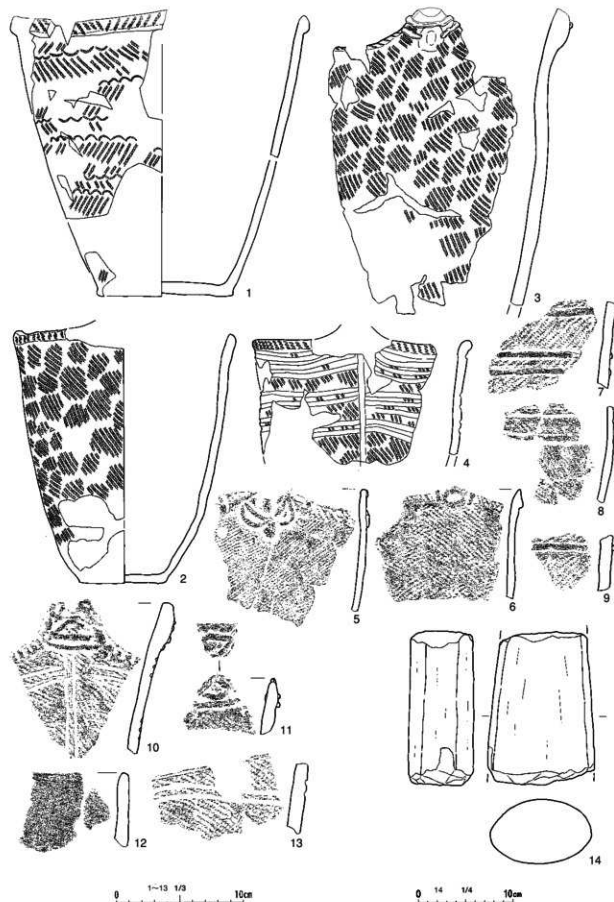


図40 第E32号竪穴住居跡 (2)



た崩石1点が出土した。剥片石器は微小剥離痕のある剥片2点を含む総数7点が出土している。  
 [時期] 郊に使用された土器から円筒上層d式又はe式期であると判断できる。

#### 第E37号竪穴住居跡 (図41)

[位置・確認] FA-205に位置する。「近野遺跡V」で「第1号竪穴遺構」として報告された遺構底面の黄褐色粘土から円形のプランを確認した。

[重複] 第E125号土坑と重複し、本遺構が古い。

[平面形・規模] 平面形はほぼ円形で、規模は長軸3.2m、短軸3.16mである。床面積は7.2㎡である。

[壁・床面] 壁高は南壁63cm、北壁44cm、東壁51cm、西壁55cmである。IV層をそのまま床面にしている。床面は平出で緩く締まっている。

[柱穴] 床面から柱穴状のピットを5個検出した。Pt3は規模・深さから柱穴と考えられるが、主柱穴配置は不明である。

[知] 住居中央部から長軸69cm、短軸66cmのほぼ円形の周境を検出した。周境は幅約6cmで褐色粘土を主体とし、周境部から底面までの深さは約10cmである。

[堆積土] 5層に分層した。1層は黄褐色粘土を主体とし、暗褐色土粒、焼土、炭化物を多く含み、また砂片が多く混入する。2～5層も暗褐色土を主体とし、ローム粒、焼土粒、炭化物粒などを多量に含むことから、人為堆積と考えられる。

[その他] 住居西壁から付属施設を2基検出した。付属施設1は長軸1.1m、短軸1.02mのほぼ円形で、西壁を壁と接し、他は馬蹄形状の周境をもつ。周境は幅4cm～10cmで、黄褐色粘土を主体とし堅硬である。堆積土は褐色土を主体とする4層に分層した。付属施設2は長軸52cm、短軸40cmの楕円形である。堆積土は1・4層が黄褐色土、2・3層は暗褐色土を主体とする。

[出土遺物] 堆積土中から土器が少量出土した。床面出土土器は円筒上層d式又はe式土器である。堆積土出土土器のうち、型式把握できるものは円筒上層e式が多いが、5層から前期初頭の土器も出土している。礫石器は床面から磨り石1点(12)、付属施設2から石皿(11)1点が出土した。磨り石は底面を使用したもので、非常に滑らかである。石皿は中央が浅く凹む。剥片石器は石礫1点(10)、二次調整のある剥片2点、微小剥離痕のある剥片3点、石核2点を含む総数210点出土している。

また、住居中央部の床面から多量の炭化材が出土した。現存する規模で、長さ20～30cmの丸材又は角材と、幅約15～20cm、長さ30～40cmの板材が多いが、住居の構造材として特定するまでは至らなかった。炭化材の周りに焼土もあり、本住居跡は焼土家屋であると考えられる。

[時期] 本遺構の時期は、床面・付属施設堆積土出土土器から円筒上層e式期と考えられる。

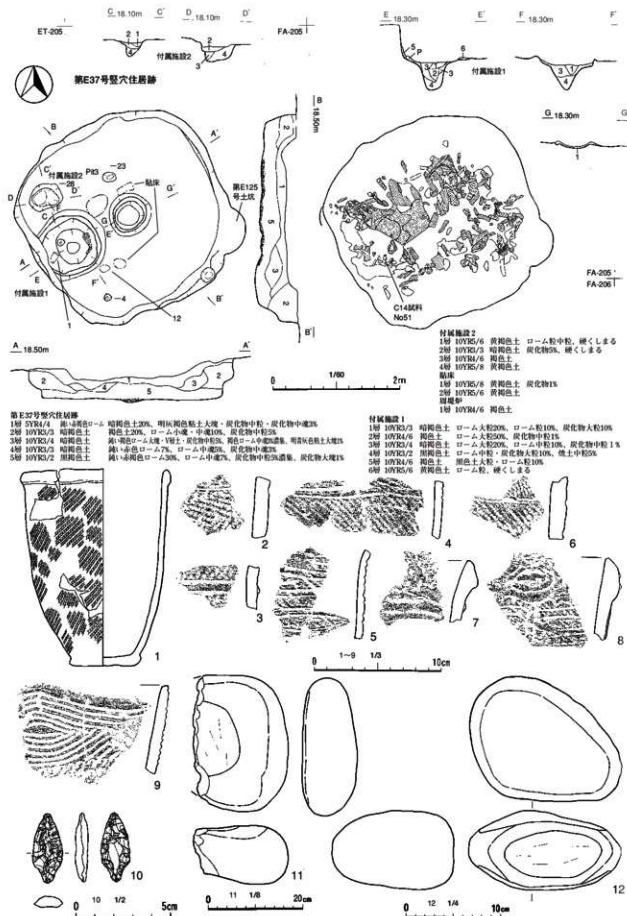


図41 第E37号竪穴住居跡







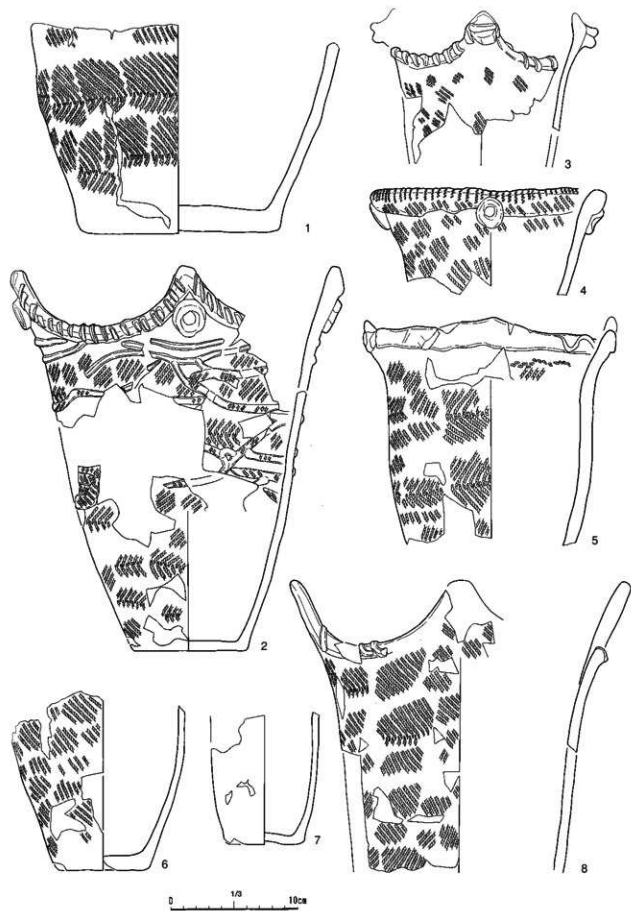


圖44 第E45号豎穴住居跡(2)

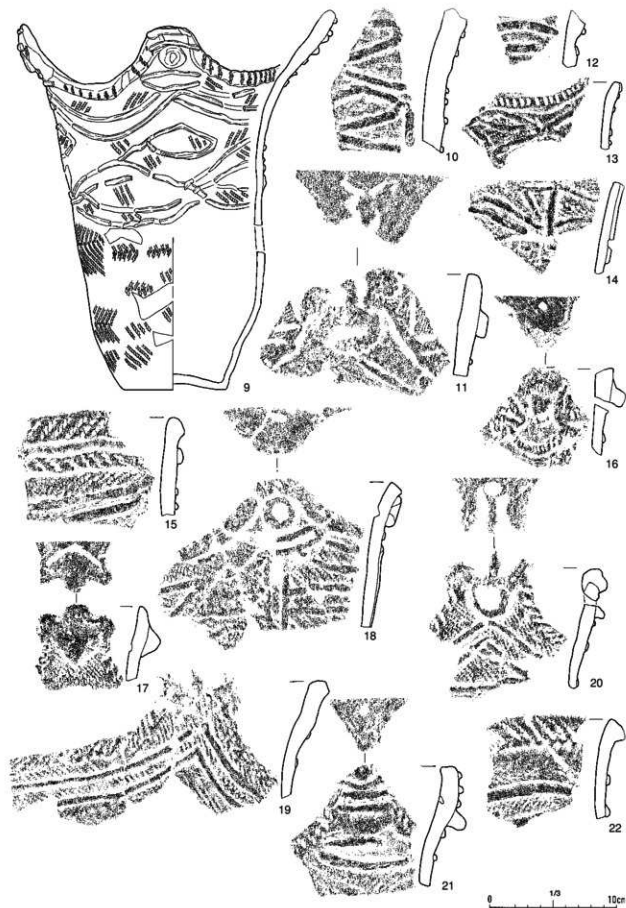


圖45 第E45号豎穴住居跡(3)

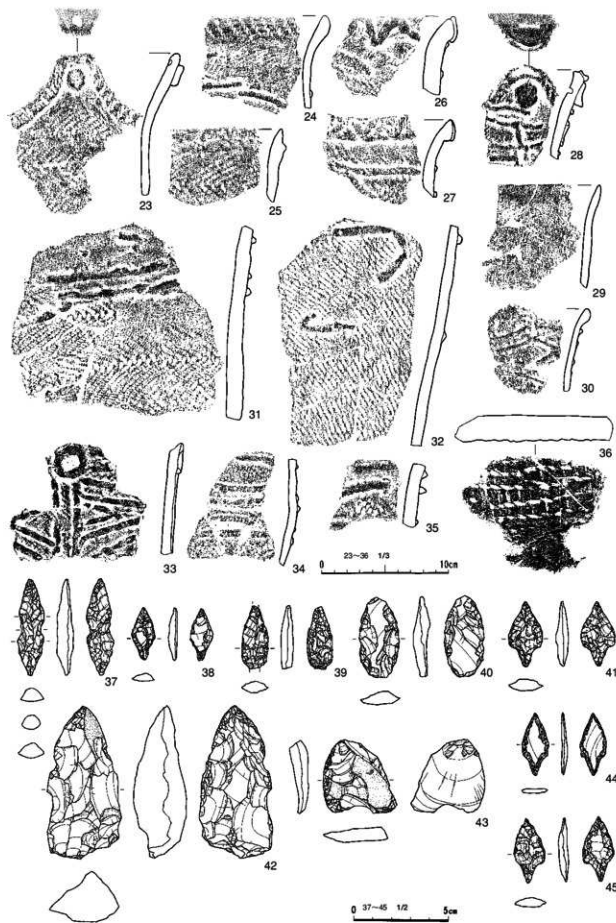


図46 第E45号竪穴住居跡(4)

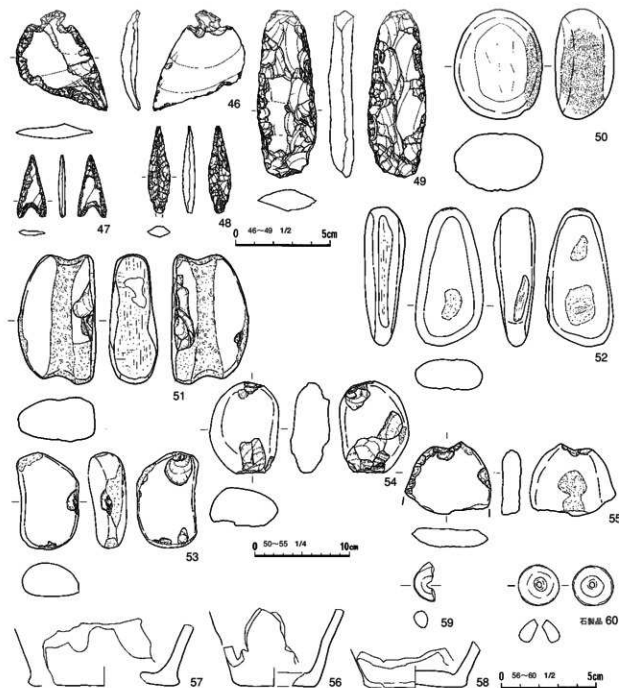


図47 第E45号竪穴住居跡(5)

## 第E49号竪穴住居跡(図48・49)

〔位置・確認〕「近野遺跡V」で21IIとされた住居跡である。遺構確認時のトレンチにより削平され、南側で風倒木による搬風を受ける。F E-200・201に位置し、IV層上面で確認した。

〔平面形・規模〕平面形は隅丸長方形で、規模は長軸3.42m、短軸2.68m、床面積は7.8㎡である。

〔壁・床面〕残存する壁は床面からはほぼ直線的に立ち上がる。IV層を床面としており、全体に平坦で硬化している。

〔壁溝〕北側の一部で確認された。長さ1.9m、幅7-9cm、深さ1-5cmである。

〔柱穴〕床面に8個のビットと小ビットを検出した。このうち主柱穴はPit:1・6、隅に位置するPit

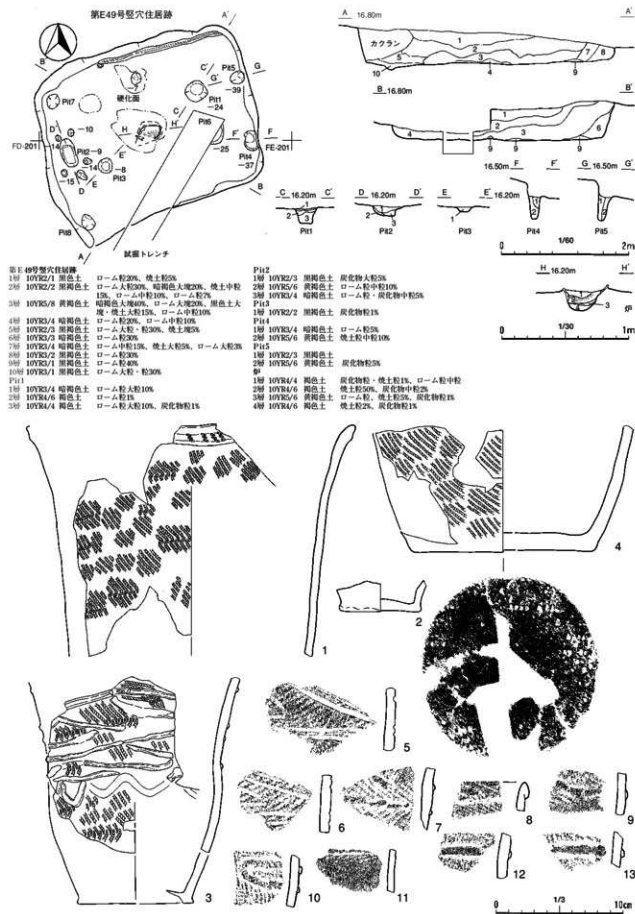


図48 第E49号竪穴住居跡 (1)

7・8、壁際に位置するPit4・5などと思われる。柱家は確認できず、Pit1・6は上部にローム土が堆積し、埋め戻された可能性が高い。Pit4・5は柱抜き取りの堆積状況を示す。  
 [炬] 住居跡中央の床面に楕円形の土器埋設炉が検出された。規模は38×26cm、床面を土器よりも広く掘り込んだ後、約10cm大の土器片を掘り方壁面に貼り巡らしている。土器を2枚重ねて貼り付けている箇所もあるが、底面には土器片の設置はなく、土器内の堆積土には被熱土と炭化物粒が含まれる。[その他] 西側の壁際で、楕円形状のPit2とその周囲に5個の小ピットを確認した。いずれのピットも堆積土は暗褐色土主体である。小ピットは径9~12cm、深さ9~12cmである。  
 [塚積土] 上部が黒褐色土の堆積で、壁際から床面にかけては黄褐色ローム土主体の土が30~50cm程の厚さでレンズ状に堆積しており、人為堆積の可能性が高い。また、床面から壁際にかけてはごく薄く黒褐色土が堆積している。

[出土遺物] 床面・堆積土中から遺物が出土した。炉から出土した土器は内筒上層d式期の土器で、

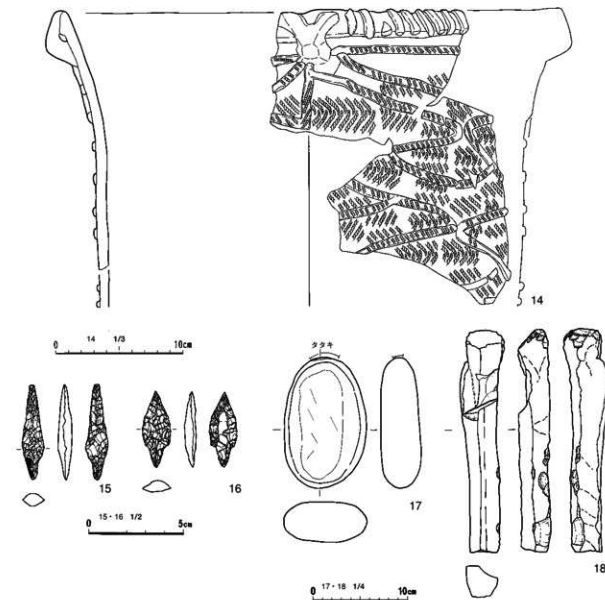


図49 第E49号竪穴住居跡 (2)

堆積土中出土土器も同式が主体である。ローム土に混じて剥片が多数出土した。石鏡2点(15・16)、二次調整のある剥片7点、微小剥離痕のある剥片3点、石核1点を含む総数57点の剥片石器が出土している。礫石器は9層から砥磨器1点(17)、床面から棒状の加工礫(18)1点が出た。

[時期] 本遺構の時期は円筒土器Ⅱ式期である。(坂本)

第E50号竪穴住居跡(図50・51)

[位置・確認] FF・G・217・218に位置し、第E48号住居跡の下位で検出した。

[重複] 平安時代の第E48号竪穴住居跡に本遺構の上部を切られている。

[平面形・規模] 平面形は長軸約4.5m、短軸約3.3mの不整な楕円形で、南東側が一部長軸方向に張り出している。床面積は約94㎡である。

[礎・床面] 礎の上部はほとんど残っていないが、現存する礎高は11~29cm前後である。床面は中央付近では平坦であるが、部分的にやや凹みが見られる箇所もある。床面は、全体として少し北西に傾斜している。

[壁溝] 住居跡の長軸方向にあたる箇所、北西壁側と南東側の張り出し施設で部分的に検出した。北西壁側の壁溝は、幅6~12cm、深さ3~25cm、南東側の壁溝は、幅4~12cm、深さ2~15cmである。

[柱穴] ビットは竪穴内の床面で8個、北東側の壁面で1個検出したが、主柱穴・配置等は不明であ

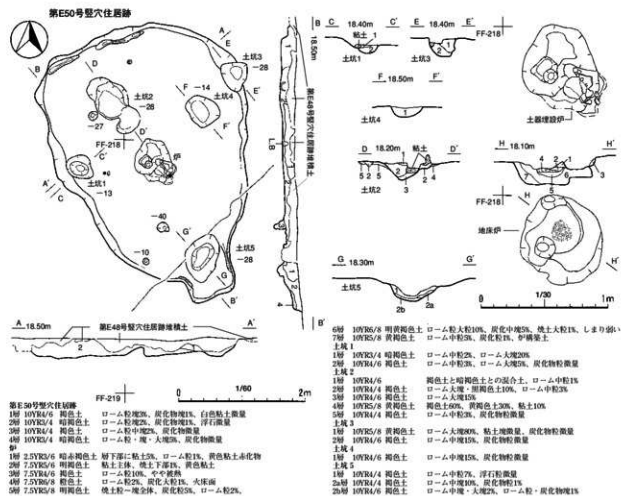


図50 第E50号竪穴住居跡(1)

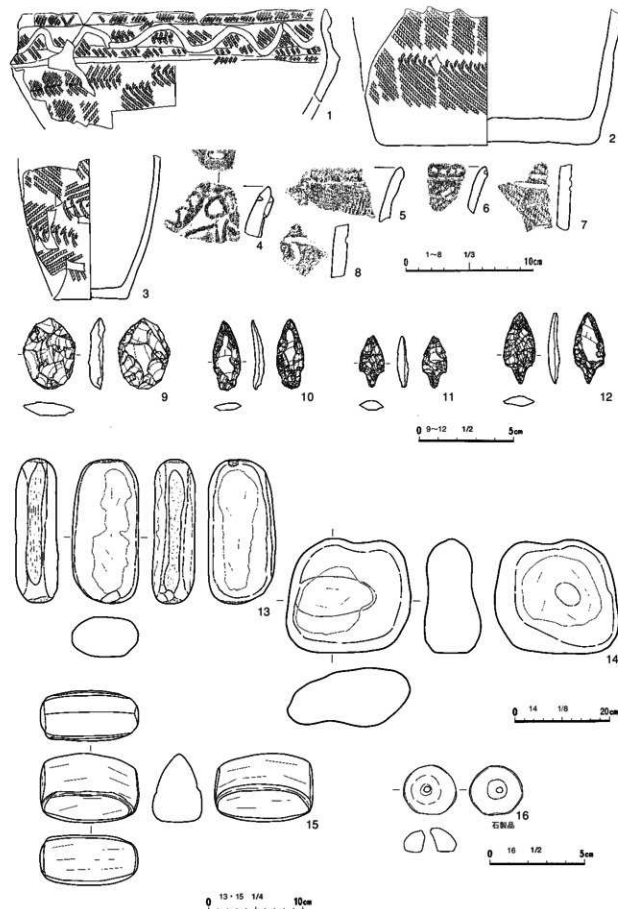


図51 第E50号竪穴住居跡(2)

る。竪穴内に散在する比較的大きめの土坑（土坑1～5）は、粘土のブロック等が出土したのもあるが（土坑1・2）、いずれも掘り方ははっきりしないものである。

[竪] 床面の中央部に設置されているが、地床知から土器埋設炉に造り替えられたようである。古い地床知の中央部には火床面がみられ、土器埋設炉は鉢形の口縁と深鉢形の底部が残っている。

[その他] 住居跡の南東側に、方形に近い形態の張り出し施設が設けられていた。踏み締められたような痕跡も確認されているので、出入り口的な施設とみられるが、施設自体の掘り方は不明瞭で、さらに掘り方ははっきりしないピット（土坑5）が重複している。

[堆積土] 堆積土の上部はほとんど残っていない。残存する部分では暗褐色土と褐色土を主体として、ローム土の他、炭化物粒等が少量混入している。

[出土遺物] 竪・床向・堆積土中から縄文土器・石器・石製品が出土した。土器は少量である。竪・床面から出土した土器（1）は、口縁部に太い波状沈線を描いた鉢形になるものと思われる。沈線という手法よりも文様モチーフを重視すれば、円筒上層a式土器の特徴があり、当該時期のものと考えられる。堆積上からは中期中頃の土器が出土した。石器・石製品は、竪堆積上から剥片が1点、床面から二次調整のある剥片が1点、微小剥離痕のある剥片が1点、砕片が1点出土した。また、堆積上から石鏃が3点（10～12）、二次調整のある剥片が4点（9他）、微小剥離痕のある剥片が5点、石核が1点、剥片が8点、砕片が10点、磨製石斧の頭部が1点、敲磨器が2点、敲磨器が1点、石冠（15）が1点、有孔石製品が1点（16）出土した。石皿（14）は、搬入された状態のものを器面成形せずに利用しており、両面とも中央部が凹んでいる。13は、器面・側面を磨り石として使用しているが、腰部には敲打痕がみられる。

[時期] 本遺構の構築時期は、竪・床面出土土器から判断して円筒上層a式期と考えられる。

#### 第E52号竪穴住居跡（図52）

[位置・確認] FJ・K-216・217に位置し、重複する第E36号竪穴住居跡精査中に北内側で確認した。[重複] 平安時代の第E36号竪穴住居跡に本遺構の南東隅を切られている。また、北内側も広く攪乱を受けている。

[平面形・規模] 平面形は直径約3.5mの不整形円形となるものと思われるが、攪乱等により、全体形は不明である。残存床面積は6.2㎡である。

[壁・床面] 壁高は15～45cm前後である。床面はほぼ平坦に作られているが、全体として南に傾斜している。

[柱穴] ピットは北側の壁寄りでも1個検出したが、土柱穴等については不明である。

[竪] 床面の中央部から土器埋設炉を検出した。床面を20cmほど掘り込み、定形の深鉢形土器を止立状態で埋設している。埋設した土器の器面には火熱を受けた痕跡がある。また、掘り方や埋設土器内の堆積土中にも焼土がみられる。

[堆積土] 堆積土は褐色土と暗褐色土を主体として、ローム質の上の他、炭化物粒や焼土等が下部に多く混入している。

[出土遺物] 竪・堆積土中から縄文土器・石器等が出土した。土器は極めて少量である。竪に埋設された土器は円筒上層式（1）で、堆積土から出土した土器も同時期のものとみられる。確認面から

出土した土器は、円筒上層d式又はe式土器である。石器は、堆積土から剥片が2点、磨り石が1点、敲石が1点出土した。磨石（5）の内器面と側面には、滑らかな使用面がみられる。確認面からは微小剥離痕のある剥片が1点、砕片が1点出土した。なお、本遺構の南内側の床面近くから、板材の一部とみられる炭化材が出土している。

[時期] 本遺構の構築時期は、竪に埋設された土器から判断して中期中葉と考えられる。（15藤）

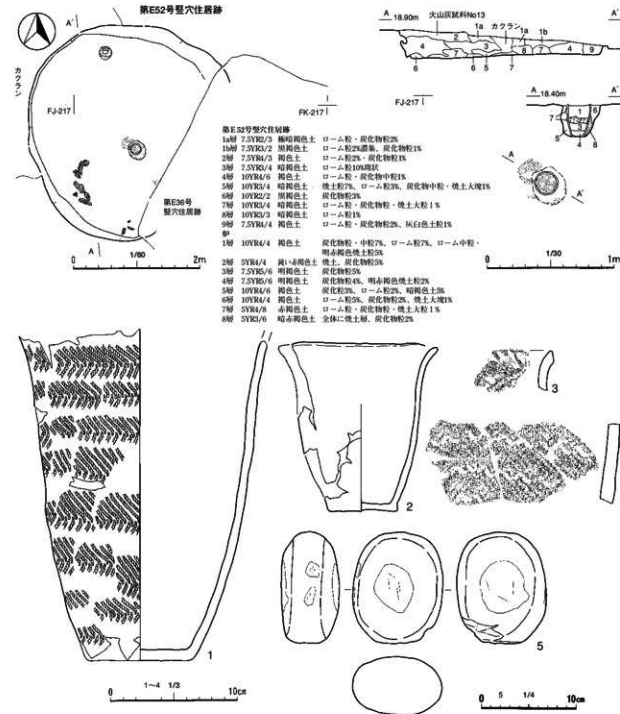


図52 第E52号竪穴住居跡

第E53号竪穴住居跡 (図53・54)

[位置・確認] 標高15mほどの谷筋D S・T・201に位置し、IV層上面で確認した。内側は住居跡の痕跡を確認出来なかった。

[平面形・規模] 規模は長軸4.58m、残存する短軸4mで、平面形はほぼ円形になると思われる。残存床面積は13.4㎡である。

[壁・床面] 残存する壁は北～東～南側のみで、壁高は12～34cmである。床面から緩やかに立ち上がるが、明瞭でない箇所もある。床面は、斜面と同様に東から西に向かって傾斜している。植物による掘孔が著しいが、住居跡中央付近の掘孔を受けていない部分は周辺よりも硬化している状況が確認できた。

[柱穴] 床面の壁に近い部分と壁際付近でピットを検出した。壁際付近には径・深さも10cm前後の小ピットが多く検出されている。柱穴と考えられるのは配置や規模からPit1～3である。西側ではピットが確認出来なかった。

[炉] 住居跡西側の壁際で楕円形の被熱範囲が確認された。規模は径34cmほどで、被熱した深さは確認面から1cmにも満たない。被熱範囲内で焼上がブロック状に確認されており、起伏が見られる。

[堆積上] 上部が黒褐色土の堆積で、以下は暗褐色土主体であり、床面付近ではローム粒がやや混入している。堆積状況は、自然堆積と思われる。

[出土遺物] 1切及び4切から土器が出土した。1は両切間で接合したもので、欠損しているが台付鉢形土器である。内外面に部分的ではあるが赤色顔料が観察される。堆積土出土土器は中期中頃のものと、後半のものがある。石鏡1点(10)、二次調整のある剥片3点(11・12他)、微小剥離痕のある剥片5点を含む総数12点の剥片石器が出土している。礫石器は、4層から石皿の破片を転用した凹み石が出土した。13は破損した石皿片を転用したもので、表に浅い敲打痕、裏面に深い凹み痕がみられる。このほか、4層中から有孔石製品が1点・小型土器が2点、第5層中から小型土器が1点、底面から小型土器が1点の計5点が出土した。

[時期] 本遺構の時期は、4層出土土器から農花式期に近い時期と考えられる。(坂本)

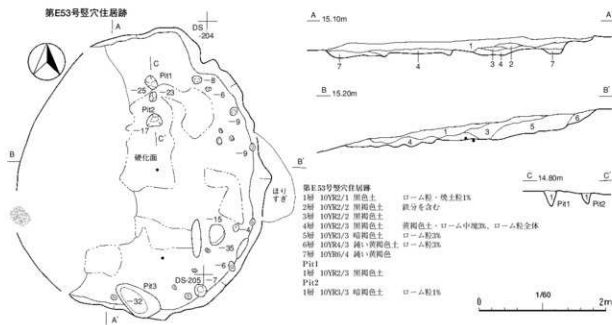


図53 第E53号竪穴住居跡 (1)

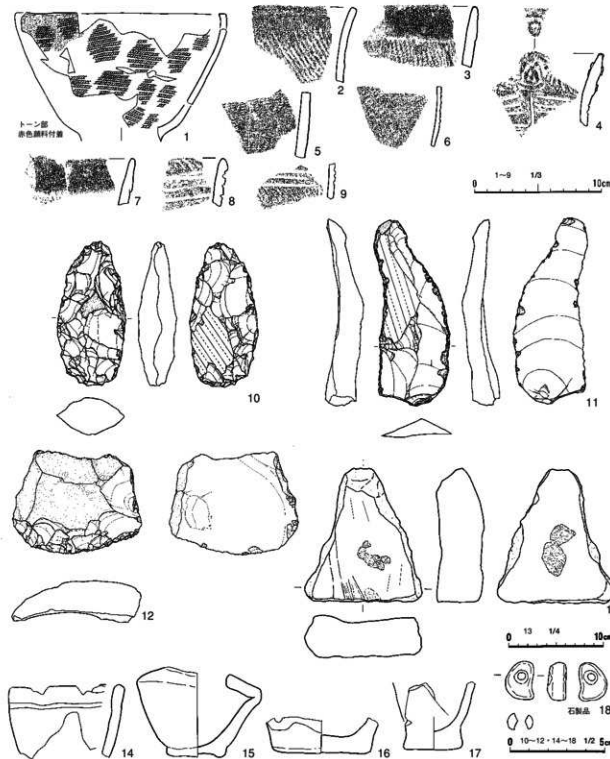


図54 第E53号竪穴住居跡

第E54号竪穴住居跡 (図55~58)

[位置・確認] E・A・B・204・205に位置し、IV層上面で確認した。

[重複] 第E11号孤立柱建物跡PT5と重複、PT6と隣接し、本遺構が新しい。

[平面形・規模] 平面形は楕円形で、規模は長軸3.64m、短軸3.44m、床面積は9.2㎡である。

[壁・床面] 壁は底面からやや開くように立ち上がり、壁高は9~45cmである。IV層を床面としており、床面の西側面を中心に硬化している。床面はやや起伏がある。

[柱穴] 床面で10個のピットを検出した。ほとんどが壁際での検出で、平面規模はPt1の長軸50cmを除くと径14~24cmである。深さは5~27cmであり、Pt1~4が主柱穴になる可能性がある。

[炉] 住居跡中央の床面に土器埋設炉が検出された。規模は、長軸40×34cm、焼土の厚さ12cm、床面から焼土上面までの深さ最大7cm、掘り方は48×32cm、深さ24cmである。床面を掘り込んだ後、土器胴部下の破片を掘り方底面に敷き詰めた上に口縁~胴部上半の部位を埋設している。炉底面から7cmの厚さで被熱している。

[その他] 北側の壁際で、掘り込みの周りを上手状に巡らせた楕円形状の付属施設が検出された。規模は50×44cm、深さ14cm、上手状部分幅2~8cm、高さ約2cmである。上手状部分上部や底面には小ピットも検出されており、径10cm前後、深さ20cm前後である。構築方法は床面を楕円形状に掘り込み、黄褐色ローム土主体の土で上手を巡らしている。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。このほか、円形と台形を合わせた形状の掘り込みが検出された。円形部分がやや深く、台形部分は浅い掘り込みである。規模は、炉の東側で長軸1.02m、短軸最大80cm、円形部分の径56cm、円形部分の深さ20cm、台形部分の深さ5cmである。堆積土は、黒褐色土主体である。

[堆積土] 上部が黒褐色土主体で自然堆積の様相である。住居跡西側の確認河には焼土が広がる。下部は褐色土主体で白色粘土塊や凝土塊が混在し、人為堆積の可能性が高い。

[出土遺物] 1・2層を主体に遺物が極めて多量に出土した。1・2層では中期中頃と後半のものが混在し、3層以下では中頃のものが主体である。炉に使用された土器は内筒上層e式土器(1)である。剥片石器は、石鏃1点(29)、石槍2点(30・31)、二次調整のある剥片11点、微小剥片類のある剥片10点を含む総数71点が出土している。礫石器は、8層から磨り石、7層から敲磨器3点(34・36・38)、6層から敲磨器2点(33・35)、1層から磨製石斧頭部片・敲磨器5点(32・37)・石皿2点(39)の計14点が出土した。このほか1層中から有孔石製品が1点、小型土器が2点、7層中から土偶が2点・方形土製品が1点の前6点が出土した。ミニチュア土器4点いずれも胴下半部である。有孔石製品(47)は、中央部に楕円形の孔が見られるものである。

[時期] 本遺構の時期は、炉出土土器から内筒上層e式期である。

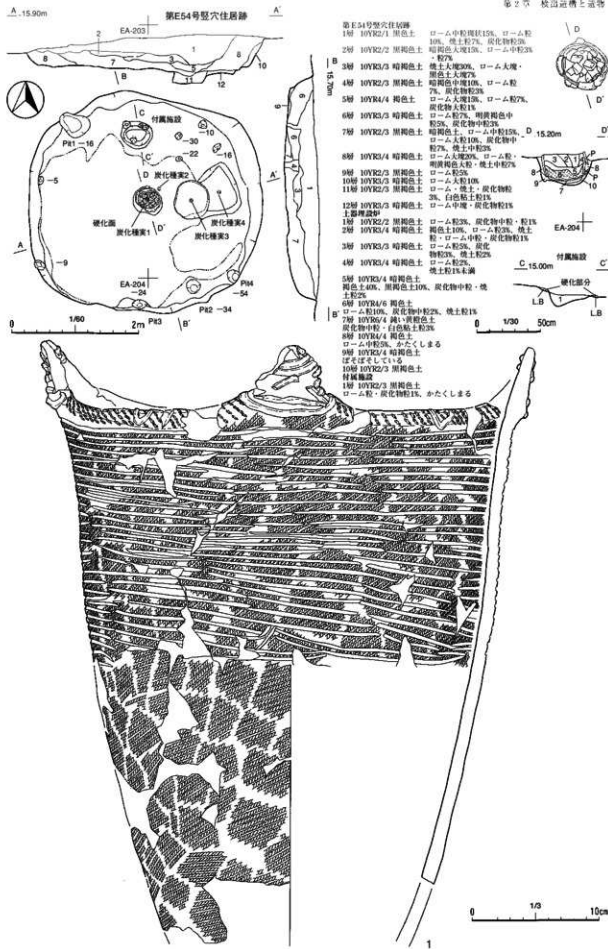


図55 第E54号竪穴住居跡 (1)



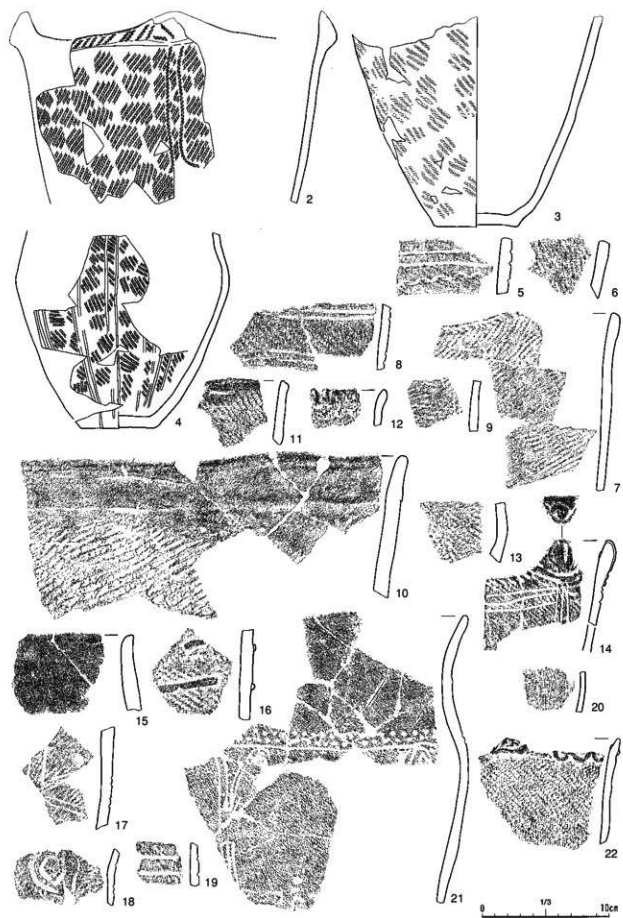


圖56 第E54号竪穴住居跡(2)

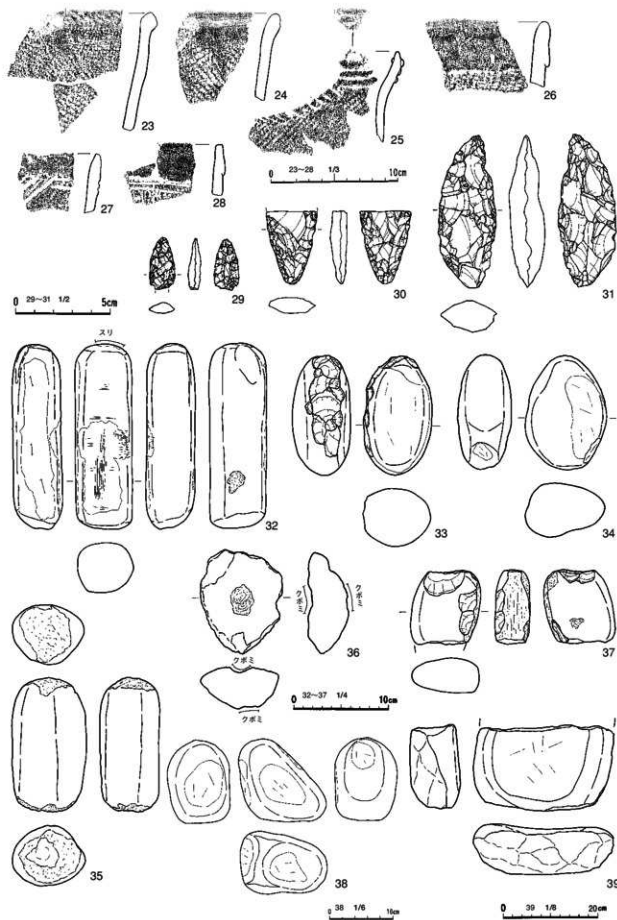


圖57 第E54号竪穴住居跡(3)

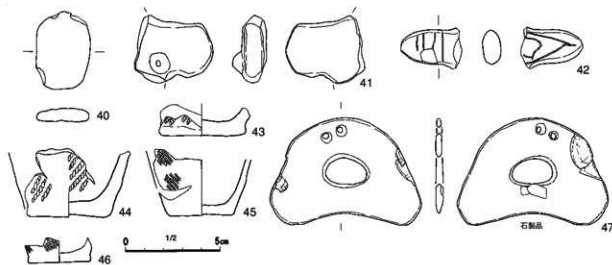


図58 第E54号竪穴住居跡 (4)

第E55号竪穴住居跡 (図59・60)

[位置・確認] E T-216に位置し、IV層上面で確認した。住居跡西側の壁は擾乱で壊されている。

[平面形・規模] 竪穴部分とテラス部分があり、全体形は隅丸長方形。竪穴部分は隅丸方形である。北から東にかけてテラスが広がり、全体の規模は長軸2.88m、短軸2.26mで、竪穴部長軸2.4m、短軸2.28m、床面積は3.7㎡である。テラス部は南東部で若干外側に張り出す形状で、面積は2.04㎡である。  
 [壁・床面] 壁は竪穴部分床面から直線的に立ち上がり、テラス部分床面からの壁高は16~22cmである。テラス部分の壁はやや丸くように立ち上がる。テラス部分床面は北側が比較的平坦であるが、東側は起伏が大きい。竪穴部分はIV層を床面としており、全体に平坦で硬化している。

[柱穴] テラス部分床面から多数のピットを、竪穴部分床面から5個のピットを検出した。このうち主柱穴はPit 1~3と考えられる。柱穴の配置から乱雑部分にも柱穴の存在した可能性が想定される。規模は、18~28cm、深さ32~43cmで、Pit 2には柱抜き取り時の浅い掘り込みが確認された。ピット内の堆積土は住居内堆積土と同様に暗褐色土主体である。このほか竪穴部分床面・壁際、テラス部分壁際で径10cm以下の小ピットを確認している。

[加] 住居跡中央の床面に楕円形の地床如と土器埋設如が検出された。検出状況から、土器埋設如を埋めてその隣に地床如を構築している。地床如の規模は長軸38×30cm、深さ5cmで、レンズ状に窪んだ断面形である。堆積土は上部では炭化物粒を多量に混入し、下部では焼土粒を多量に含む。土器埋設如は径18cmで、掘り方径約20cm、深さ12cmの中に埋設されている。使用された土器は側部から底部にかけての部位で、土器内部は黄褐色ローム土主体の土が堆積している。

[その他] テラス上で、張り出し部分左右に地山をカマドの袖状にし、その内部から径35cmの大型ピット1個と径12cmの小型ピット2個で構成される付属施設を検出した。袖状部分は長軸約50cm、幅約30cm、高さ約15cmで、上部からテラス床面に向かって緩やかに傾斜している。大型ピットはこれらの袖状部分中央に位置し、内部の堆積土は埋められたように堆積状態である。袖状部分から大型ピットの壁は連続しており、この壁際で底部で欠失した土器1個体が傾斜した状態で検出された。掘り方は平面的に確認出来なかったが、断面で観察すると、土器下部から口縁部を埋めている土と大型ピット上部に堆積している土は同じであり、大型ピット埋め戻し時に埋設された可能性が高い。これら

のことを加味し、位置関係から、この張り出し部は出入口の可能性が考えられる。  
 [堆積土] 上部が黒褐色土で、下部は褐色土にロームブロック・炭化物粒や粘土塊が混入している。テラス部分はローム土主体の土が堆積している。いずれも人為堆積の可能性が高い。

[出土遺物] 堆積土を主体として土器が少量出土した。型式認定できるものは全て門筒上層d式である。均質は門筒上層d式又はe式土器である。如に使用された土器は門筒上層d式土器である。剥片石器は二次調整のある剥片1点、微小剥離痕のある剥片2点を含む総数33点が出土している。礫石器は4層から磨り石(14)、7層から敲き石が出土した。このほか4層から石筵が1点(15)出土した。

[時期] 本遺構の時期は竪出土土器から門筒上層d式期である。

第E56・58号竪穴住居跡 (図61~64)

[位置・確認] 標高14mのE A・B-200に位置し、IV層上面で確認した。1回の建て替えが行われている住居跡と、それより古い段階の住居跡(それぞれに遺構番号を付した)・土坑が重複した遺構群である。

各時期に分けて記載する。

第E56号竪穴住居跡

第Ⅰ期(拡張後)

[重複] 第E58号竪穴住居跡・第E183号土坑と重複し、本遺構が新しい。

[平面形・規模] 西側壁が検出されなかったが、平面形は楕円形と推定される。規模は長軸5.1m、短

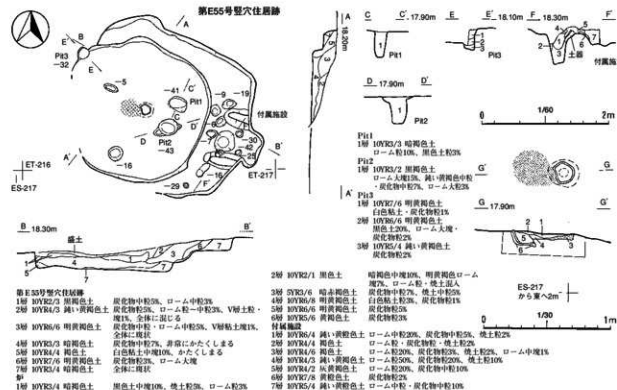


図59 第E55号竪穴住居跡 (1)



図60 第E55号竪穴住居跡(2)

存する短軸3.6m前後、残存床面積は14㎡である。住居跡の長軸方向は、N-58°-Eである。

〔壁・床面〕壁は底面からやや開くように立ち上がり、壁高は23~33cmである。IV層を床面としており、とくに拡張前の住居跡と床面が共通している部分を中心に硬化している。

〔柱穴〕本遺構に伴うものと、拡張前の住居跡に伴うピットかどうか区別がつかないものを掲載した。壁際よりやや中央寄りに位置するピットのうち、Pit5~8・11・15は柱穴の可能性がある。規模は、径21~28cmで、深さ19~32cmである。これらのピット堆積土は黒褐色土主体である。

〔知〕南側で確認された径20cm程の不整形な被熱範囲が知として使用された可能性がある。

〔その他〕住居跡中央で5点の炭化材を検出した。いずれも角材と思われる。

〔堆積土〕上部が黒褐色土主体で自然堆積の様相である。それ以下は褐色土主体であり、床面付近ではロームブロックを混入する。

#### 第I期(拡張前)

〔重複〕第E58号竪穴住居跡・第E183号土坑と重複し、本遺構が新しい。

〔平面形・規模〕残存するピットや壁溝から平面形は楕円形と推定される。推定規模は長軸3.6m、短軸3.2m、床面積は7.8㎡である。住居跡の長軸方向はN-100°-Eである。

〔壁・床面〕壁は確認出来なかった。床面は第II期と共通している。

〔壁溝〕北側から東側の一部で確認した。幅13cm、深さ3~5cmである。

〔柱穴〕壁際付近・壁溝内でピットを検出した。ピットの堆積土や配置からPit3・4・6・12・13・15・16~18や壁溝に伴った壁柱穴が柱穴になる可能性がある。径19~28cm、深さ19~42cmである。

〔炉〕住居跡中央からやや南の位置で石組を検出した。平面形は楕円形で、掘り方規模は72×58cm、深さ27cmで、この内部に石や土器断片を設置している。石や土器は北側・西側のみに残存しているが、南側でも掘り方が確認されており、コの字形をした配置の可能性がある。炉の内部は被熱した痕跡がみられる。また、炉内には2個体分の土器片が廃棄された出土状況であった。

〔出土遺物〕堆積土中から土器が少量出土し、中期中頃と末葉のものがある。炉内からは大木10式併行期の大型破片が出土している。石筥1点(16)、微小剥離痕のある剥片1点を含む総数7点の剥片土器が出土している。床面から端部で使用した蔵き石(18)と磨り石(21)が出土した。21の磨り石は一面が平坦に研磨されており、石棒の未製品の可能性も考えられる。ほかに、堆積土から石皿片3点(20)、磨り石・凹み石(17)、磨製石斧(19)が出土した。土製品では筒状土製品が出土した。屈曲部側を上部とすると、横断面は扁平な釜形で、上部で約65°で屈曲する。下から5cmほどの側面には先強が欠損しているが小突起が1対付けられる。

〔時期〕本遺構の時期は堆積土出土土器から縄文時代中期末に近い時期と考えられる。

#### 第E58号竪穴住居跡(図61・64)

〔重複〕第E56号竪穴住居跡、第E183号土坑と重複し、第E56号竪穴住居跡より古く、第E183号土坑より新しい。

〔平面形・規模〕平面形は不整形丸方形で、規模は長軸2.13m、短軸2.12m、床面積は3.62㎡である。

〔壁・床面〕壁高は最大16cmで、床面から直線的に立ち上がる。IV層を床面とし、平坦である。炉の直下の第E183号土坑の上面を厚さ2~9cmのローム土で覆っている。

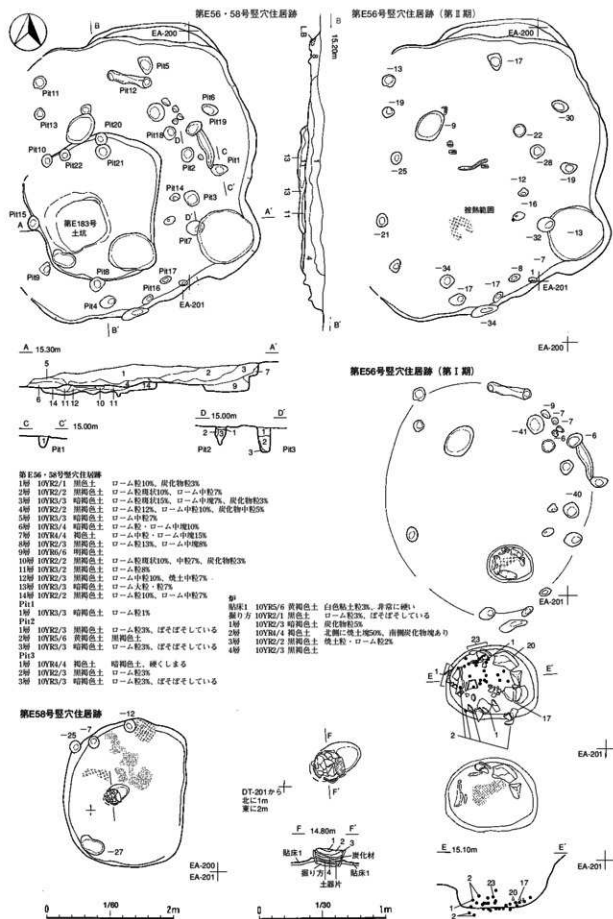


図61 第E56・58号竪穴住居跡 (1)

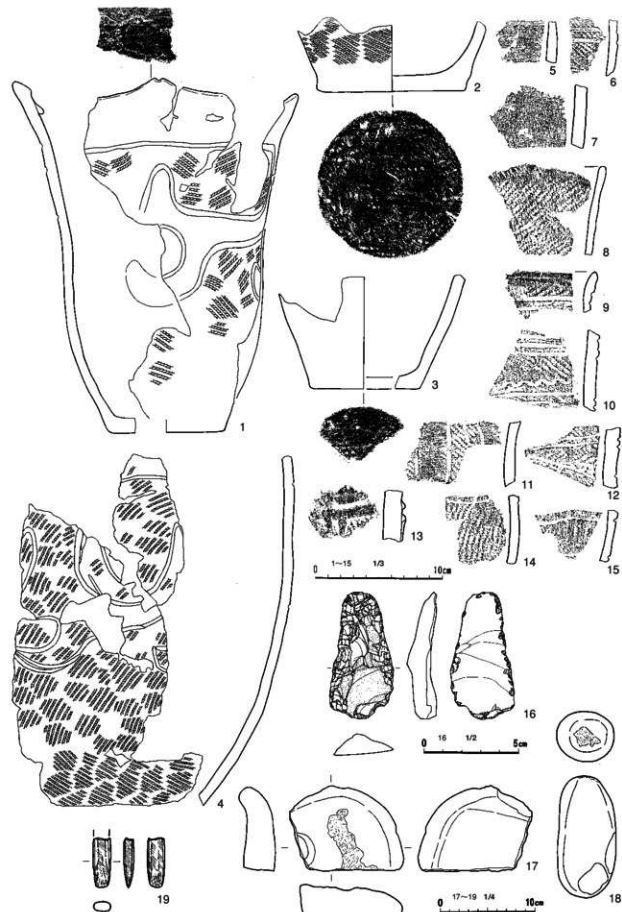


図62 第E56号竪穴住居跡 (2)

[柱穴] 北側壁・床面でピットを3個検出した。径18～23cm、深さ7～12cmである。

[炉] 住居跡中央付近で土器埋設炉が検出された。焼上は土器埋設炉の上面及びその周辺に広がっている。炉の構築は、床面に浅い楕円形状のピットを掘り込んだ後、南西側に土器片を敷き詰め、これを囲うように掘り方壁面に1個体の土器を埋設している。掘り方や土器内部には炭化物を主体とした層が広がっている。

[堆積土] 第E56号竪穴住居跡の床下で検出された。床面直上から確認面の北側にかけて、焼失によるものと考えられる焼土範囲が広がる以外は、黒褐色土主体の堆積土である。

[出土遺物] 14層中から土器が少量出土した。いずれも地文のみの胴部片で、型式把握しにくいものである。

[時期] 本遺構の時期は縄文時代中期後半のものと思われる。

(坂本)

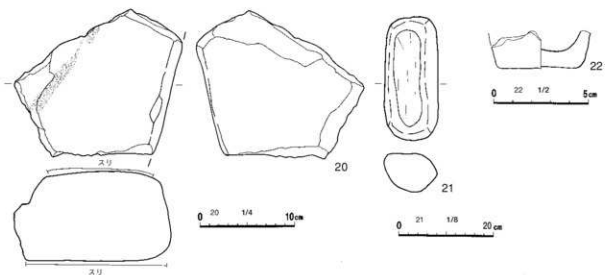


図63 第E58号竪穴住居跡 (3)

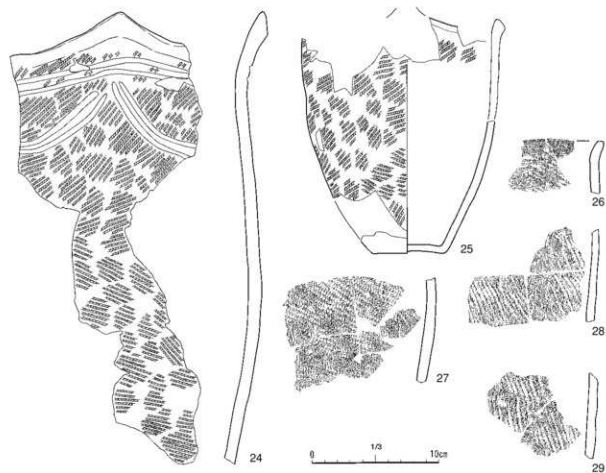


図64 第E58号竪穴住居跡 (4)

## 第2節 縄文時代の掘立柱建物跡

### 第E1号掘立柱建物跡 (図65-77)

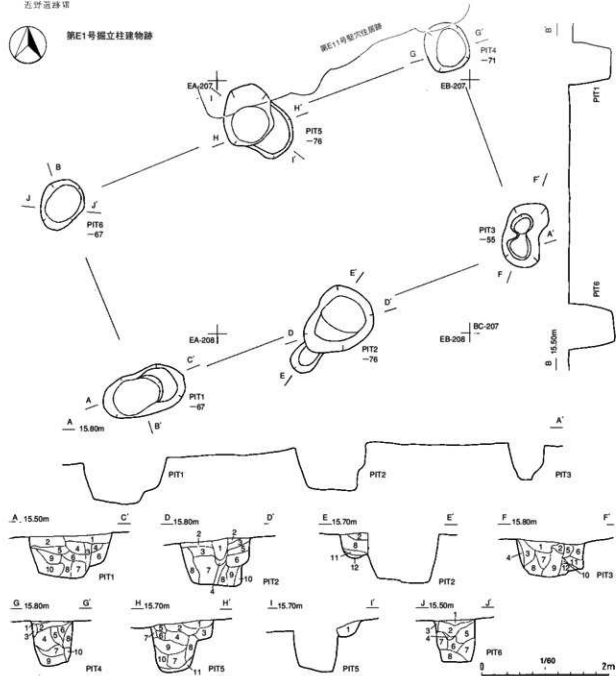
[位置・確認] 標高15mの緩傾斜地で、E・A・B-207・208に位置する。IV層上面で検出した。長軸方向はN-68°-Eである。

[重複] 第E11号竪穴住居跡と重複し、本遺構が古い。

[平面形・規模] 東西方向柱列、南北方向柱列で2間×1間の建物跡で、平面形はほぼ長方形である。規模は、桁行長6.48m、梁行長3.17m、柱穴間隔は、3.17m～3.38mである。掘り方は、平面形が円形のもの・楕円形のものに分かれ、円形のは、PIT4・6が相当する。楕円形のは、上位に段を持つPIT5、下位に段を持つPIT1・2、底面の平面形が8の字状の形態になるPIT3がみられる。規模は長軸及び径が78～158cm、深さ55～76cmである。断面形状は、底面から開口部に向かって緩やかに立ち上がる形状で、底面は、やや起伏がみられるものの全体的に平坦である。

[堆積土] PIT1・2・4・5・6は上部に暗褐色土、下部に黒褐色土が堆積する。全体でみれば同じ色調の堆積土であり、埋め戻しの可能性が高い。PIT6は実際に白色粘土層が混入しており、抜き取りによる掘り方埋土が移動したものである。

[出土遺物] PIT5の上位段から径数cmの標がまとまって出土した。そのなかには、土器の胴部から



第1号竪立建物跡

1層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・大粒1%	2層 10YR2/2 黒褐色土	ローム中粒・ローム粒・大粒2%	10層 10YR2/1 黒褐色土	ローム粒・中粒1%
2層 10YR2/2 黒褐色土	ローム中粒・中粒1%	3層 10YR2/2 黒褐色土	ローム中粒・大粒2%	11層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・大粒2%
3層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒	4層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・中粒1%	12層 10YR2/2 黒褐色土	ローム中粒・大粒2%
4層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・中粒1%	5層 10YR2/4 暗褐色土	ローム中粒・中粒1%、炭化粒、中粒2%、粘土土粒1%	13層 10YR2/2 黒褐色土	ローム中粒・大粒2%、炭化粒1%
6層 10YR2/2 黒褐色土	ローム中粒・大粒2%、炭化粒1%	7層 10YR2/4 暗褐色土	粘土土粒10%	P1T1	炭化粒1%
8層 10YR2/2 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	9層 10YR2/2 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	14層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・中粒1%
10層 10YR2/1 黒褐色土	粘土土粒10%	11層 10YR2/2 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	15層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・中粒1%
12層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	13層 10YR2/2 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	16層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%
14層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	15層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	17層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%
16層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	17層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	18層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%
18層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	19層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	20層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%
21層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	22層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	23層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%
24層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	25層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	26層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%
27層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	28層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	29層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%
30層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	31層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	32層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%
33層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	34層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	35層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%
36層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	37層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	38層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%
39層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	40層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	41層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%
42層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	43層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	44層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%
45層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	46層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	47層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%
48層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	49層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	50層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%
51層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	52層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	53層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%
54層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	55層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	56層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%
57層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	58層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	59層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%
60層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	61層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	62層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%
63層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	64層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	65層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%
66層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	67層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	68層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%
69層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	70層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	71層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%
72層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	73層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	74層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%
75層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	76層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	77層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%
78層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	79層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	80層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%
81層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	82層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	83層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%
84層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	85層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	86層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%
87層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	88層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	89層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%
90層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	91層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	92層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%
93層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	94層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	95層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%
96層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	97層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	98層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%
99層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%	100層 10YR2/1 黒褐色土	ローム中粒・炭化粒2%		

図65 第1号竪立建物跡

底部にかけての部分が白土しており、埋め戻しにあたって何らかの意図的行為があった可能性がある。P1T1の2・4層から円筒上層e式の円縁部片、胴部片が出土し、P1T5の4層から円筒上層式の胴部片が出土した。

[時期] 本遺構の時期は、円筒上層e式期に近い時期と考えられる。

### 第2号竪立建物跡 (図66・77)

[位置・確認] 標高16m前後の緩傾斜地で、EC~EE-210・211に位置する。N層上面で検出した。長軸方向はN-72°Eである。

[平面形・規模] 東西方向柱列、南北方向柱列で2間×1間の建物跡で、平面形はほぼ長方形であるが、北西の梁行きが内側に偏り、若干狭くなっている。規模は、桁行長6.34m、梁行長3.15m、柱穴間隔は、2.70m~3.36mである。掘り方は、平面形が円形のもの・楕円形のものに分かれる。円形ものは片側の開口部が広がる形態で、PIT2・5・6が相当する。楕円形のもの、中に段を持つPIT1、底面の平面形が8の字状の形態になるPIT3・4がみられる。

規模は長軸及び径が96~146cm、深さ70~103cmである。断面形状は、底面から開口部に向かって緩やかに立ち上がる形状で、底面は、やや起伏がみられるものの全体的に平坦である。

[柱痕] 柱痕と思われる痕跡はPIT4・6に堆積土中から確認できた。

[堆積土] 柱痕と思われる黒褐色土と掘り方土と思われるローム主体土が堆積している状況が確認できた。これらは、PIT4・6に見られる。このほか、PIT5は柱の抜き取り後、埋め戻されたと思われる。

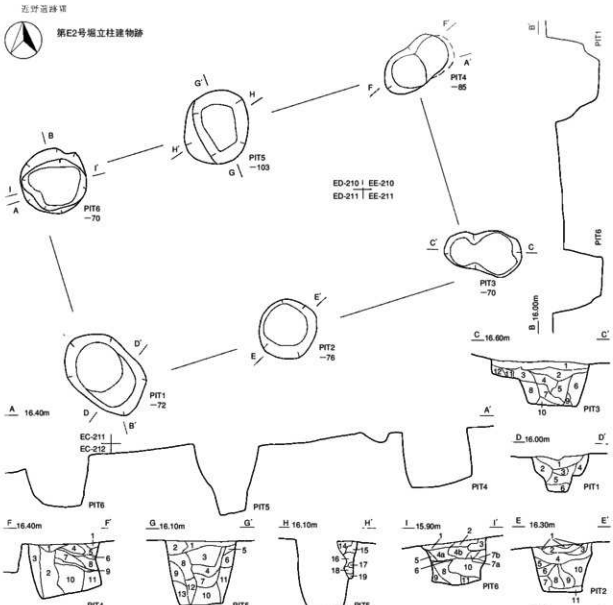
[出土遺物] PIT6の1層から円筒上層d式の円縁部片などが、PIT5の1層から円筒上層式の胴部片が出土した。中期前半のものである。このほか、PIT6堆積土中から銅片1点が出土している。

[時期] 本遺構の時期は、堆積土出土土器から、中期中葉がそれ以前と考えられる。(坂本)

### 第3号竪立建物跡 (図67・77)

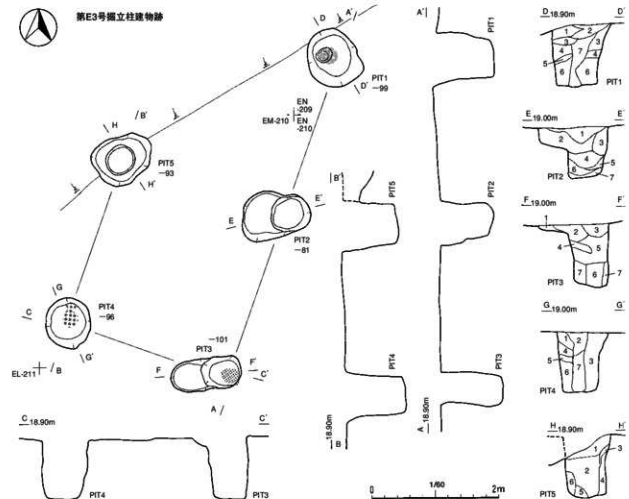
[位置・確認] EM-210で確認した。確認面の標高は18.8m前後である。北東部が大きく削平されていて柱穴を1個検出できなかったが、本来は6本の柱で構成される1間×2間の建物跡であったと考えられる。

[平面形・規模] PIT1は楕円形で、掘り方の中央からやや西側に柱痕が確認されている。確認面から54cm下位で確認した柱痕は30cm前後の楕円形で、底面にまで達している。この部分は周壁にもかかわらずくぼんでおり、硬い。PIT2の平面形は二つのピットで構成される8の字形で、西側は直径80cmほどの円形、東側は直径60cmの円形が組合わされたものである。西側は深さ30cm、東側は70cmで東側が深い。柱痕は確認されなかったが、東側のピットが柱のたっていた柱穴と考えられる。PIT3は長円形で西側が深さ10cmと浅く、東側楕円形で、深さ101cmである。柱痕は東側の掘り方中央から東側に偏った場所に確認され、23×30cmの楕円形を呈していた。柱が立っていたと思われる部分の底面は、わずかに窪んでおり、硬い。PIT4の柱痕は掘り方の北側に偏った場所に確認され、径25cm前後と思われる。底面はほぼ平坦である。PIT5はややびつな楕円形で、中央部分が若干深くなっており、硬い。確認された柱痕はおおむね径30cm前後の大きさであることがわかるが、掘り方内の堆積土や底



- 第2号 竪立柱建物跡
- 1層 10YR6/4 暗褐色土
  - 2層 10YR6/6 暗褐色土
  - 3層 10YR6/8 暗褐色土
  - 4層 10YR6/8 暗褐色土
  - 5層 10YR6/8 暗褐色土
  - 6層 10YR6/4 暗褐色土
  - 7層 10YR6/4 暗褐色土
  - 8層 10YR6/6 暗褐色土
  - 9層 10YR6/6 暗褐色土
  - 10層 10YR6/6 暗褐色土
  - 11層 10YR6/2 灰黄褐色土
  - 12層 10YR6/6 黄褐色土
  - 13層 10YR6/4 黄褐色土
  - 14層 10YR6/6 黄褐色土
  - 15層 10YR6/4 黄褐色土
  - 16層 10YR6/4 黄褐色土
  - 17層 10YR6/4 黄褐色土
  - 18層 10YR6/4 黄褐色土
  - 19層 10YR6/4 黄褐色土
  - 20層 10YR6/4 黄褐色土
  - 21層 10YR6/4 黄褐色土
  - 22層 10YR6/4 黄褐色土
  - 23層 10YR6/4 黄褐色土
  - 24層 10YR6/4 黄褐色土
  - 25層 10YR6/4 黄褐色土
  - 26層 10YR6/4 黄褐色土
  - 27層 10YR6/4 黄褐色土
  - 28層 10YR6/4 黄褐色土
  - 29層 10YR6/4 黄褐色土
  - 30層 10YR6/4 黄褐色土
  - 31層 10YR6/4 黄褐色土
  - 32層 10YR6/4 黄褐色土
  - 33層 10YR6/4 黄褐色土
  - 34層 10YR6/4 黄褐色土
  - 35層 10YR6/4 黄褐色土
  - 36層 10YR6/4 黄褐色土
  - 37層 10YR6/4 黄褐色土
  - 38層 10YR6/4 黄褐色土
  - 39層 10YR6/4 黄褐色土
  - 40層 10YR6/4 黄褐色土
  - 41層 10YR6/4 黄褐色土
  - 42層 10YR6/4 黄褐色土
  - 43層 10YR6/4 黄褐色土
  - 44層 10YR6/4 黄褐色土
  - 45層 10YR6/4 黄褐色土
  - 46層 10YR6/4 黄褐色土
  - 47層 10YR6/4 黄褐色土
  - 48層 10YR6/4 黄褐色土
  - 49層 10YR6/4 黄褐色土
  - 50層 10YR6/4 黄褐色土
  - 51層 10YR6/4 黄褐色土
  - 52層 10YR6/4 黄褐色土
  - 53層 10YR6/4 黄褐色土
  - 54層 10YR6/4 黄褐色土
  - 55層 10YR6/4 黄褐色土
  - 56層 10YR6/4 黄褐色土
  - 57層 10YR6/4 黄褐色土
  - 58層 10YR6/4 黄褐色土
  - 59層 10YR6/4 黄褐色土
  - 60層 10YR6/4 黄褐色土
  - 61層 10YR6/4 黄褐色土
  - 62層 10YR6/4 黄褐色土
  - 63層 10YR6/4 黄褐色土
  - 64層 10YR6/4 黄褐色土
  - 65層 10YR6/4 黄褐色土
  - 66層 10YR6/4 黄褐色土
  - 67層 10YR6/4 黄褐色土
  - 68層 10YR6/4 黄褐色土
  - 69層 10YR6/4 黄褐色土
  - 70層 10YR6/6 黄褐色土
  - 71層 10YR6/6 黄褐色土
  - 72層 10YR6/6 黄褐色土
  - 73層 10YR6/6 黄褐色土
  - 74層 10YR6/6 黄褐色土
  - 75層 10YR6/6 黄褐色土
  - 76層 10YR6/6 黄褐色土
  - 77層 10YR6/6 黄褐色土
  - 78層 10YR6/6 黄褐色土
  - 79層 10YR6/6 黄褐色土
  - 80層 10YR6/6 黄褐色土
  - 81層 10YR6/6 黄褐色土
  - 82層 10YR6/6 黄褐色土
  - 83層 10YR6/6 黄褐色土
  - 84層 10YR6/6 黄褐色土
  - 85層 10YR6/6 黄褐色土
  - 86層 10YR6/6 黄褐色土
  - 87層 10YR6/6 黄褐色土
  - 88層 10YR6/6 黄褐色土
  - 89層 10YR6/6 黄褐色土
  - 90層 10YR6/6 黄褐色土
  - 91層 10YR6/6 黄褐色土
  - 92層 10YR6/6 黄褐色土
  - 93層 10YR6/6 黄褐色土
  - 94層 10YR6/6 黄褐色土
  - 95層 10YR6/6 黄褐色土
  - 96層 10YR6/6 黄褐色土
  - 97層 10YR6/6 黄褐色土
  - 98層 10YR6/6 黄褐色土
  - 99層 10YR6/6 黄褐色土
  - 100層 10YR6/6 黄褐色土

図66 第2号 竪立柱建物跡



- 第3号 竪立柱建物跡
- 1層 10YR6/4 暗褐色土
  - 2層 10YR6/6 暗褐色土
  - 3層 10YR6/6 暗褐色土
  - 4層 10YR6/6 暗褐色土
  - 5層 10YR6/6 暗褐色土
  - 6層 10YR6/6 暗褐色土
  - 7層 10YR6/6 暗褐色土
  - 8層 10YR6/6 暗褐色土
  - 9層 10YR6/6 暗褐色土
  - 10層 10YR6/6 暗褐色土
  - 11層 10YR6/6 暗褐色土
  - 12層 10YR6/6 暗褐色土
  - 13層 10YR6/6 暗褐色土
  - 14層 10YR6/6 暗褐色土
  - 15層 10YR6/6 暗褐色土
  - 16層 10YR6/6 暗褐色土
  - 17層 10YR6/6 暗褐色土
  - 18層 10YR6/6 暗褐色土
  - 19層 10YR6/6 暗褐色土
  - 20層 10YR6/6 暗褐色土
  - 21層 10YR6/6 暗褐色土
  - 22層 10YR6/6 暗褐色土
  - 23層 10YR6/6 暗褐色土
  - 24層 10YR6/6 暗褐色土
  - 25層 10YR6/6 暗褐色土
  - 26層 10YR6/6 暗褐色土
  - 27層 10YR6/6 暗褐色土
  - 28層 10YR6/6 暗褐色土
  - 29層 10YR6/6 暗褐色土
  - 30層 10YR6/6 暗褐色土
  - 31層 10YR6/6 暗褐色土
  - 32層 10YR6/6 暗褐色土
  - 33層 10YR6/6 暗褐色土
  - 34層 10YR6/6 暗褐色土
  - 35層 10YR6/6 暗褐色土
  - 36層 10YR6/6 暗褐色土
  - 37層 10YR6/6 暗褐色土
  - 38層 10YR6/6 暗褐色土
  - 39層 10YR6/6 暗褐色土
  - 40層 10YR6/6 暗褐色土
  - 41層 10YR6/6 暗褐色土
  - 42層 10YR6/6 暗褐色土
  - 43層 10YR6/6 暗褐色土
  - 44層 10YR6/6 暗褐色土
  - 45層 10YR6/6 暗褐色土
  - 46層 10YR6/6 暗褐色土
  - 47層 10YR6/6 暗褐色土
  - 48層 10YR6/6 暗褐色土
  - 49層 10YR6/6 暗褐色土
  - 50層 10YR6/6 暗褐色土
  - 51層 10YR6/6 暗褐色土
  - 52層 10YR6/6 暗褐色土
  - 53層 10YR6/6 暗褐色土
  - 54層 10YR6/6 暗褐色土
  - 55層 10YR6/6 暗褐色土
  - 56層 10YR6/6 暗褐色土
  - 57層 10YR6/6 暗褐色土
  - 58層 10YR6/6 暗褐色土
  - 59層 10YR6/6 暗褐色土
  - 60層 10YR6/6 暗褐色土
  - 61層 10YR6/6 暗褐色土
  - 62層 10YR6/6 暗褐色土
  - 63層 10YR6/6 暗褐色土
  - 64層 10YR6/6 暗褐色土
  - 65層 10YR6/6 暗褐色土
  - 66層 10YR6/6 暗褐色土
  - 67層 10YR6/6 暗褐色土
  - 68層 10YR6/6 暗褐色土
  - 69層 10YR6/6 暗褐色土
  - 70層 10YR6/6 暗褐色土
  - 71層 10YR6/6 暗褐色土
  - 72層 10YR6/6 暗褐色土
  - 73層 10YR6/6 暗褐色土
  - 74層 10YR6/6 暗褐色土
  - 75層 10YR6/6 暗褐色土
  - 76層 10YR6/6 暗褐色土
  - 77層 10YR6/6 暗褐色土
  - 78層 10YR6/6 暗褐色土
  - 79層 10YR6/6 暗褐色土
  - 80層 10YR6/6 暗褐色土
  - 81層 10YR6/6 暗褐色土
  - 82層 10YR6/6 暗褐色土
  - 83層 10YR6/6 暗褐色土
  - 84層 10YR6/6 暗褐色土
  - 85層 10YR6/6 暗褐色土
  - 86層 10YR6/6 暗褐色土
  - 87層 10YR6/6 暗褐色土
  - 88層 10YR6/6 暗褐色土
  - 89層 10YR6/6 暗褐色土
  - 90層 10YR6/6 暗褐色土
  - 91層 10YR6/6 暗褐色土
  - 92層 10YR6/6 暗褐色土
  - 93層 10YR6/6 暗褐色土
  - 94層 10YR6/6 暗褐色土
  - 95層 10YR6/6 暗褐色土
  - 96層 10YR6/6 暗褐色土
  - 97層 10YR6/6 暗褐色土
  - 98層 10YR6/6 暗褐色土
  - 99層 10YR6/6 暗褐色土
  - 100層 10YR6/6 暗褐色土

図67 第3号 竪立柱建物跡

面の硬化面の大きさから、これより若干大きめの丸太状のものと思われる。

各柱間の寸法は、南北列の東側は2.60m、西側は2.60m、東西列は南側及び中央ともに2.70mである。また、主軸方向はN-16°-Eである。

【出土遺物】PIT1 堆積土中から円筒上層d式又はe式土器の胴部片が出土した。このほか南極加撃痕跡のある割片1点、二次調整のある割片1点が出土している。PIT5 堆積土中から無文の胴部片が出土した。PIT2 堆積土中から円筒上層d式又はe式土器の胴部片や割片2点が出土している。PIT4の



堆積土中から円筒土層 d 式又は e 式土器の胴部片が出土した。  
 [時期] 本遺構の時期は、堆積土出土遺物から円筒土層 d 式又は e 式期に近い時期と考えられる。(高山)

**第 E 4 号掘立柱建物跡 (図68・69・77)**

[位置・確認] F A～F C・201・202に位置し、V層上面で検出した。長軸方向はN-56°-Eである。北側が擾乱を受ける。

[平面形・規模] 北東方向柱列、北西方向柱列で2間×1間の建物跡で、一部削平を受けているが、平面形はほぼ長方形であると推定される。規模は、桁行長7.40m、棟行長3.45m、柱穴間隔は、桁行きの桁行間隔が広く、棟行きは若干短い。掘り方は、平面形が円形のものほとんどで、72～100cm、深さ34～88cmである。断面形状は、底面から開口部に向かって直線的な形状がほとんどであるが、PIT 1は底面から緩やかに立ち上がる。PIT 6は開口部が大きく漏斗状に開く形状である。底面は、やや起伏がみられるものの全体的に平坦である。

[柱痕] 柱痕と思われる痕跡はPIT 1・2内の堆積土中から確認できた。  
 [堆積土] 柱痕と思われる黒褐色土とローム主体の掘り方上と思われる堆積状況がPIT 1・2・4に見られる。柱の抜き取りの可能性がある。PIT 6はロームブロック混じりの褐色土や黒褐色土が交互に堆積している。

[出土遺物] PIT 2から円筒下層式土器片が出土している。また、PIT 4の1層から地文のみの胴部片、PIT 6の15層から円筒上層式土器の胴部片が出土した。また、堆積土中から二次調整のある剥片1点、砂片1点が出土している。

[時期] 本遺構の時期は、堆積土出土遺物から円筒上層式とそれ以前の時期と思われる。

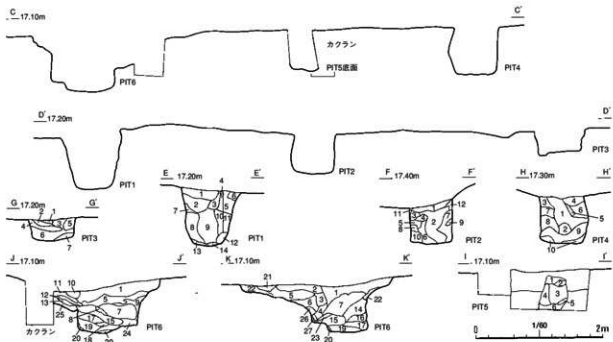
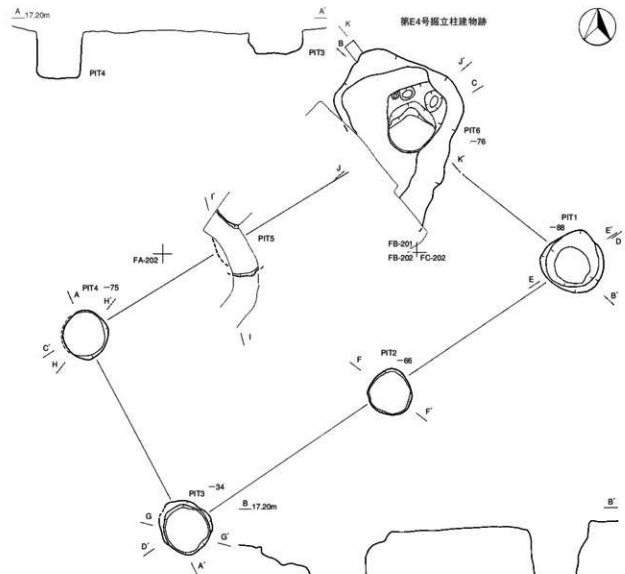


図68 第E4号掘立柱建物跡 (1)



第E4号掘立柱建物跡

1層	10782/3	暗褐色土	ローム中・土砂2%
2層	10782/4	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂5%、ローム大粒2%
3層	10782/5	暗褐色土	ローム中砂・土砂2%
4層	10783/4	黄褐色土	ローム中砂2%
5層	10782/6	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂2%
6層	10782/7	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂2%
7層	10782/8	暗褐色土	V層土中埋砂
8層	10782/9	暗褐色土	ローム大粒2%
9層	10782/10	暗褐色土	ローム大粒2%
10層	10782/11	暗褐色土	ローム中砂2%、焼土1%
11層	10783/4	黄褐色土	ローム中砂2%
12層	10782/12	暗褐色土	ローム中砂2%
13層	10782/13	暗褐色土	ローム中砂2%
14層	10782/14	黄褐色土	ローム中砂2%
15層	10782/15	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂、炭化物中砂、粘土土中埋砂
16層	10782/16	暗褐色土	ローム中砂、炭化物中砂、粘土土中埋砂
17層	10782/17	暗褐色土	炭化物中砂、黒色土中埋砂、粘土土中埋砂
18層	10782/18	暗褐色土	炭化物中砂、ローム中砂・大粒2%
19層	10782/19	暗褐色土	ローム中砂、黒色土中埋砂、粘土土中埋砂
20層	10782/20	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
21層	10782/21	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
22層	10782/22	暗褐色土	ローム中砂、炭化物中砂
23層	10782/23	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
24層	10782/24	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
25層	10782/25	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
26層	10782/26	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
27層	10782/27	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
28層	10782/28	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
29層	10782/29	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
30層	10782/30	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
31層	10782/31	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
32層	10782/32	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
33層	10782/33	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
34層	10782/34	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
35層	10782/35	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
36層	10782/36	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
37層	10782/37	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
38層	10782/38	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
39層	10782/39	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
40層	10782/40	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
41層	10782/41	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
42層	10782/42	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
43層	10782/43	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
44層	10782/44	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
45層	10782/45	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
46層	10782/46	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
47層	10782/47	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
48層	10782/48	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
49層	10782/49	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
50層	10782/50	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
51層	10782/51	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
52層	10782/52	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
53層	10782/53	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
54層	10782/54	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
55層	10782/55	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
56層	10782/56	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
57層	10782/57	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
58層	10782/58	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
59層	10782/59	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
60層	10782/60	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
61層	10782/61	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
62層	10782/62	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
63層	10782/63	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
64層	10782/64	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
65層	10782/65	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
66層	10782/66	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
67層	10782/67	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
68層	10782/68	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
69層	10782/69	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
70層	10782/70	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
71層	10782/71	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
72層	10782/72	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
73層	10782/73	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
74層	10782/74	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
75層	10782/75	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
76層	10782/76	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
77層	10782/77	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
78層	10782/78	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
79層	10782/79	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
80層	10782/80	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
81層	10782/81	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
82層	10782/82	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
83層	10782/83	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
84層	10782/84	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
85層	10782/85	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
86層	10782/86	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
87層	10782/87	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
88層	10782/88	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
89層	10782/89	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
90層	10782/90	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
91層	10782/91	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
92層	10782/92	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
93層	10782/93	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
94層	10782/94	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
95層	10782/95	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
96層	10782/96	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
97層	10782/97	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
98層	10782/98	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
99層	10782/99	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%
100層	10782/100	暗褐色土	黒色土中埋砂、ローム中砂・大粒2%

図69 第E4号掘立柱建物跡 (2)

第 E 5 号 掘立柱建物跡 (図70)

[位置・確認] 標高18m前後の平地地で、E・R・S-196に位置する。IV層上面で検出した。長軸方向はN-79°-Eである。南壁が大きく崩壊されており、ピット等は検出されなかった。

[平面形・規模] 北東方向柱列、北西方向柱列で2間×1間の建物跡で、平面形は長方形と推定される。桁行長3.70m、梁行長1.86m、柱穴間隔は、1.74m~1.96mである。掘り方は、平面形が円形で、径44~52cm、深さ30~44cmである。PIT1~4は中位から下位に段を持ち、とくにPIT1・6は底面に柱痕が残存する。断面形状は、すべて底面から開口部に向かって直線的な形状である。底面は、やや起伏がみられる。

[堆積土] 暗褐色土主体で、ローム粒が混入する。

[時期] 本遺構の時期は、出土遺物がないため、時期決定の根拠に欠けるが、第E4号掘立柱建物跡と主軸方向がほぼ同じであるため、円筒土層d式期かそれ以前の時期である可能性が高い。

第 E 6 号 掘立柱建物跡 欠首

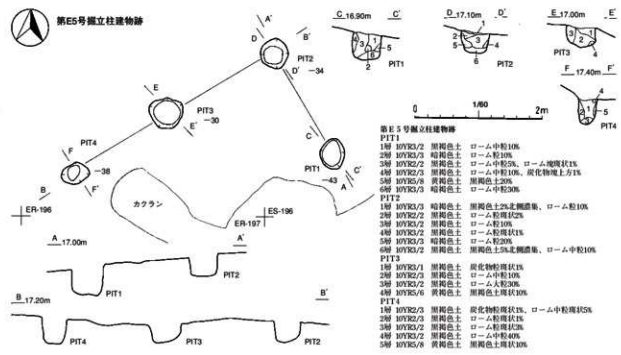


図70 第E5号掘立柱建物跡

第 E 7 号 掘立柱建物跡 (図71)

[位置] 標高18m前後の平地地で、E・R・S-211・212に位置する。IV層上面で検出した。長軸方向はN-133°-Eである。

[重複] 第E102号土坑と重複し、本遺構が古い。

[平面形・規模] 北西方向柱列、北東方向柱列で2間×1間の建物跡で、平面形はほぼ長方形であるが、中央のPIT2・5の柱痕が外側に広がる。桁行長5.52m、梁行長3.11m、柱穴間隔は、2.64m~3.25mである。掘り方は、平面形が円形のもの(PIT2・5)、隅丸長方形のもの(PIT1・3・4・6)で、円形のもの径92~94cm、隅丸長方形のものが最大1.32m、深さ69~124cmである。PIT1~4は中

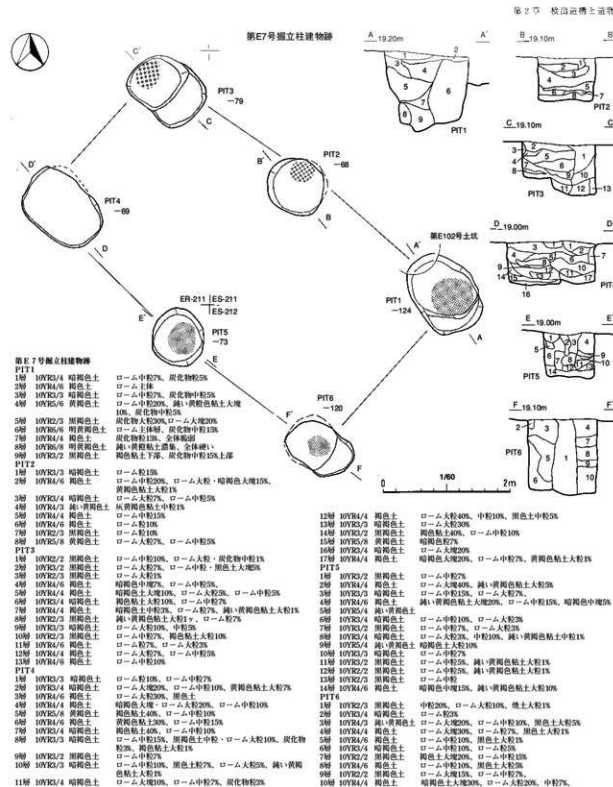


図71 第E7号掘立柱建物跡

位から下位に段を持ち、とくにPIT1・6は底面に柱痕が残存する。断面形状は、すべて底面から開口部に向かって直線的な形状である。底面は、やや起伏がみられるもの全体的に平坦である。  
 [柱痕] 柱痕と思われる痕跡はPIT1を除いたピットで確認されている。  
 [堆積土] 最上部は黒褐色土主体であるが、堆積状況から、ロームブロック混じりの褐色土が堆積しているPIT1・5、柱痕と掘り方土が堆積しているPIT3・6、褐色土や黒褐色土が水平に堆積するPIT2・4に分けられる。PIT1・2・4・5は埋め戻された可能性がある。

[出土遺物] PIT 2 の 1 層から復元可能な円筒上層 d 式又は e 式土器が出土した。この土器は E S B 9 PIT 2 出土土器と接合した。PIT 5 の 1 層や堆積土中から円筒上層 e 式や椀形式土器の口縁部片や胴部片が出土した。PIT 6 からも中期後葉の胴部片が出土した。

[時期] 本遺構の時期は、椀形式期に近い時期と考えられる。堆積土中の柱痕の痕跡や底面の掘り込みから、概ね30~30cmの丸木を柱としたことが想定される。柱を立てた後、周囲をローム混じりの土で固定したと思われる。PIT 1・3・4・6の平面形状から立て替え等が行われた可能性がある。

**第 E 8 号独立柱建物跡** (図72・77)

[位置・確認] 標高18m前後の平坦地で、E P ~ R - 212・213に位置する。IV層上面で検出した。長軸方向はN-125°-Eである。

[重複] 第E10・23号堅穴住居跡、第E63号土坑と重複し、第E10・23号堅穴住居跡より古く、第E63号土坑より新しい。

[平面形・規模] 北西方向柱列、北東方向柱列で3間×1間の建物跡で、平面形はほぼ長方形であるが、北西の梁行きが円錐に傾り、若干狭くなっている。規模は、桁行長6.80m、梁行き長2.77m、柱穴間隔は、北西側の桁行間隔が狭く、1.60m~1.75m、これ以外は2.35m~2.71mである。掘り方は、平面形が円形のものかほとんどで、隅丸長方形基盤のものはPIT 7・8である。規模は長軸及び幅が69~104cm、深さ72~118cmである。PIT 1・6は底面がやや円形で円形状になっている。断面形状は、すべて底面から開口部に向かって直線的な形状である。底面は、やや起伏がみられるものの全体的に平坦である。

[柱痕] 柱痕と思われる痕跡はPIT 1・2・4・6に堆積土中から確認できた。

[堆積土] 柱痕と思われる黒褐色土とローム土の掘り方土と思われる堆積状況がPIT 1~4・6に見られる。柱の抜き取りの可能性もある。PIT 5・7はロームブロック混じりの褐色土や黒褐色土が交互に堆積している。

[出土遺物] PIT 1 の 2 層から地文のみの胴部片が、PIT 2 の 8・2 層から円筒上層 d 式土器の口縁部片が、1 層などで円筒上層式や以後の太木系土器片が出土した。PIT 3 の 2 層から円筒上層 e 式の胴部片などが、PIT 6 の 7 層から地文のみの胴部片が出土した。PIT 4 は胴部片の上層と剥片 1 点が出土している。

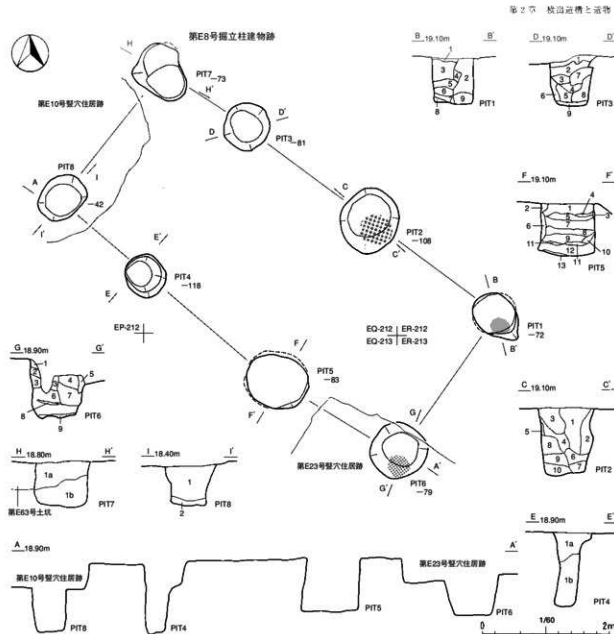
[時期] 本遺構の時期は、堆積土出土遺物から、円筒上層 d・e 式期に近い時期と考えられる。(坂本)

**第 E 9 号独立柱建物跡** (図73・77・78)

[位置・確認] 標高18m前後の平坦地で、E R・S - 212に位置する。IV層上面で検出した。長軸方向はN-89°-Eである。

[重複] 第F153号土坑と重複し、本遺構が新しい。

[平面形・規模] 東西方向柱列、南北方向柱列で1間×1間の建物跡で、平面形はほぼ長方形である。桁行長3.54m、梁行き長2.76mである。掘り方は、平面形が円形のもの (PIT 1・3・4)、隅丸長方形のもの (PIT 2) で、円形のものか65~87cm、隅丸長方形のものか98×64cmで、深さ71~88cmである。PIT 2 は下位に段を持ち、断面形状は、底面から開口部に向かって直線的な形状であるが、PIT 1 はやや円く、底面はほぼ平坦である。



第 E 8 号独立柱建物跡			第 E 9 号独立柱建物跡				
PIT 1	1層	10YR2/4 暗褐色土	ローム中粒5%	PIT 1	1層	10YR2/4 暗褐色土	ローム中粒5%、暗褐色土2%
	2層	10YR2/4 暗褐色土	ローム大粒7%、ローム中粒5%、炭化物中粒2%		2層	10YR2/4 暗褐色土	ローム大粒1人粒10%、炭化物中粒2%
	3層	10YR2/4 暗褐色土	ローム中粒5%		3層	10YR2/4 暗褐色土	ローム中粒10%
	4層	10YR2/2 暗褐色土	ローム中粒5%、ローム大粒2%		4層	10YR2/4 暗褐色土	ローム中粒5%
	5層	10YR2/2 暗褐色土	粘土中粒1%		5層	10YR2/4 暗褐色土	黄褐色土
	6層	10YR2/2 暗褐色土	ローム大粒2%		6層	10YR2/4 暗褐色土	ローム大粒7%、ローム中粒20%
	7層	10YR2/4 暗褐色土	ローム中粒5%		6層	10YR2/4 暗褐色土	ローム中粒2%
	8層	10YR2/4 暗褐色土	ローム中粒5%		7層	10YR2/4 暗褐色土	ローム中粒10%、ローム大粒2%、ローム中粒2%
	9層	10YR2/2 暗褐色土	ローム大粒8%、ローム中粒5%		8層	10YR2/2 暗褐色土	黄褐色土大粒1%
	10層	10YR2/2 暗褐色土	ローム大粒13%、ローム中粒5%、炭化物中粒2%、ローム大粒1%		9層	10YR2/4 暗褐色土	ローム大粒7%、ローム中粒、褐色土中粒5%
	11層	10YR2/4 暗褐色土	ローム大粒20%、ローム中粒5%、ローム大粒1%		10層	10YR2/4 暗褐色土	ローム中粒20%、褐色土中粒5%
	12層	10YR2/4 暗褐色土	炭化物中粒1%		11層	10YR2/2 暗褐色土	ローム中粒2%
	13層	10YR2/4 暗褐色土	粘土中粒1%		12層	10YR2/4 暗褐色土	ローム中粒2%
	14層	10YR2/2 暗褐色土	ローム大粒13%、ローム中粒5%		13層	10YR2/4 黄褐色土	ローム中粒2%
	15層	10YR2/4 暗褐色土	ローム中粒5%		14層	10YR2/4 黄褐色土	ローム中粒5%
	16層	10YR2/4 暗褐色土	粘土大粒20%、粘土中粒、ローム中粒10%、ローム大粒7%		15層	10YR2/4 黄褐色土	黄褐色土
	17層	7.5YR2/4 暗褐色土	粘土大粒20%、粘土中粒、ローム中粒10%、ローム大粒7%		16層	10YR2/4 黄褐色土	ローム中粒5%、暗褐色土10%
	18層	10YR2/4 暗褐色土	ローム中粒13%、ローム大粒2%、粘土中粒2%、粘土大粒1%		17層	10YR2/4 暗褐色土	ローム中粒22%、炭化物中粒1%
	19層	10YR2/4 暗褐色土	炭化物中粒1%、粘土大粒1%		18層	10YR2/4 暗褐色土	全体にローム質、褐色土10%
	20層	10YR2/4 暗褐色土	炭化物中粒1%、粘土大粒1%		19層	10YR2/2 暗褐色土	ローム中粒5%、炭化物中粒1%
	21層	10YR2/4 暗褐色土	炭化物中粒1%、粘土大粒1%		20層	10YR2/4 暗褐色土	暗褐色土上層、粘土土、炭化物中粒1%
	22層	10YR2/4 暗褐色土	ローム大粒13%、ローム中粒5%、粘土中粒2%、炭化物中粒2%、炭化物中粒1%、粘土大粒1%		21層	10YR2/4 暗褐色土	ローム大粒1%、ローム中粒5%、粘土中粒2%
	23層	10YR2/4 暗褐色土	ローム大粒13%、ローム中粒5%、粘土中粒2%、炭化物中粒2%、炭化物中粒1%、粘土大粒1%		22層	10YR2/4 暗褐色土	ローム大粒1%、ローム中粒5%、粘土中粒2%
	24層	10YR2/4 暗褐色土	ローム大粒13%、ローム中粒5%、粘土中粒2%、炭化物中粒2%、炭化物中粒1%、粘土大粒1%		23層	10YR2/4 暗褐色土	ローム大粒1%、ローム中粒5%、粘土中粒2%
	25層	10YR2/4 暗褐色土	ローム大粒13%、ローム中粒5%、粘土中粒2%、炭化物中粒2%、炭化物中粒1%、粘土大粒1%				

図72 第E8号独立柱建物跡



[出土遺物] PIT1の2層から円筒上層d式、e式の土器片が出土した。PIT2の確認面から球状の敷石や地文のみの胴部片が出土した。PIT3確認面からは円筒上層d式又はe式土器の円縁部片や、断面形状が五角形の棒状の磨り石が出土した。PIT5底面からは無文の胴部片、1層からは円筒上層d式又はe式土器の胴部と底部片が出土した。このほか縁辺を使用した敷石、器面全体を研磨された小皿球状円縁が出土した。PIT6の1層から円筒上層e式土器の胴部片が出土した。

[時期] 本遺構の時期は、堆積土出土遺物から、円筒上層d・e式期に近いと考えられる。(坂本)

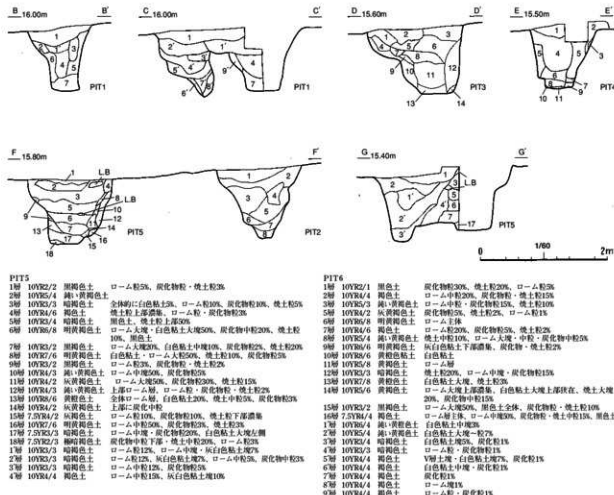


図75 第E10号掘立柱建物跡(2)

第E11号掘立柱建物跡(図76・78)

[位置・確認] 標高15~16m前後の緩傾斜地で、E・A・B-204に位置する。IV層上向で検出した。長軸方向はN-82°-Eである。

[重複] 第E54号竪穴住居跡と重複し、本遺構が占む。

[平面形・規模] 東西方向柱列、南北方向柱列で2間×1間の建物跡で、平面形はほぼ長方形であるが、ややPIT6が内側に陥る。桁行長584cm、梁行長268cm、柱穴間隔は、246cm-322cmである。掘り方は、平面形がほぼ円形で、径64~84cm、確認面からの深さ66~86cmである。PIT1~4・6の上部に段を持ち、中位から底面にかけてはほぼ直線的に掘り込まれる。底面は、柱痕のあったと推定される場所を中心に凹んでいる。

[柱痕] 柱痕と思われる痕跡はPIT1~3に底面が凹んだ状態になっているのが確認されている。このほか、堆積土中から確認できるものがPIT6である

[堆積土] 黒褐色土主体であるが、中位から下位にかけてPIT1・3・6に柱痕を抜きとった痕跡及び隙間にロームブロック混じりの堆積がみられる。PIT4は黒褐色土がほぼ水平に堆積する。

[出土遺物] PIT1の1・2層から円筒上層e式土器片が、PIT2からは円筒上層d式の胴部片が出土した。PIT5の2層、PIT6の14・16層からは円筒上層d式又はe式土器片が出土した。また、PIT

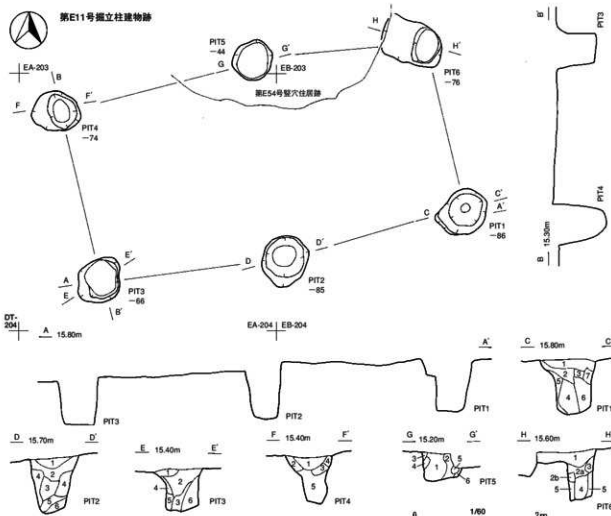


図76 第E11号掘立柱建物跡



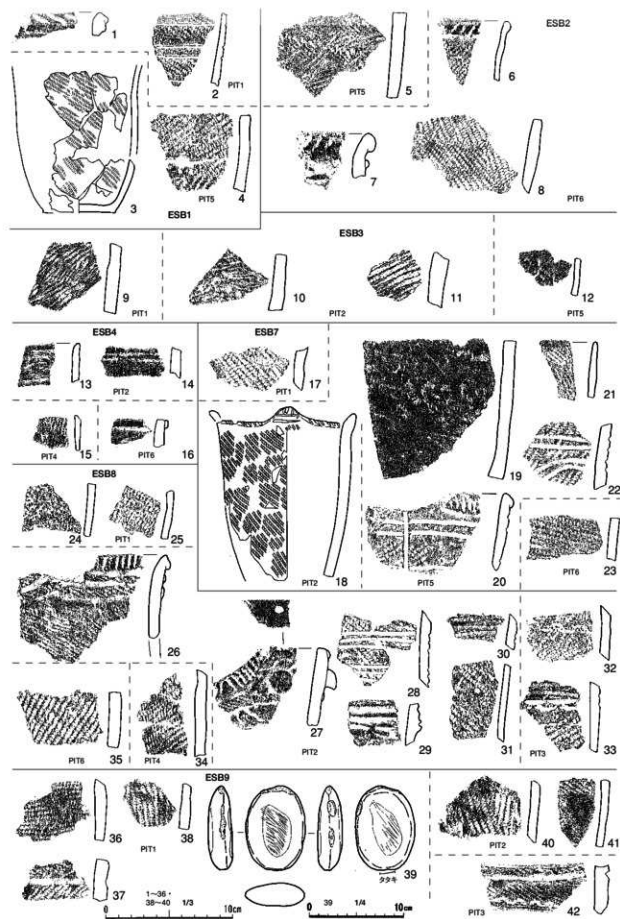


圖 77 獨立柱建物跡出土遺物 (1)

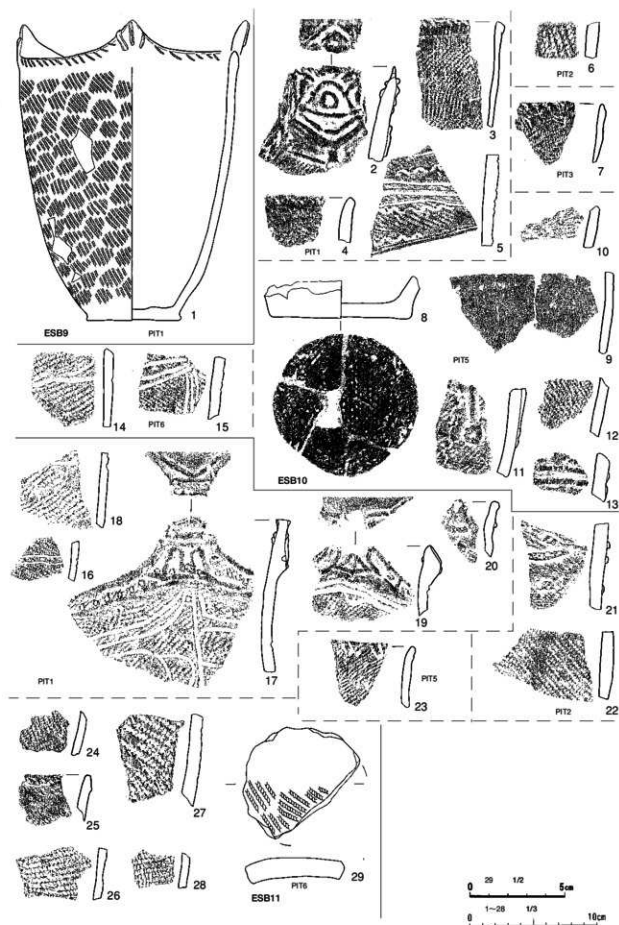


圖 78 獨立柱建物跡出土遺物 (2)

6の2層中から、土器片内盤が1点出土した。深鉢形の胴部破片を用いており、周縁を打ち欠いている。器表面には炭化物の付着が見られる。

[時期] 本遺構の時期は、堆積上出土遺物から門前上層d式又はe式期と考えられる。(坂本)

### 第3節 縄文時代の土器埋設遺構

#### 第E1号土器埋設遺構 (図79)

[位置・確認] F B-203に位置する。Ⅲ層上向で輪状の土器胴部を検出し確認した。

[掘り方・堆積土] 径約30cmの円形に掘り込んだ後、掘り方底面に接して土器を埋設させている。土器内堆積土及び掘り方埋土は黒褐色土主体で周辺の上と類似している。

[土器] 深鉢形土器の胴部下から底部が正位状態で埋設されている。土器内から遺物は出土せず、底部や胴部に穿孔は見られない。

[時期] 本遺構の時期は、土器の特徴から縄文時代前期後半と考えられる。

#### 第E2号土器埋設遺構 (図79)

[位置・確認] F B-202に位置する。Ⅲ層上面で輪状の土器割れ口を検出した。

[掘り方・堆積土] 径約35cmの楕円形状に掘り込んだ後、掘り方底面に厚さ5cm程土を入れて埋設させている。上部の状態は明瞭ではないが、おそらく壘と土器の隙間にも土を入れて埋設させたと思われる。土器内堆積土と掘り方埋土の区別はつかなかった。

[土器] 深鉢形土器の底部が、やや傾いた正位状態で埋設されている。土器内から遺物は出土せず、底部には穿孔などはみられない。

[時期] 本遺構の時期は、土器の特徴から縄文時代前期後半と考えられる。

#### 第E3号土器埋設遺構 (図79)

[位置・確認] E T-195に位置する。Ⅲ層上面で輪状の土器口縁部を検出した。

[重複] 第E45号壘穴住居跡と隣接する。第E45号壘穴住居跡の廃絶後に埋設されており、本遺構が新しい。

[掘り方・堆積土] 径約35cmの円形に掘り込んだ後、掘り方底面に接して土器を埋設させている。土器内堆積土及び掘り方埋土は黒褐色土主体で周辺の上と類似しているが、土器内堆積土の確認面及び中で焼土粒が混入している。

[土器] 土器は深鉢形土器の口縁から底部にかけての部位でほぼ完形である。検出時は5-10cmの破片状態であった。正位で埋設されており、底部や胴部に穿孔は見られない。1層からは二次調整のある剥片1点、4層より剥片1点、片面が丁寧に研磨された磨り石(79-4)が出土した。

[時期] 本遺構の時期は、土器の特徴から門前上層d式期である。(坂本)

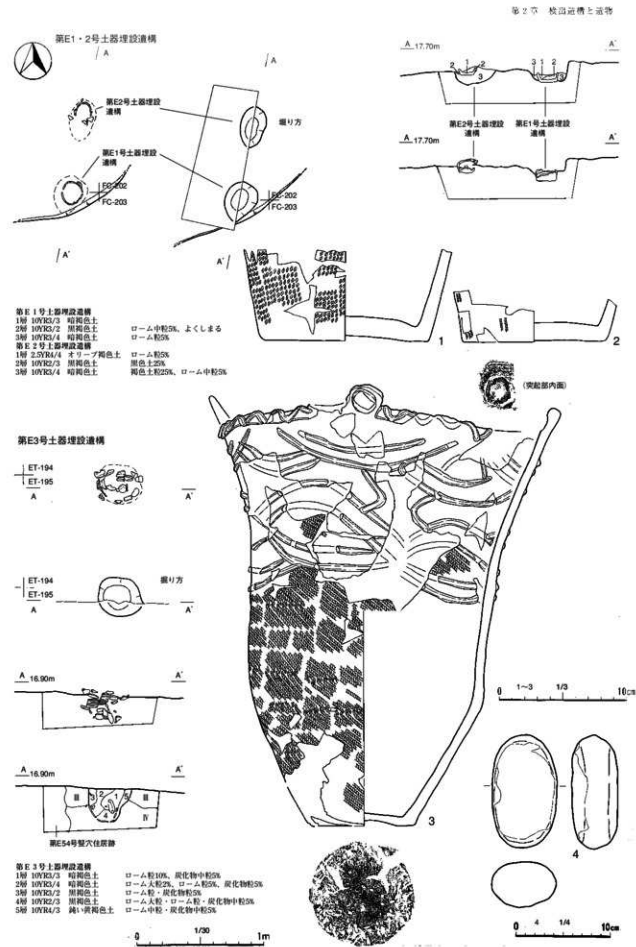


図79 第E1～3号土器埋設遺構